2008 8



# Architecture and Society

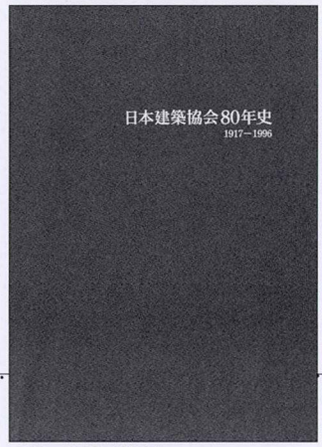
# 建築と社会

特集/建築と景観

日本建築協会

## 「日本建築協会80年史1917-1996」

# 増刷頒布中　頒価　3,000円




A4判・240頁・並製本

1999年７月に発刊した「日本建築協会80年史1917-1996」は、各方面から好評をいただいておりますが、このたび、皆様の強いご要望により、増刷・頒布することにいたしました。大正６年３月30日に関西建築協会として誕生した日本建築協会の80年の歴史を、様々な事業や委員会活動を通じて、また、本会設立者の片岡安、武田五一以降現在までの会員たちの社会活動を通して知ることができる記念誌として、A4判・240頁にまとめています。

とくに、協会草創期の大正・昭和初期の片岡安ら協会のメンバーと当時の大阪市長・関　一との交流を物語る一文は、大阪の都市計画史、あるいは関西の建築人物誌ともなっています。本会の歴史を知るだけでなく、建築を通して、それぞれの時代の雰囲気を身近に感じることができる大変貴重な資料となるものです。

購入ご希望のかたは、下記要領でお申し込み下さい。

＊

申 込 先　社団法人　日本建築協会
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階B室
TEL 06-6946-6981　FAX 06-6946-6984

頒　　価　１部3,000円（税・送料込み）

※増刷部数には限りがございますので、お早めにお申し込み下さい。

「日本建築協会80年史」

●日本建築協会の沿革／委員会活動／「建築と社会」の変遷／大正時代から現在までの本会主催の博覧会・展覧会・講演会／よろず相談住宅展／青年建築家・青年技術者顕彰／工高生デザインコンクール入選者etc.

●日本建築協会創立者と会を支えた38人のプロフィール（片岡　安・設楽貞雄・武田五一・池田　實・波江悌夫・竹腰健造・尾崎久助・東畑謙三・塚本猛次・福田朝生・佐野正一・葛野壯一郎・横濱　勉・松本禹象・宗　兵蔵・園部文雄・日高　胖・野村一郎・古宇田　實・松室重光・松井貴太郎・安井武雄・中澤誠一郎・坂　靜雄・今林彦太郎・井上新二・松本儀八・池田宮彦・錢高輝之・中西六郎・大林芳郎・鴻池藤一・伊東五郎・竹中錬一・鷲尾健三・松村雄吉・横尾義貫・足立　孝）

●座談会「戦中から戦後初期の協会活動」―尾亀清四郎・大林芳郎・小西　岬・佐野正一・横尾義貫・三品哲夫の6氏による終戦前後の協会活動の証言―

＊

■執筆ワーキンググループ
坂本勝比古／安達英俊／石田潤一郎／植松清志／梅宮弘光／桐浴邦夫／酒井一光／橋寺知子／山形政昭／吉田高子／和田康由

■80年史編纂委員会
長谷部朔郎／安達英俊／近藤達夫／谷淳之介／十倉　毅／原見昌志／和田康由／吉田悦二



「日本建築協会の遺産と功績」（坂本勝比古）より



「草創期の人々」より片岡安の項




# 作　品　募　集

## 「建築と社会」平成21年1月号の
## 「第15回会員作品特集号“私の空間作法”」

「建築と社会」1月号では会員作品発表の場として、**“第15回会員作品特集号・私の空間作法”**を企画しております。
対象は、建築、ランドスケープデザイン、インテリアデザイン、まちづくり、アート等、建築に関わるすべてとし、表現方法は、写真、CG等の別を問いません。
みなさまの個性あふれる作品の応募をお待ちしております。

※

**■提出資料**

作品は、竣工作品、計画案を問いません。下記要領に基づいてお送り下さい。

1．写　真　外観・内観・ディテール・模型写真等のプリント
（サイズはキャビネ判程度、5～6枚）
2．CG等　パース、コンセプト図等
（パースの写真撮影等は致しかねますので、印刷原稿となる状態でお願いします）
3．概　要　作品名称、所在地、設計者、施工者名、建築面積、延床面積、構造規模、工期など。
4．説明文　作品についての考えを300字程度にまとめて下さい。

**■掲載に際しての補足**

1．掲載料は無料です。誌面は白黒ページとなります。
2．写真の撮影者名は必ず付記願います。
写真に著作権等が生ずる場合は、応募者にて処理願います。
3．掲載頁数は、原則として1社（1人）1頁とします。また、8月末までに竣工予定の作品を掲載希望の場合、写真等の原稿期日は配慮致しますので、ご連絡下さい。
4．建物の特徴や特殊な事柄については簡単な補足説明をお願いする場合があります。
5．作品の掲載順及び誌面レイアウトを含む特集全体の構成は、委員会にて担当致します。また、応募作品多数の場合等は、編集の都合により掲載できないこともありますのでご了承下さい。

**■原稿期日及び送付先**

1．期　日　**2008年9月26日（金）必着**
2．送付先　社団法人 日本建築協会編集委員会
「会員作品特集号」係
〒540-6591　大阪市中央区大手前1丁目7番31号
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階
TEL. 06-6946-6981　FAX. 06-6946-6984

# 「建築と社会」誌

## 特集一覧●1986~2007

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

| 号 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1986 vol.67 | ●これからの住空間―都市型集合住宅にみる | ●屋根―そのデザインと素材 | ●現代デザイン―ポストモダニズム10年<br>●これからの防水工法 | ●インテリジェントビルの建築・設備計画 | ●自治体営繕と公共建築 | ●建築防災と法<br>●大阪市庁舎（第2期） | ●21世紀の住宅と設備 | ●開発―その創造的仕掛けの鍵をもとめて―<br>●ツイン21 | ●CAD―その応用と展開 | ●オフィス空間の構成 | ●第33回青年技術者 | ●インテリア・イクステンションとリニューアル |
| 1987 vol.68 | ●入浴物語 | ●腐食 | ●創立70周年記念号 | ●躍動する東海へ | ●貯蔵・保管施設<br>●大阪府立体育会館 | ●室内の仕上床 | ●駅 | ●行政建築家の可能性 | ●シティホテルの設備 | ●宝塚の街づくり＊ | ●建物と町並みの接点<br>●昭和設計作品集 | ●第34回青年技術者 |
| 1988 vol.69 | ●ホテル物語 | ●軟弱地盤と基礎<br>●文化と伝統―東海からの報告 | ●設備におけるLCCとリフレッシュ<br>●東畑建築事務所作品集 | ●建物の外装リフレッシュ＊ | ●都心居住 | ●中国地方の展望とひろしまのまちなみ | ●21世紀への照明＊ | ●制振＊ | ●超高層住宅を考える | ●集合住宅のリフレッシュ＊<br>●大阪府営善 | ●第35回青年技術者<br>●800号記念＊ | ●讃賓テレビ |
| 1989 vol.70 | ●夢をのせる輸送設備 | ●リゾート事情<br>●竹中工務店創立90周年記念 | ●色の復権<br>●東海の新建築と伝統技術＊ | ●省力化のための材料・工法 | ●まちづくりと法 | ●博覧会とまちづくり | ●都市環境創造と設備I | ●建築とアート | ●構造の省力化<br>●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集 | ●都市環境創造と設備II<br>●ユーザー参加のハウジング | ●第36回青年技術者 | ●最近の博覧会パビリオン |
| 1990 vol.71 | ●商品化住宅のデザイン＊ | ●ニュータウン・ルネサンス | ●東海の都市景観<br>●佐賀市文化会館＊ | ●スケール感 | ●プレハブ住宅技術の現在と未来 | ●国際花と緑の博覧会 | ●建築家のための設備知識―中規模オフィスビルによるケーススタディー | ●高強度化―設計の多様化をめざして―＊ | ●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割 | ●都市のナイス・プレイス<br>●兵庫県営緒の歩み | ●第37回青年技術者<br>●和歌山県の展望と景観＊ | ●高級感―建物の顔：感性の時代を迎えての外装材 |
| 1991 vol.72 | ●新しい都市空間づくり―I― | ●オフィス・プレジャー<br>●新しい都市空間づくり―II―<br>●建築の風景 | ●東海支部復活30周年記念 | ●大阪東京海上ビルディング | ●今、京都<br>●建築家のための設備知識―複合商業ビルによるケーススタディー | ●建築と土木<br>●毎日放送本社ビル<br>●近畿地方建設局営繕部 | ●一般号＊ | ●建築をめぐるトラブルとその解決<br>●建設現場のイメージアップ作戦 | ●空間のアイデンティティ<br>●きんでん写真集<br>●大建設計40周年 | ●自治体住宅政策への提言<br>●大林組創業100年記念 | ●建築と土木―構造技術の世界―<br>●第38回青年技術者 | ●スリムでタフなコンクリート<br>●21世紀の住まいを考えるシンポジウム |
| 1992 vol.73 | ●夢物語―人がかわる、まちがかわる― | ●こだわりのインテリア<br>●近畿の郵政建築15年の歩み | ●建築とデザイン―東海支部―＊ | ●建築家のための設備知識―集合高層住宅の設備システム― | ●地球環境時代の建築 | ●街創り、住まい創り―住宅・都市整備公団関西支社10周年― | ●木構造を使ってみませんか―集成材による構造―＊ | ●接着―建築分野への限りなき可能性 | ●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」＊ | ●屋台一仮設の魅力に学ぶ―<br>●ハウジングのメインストリームを探る | ●いま建築教育に何が期待されているか | ●京のかたちと色 |
| 1993 vol.74 | ●第38回青年技術者<br>●東畑建築事務所創立60周年記念作品集 | ●大阪府営緒 | ●東海の美術館・博物館 | ●市民劇場の舞台設備 | ●環境―限りある自然と建築とのかかわり | ●都市のスカイライン | ●映画の中のインテリア<br>●けいはんなプラザ・住友ホール | ●建築の再生―構造技術の役割―<br>●大阪市営緒 | ●国際的パートナーシップの可能性 | ●福祉のまちづくり | ●都市型住宅再考 | ●第40回青年技術者<br>●環境―人にやさしい空間創造をめざして |
| 1994 vol.75 | ●コピー文化の新時代<br>●広島の街創りアジア競技大会 | ●九州のインスタレーションと貌 | ●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊ | ●建築のエネルギーシステム | ●明日に向かって―会員作品＊ | ●いま、医療施設は | ●住空間における居どころへの視点 | ●まちなかの看板<br>●竹中工務店の集合住宅 | ●水と建築<br>●日本建築総合試験所 | ●建築設備のCGシミュレーション<br>●村野、森建築事務所 | ●構造美―建築の中の美<br>●集合住宅団地リニューアル | ●第41回青年技術者<br>●関西国際空港 |
| 1995 vol.76 | ●光がつくる風合の世界＊ | ●音―騒音から操音/創音へ | ●飛騨・美濃―まちの活性化と地方文化＊ | ●トイレから見た都市文化 | ●トイレ空間 | ●接合<br>●コスモタワー | ●ユニバーサルデザインとは | ●私の空間作法―会員作品 | ●新しい「都市・建築」の視点＊ | ●建築構造と社会の接点<br>●日建設計＊ | ●ライフラインと建築設備＊ | ●第42回青年技術者<br>●滋賀県建築課 |
| 1996 vol.77 | ●阪神大震災から学ぶ＊ | ●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊ | ●遠江―その地方振興と文化＊ | ●立体駐車場設備<br>●大建設計 | ●災害！非常時に生きる法体系<br>●OAPタワーズ | ●いま、プールがおもしろい | ●住まいの未来像 | ●マルチメディアがつくる世界 | ●キーコンセプトの新時代 | ●最新の大規模スポーツ競技施設の設備 | ●私の空間作法'96<br>●九州の元気<br>●りんくうの3作品 | ●第43回青年技術者<br>●近畿地建営繕部 |
| 1997 vol.78 | ●建築のロングライフ化をめざして | ●鉄ものがたり＊ | ●東海支部会員作品<br>●金沢・倭建―風土・文化とまちなみ・建築＊ | ●創立80周年記念/建築と私と社会―80人の眼―＊ | ●木造建築物の伝統技術とその将来 | ●住む空間の復興―法・制度の運用と新たな展開へ―<br>●住都公団関西支社 | ●素材の不思議<br>●大阪ドーム | ●新エネルギー<br>●住宅・都市整備公団改革への提言 | ●クロスワード都市OSAKA＊ | ●モザイク都市の住むかたち<br>●昭和設計40周年 | ●私の空間作法―会員作品― | ●第44回青年技術者<br>●京都駅ビル |
| 1998 vol.79 | ●新しいまちづくりの予感<br>●東畑建築事務所創立65周年 | ●Concrete<br>●九州とわたし、そして建築 | ●東海支部会員作品<br>●信州―諏訪とその周辺― | ●街並みの演出―最近の外構材料 | ●生活環境の安全・安心 | ●地球環境保全と建築 | ●心と体を元気にするインテリア | ●建築設備―ビルメンテナンスの立場から | ●建築への証言'98―21世紀に向けて | ●ゆれをとめる―たえる技術からかわす技術へ | ●私の空間作法<br>●2001年の医療施設 | ●第45回青年技術者<br>●駅とともに歩んだJR西日本の12年 |
| 1999 vol.80 | ●“らしさ”のデザイン<br>●建築を綾どる小粋なモノの仕掛人 | ●大阪市都市整備局 | ●東海支部会員作品'99<br>●北信濃―街並み修景と地域文化の再構築 | ●都市のパブリック | ●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる | ●大阪城天守閣平成の大改修 | ●改正建築基準法―まちづくり・すまいづくりへの展開― | ●私の目でみた環境問題 | ●アーバンインテリア―都市空間としてのインテリア | ●木とともに | ●私の空間作法 | ●第46回青年技術者 |
| 2000 vol.81 | ●21世紀のデザインの動向を見る<br>●安井建築設計事務所創業75周年 | ●中国支部―しまなみ海道と中国地方の街づくり― | ●東海支部会員作品2000<br>●越中・富山―地域文化の振興と新たな施設づくりの流れ | ●こころを癒す環境デザイン | ●測る―測定方法と測定結果が意味するもの― | ●スケルトン&インフィル | ●改正建築基準法―パートII― | ●100年後へのメッセージ<br>●日建設計創業100周年 | ●来世紀に引き継ぐ―わざ、もの、こころ― | ●時間 | ●私の空間作法―会員作品―<br>●21世紀の高齢者の居住環境 | ●第47回青年技術者 |
| 2001 vol.82 | ●エヌ・ティ・ティファシリティーズ | ●21世紀の建築設計教育 | ●東海支部会員作品<br>●岐阜・大垣 | ●IT社会におけるきずな | ●自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」 | ●成熟社会をささえるまちづくり | ●現代の日本の空間・文化を探る | ●環境―近未来に向けて今できること―<br>●大建設計―作品特集1996~2001― | ●建築の力都市の力 | ●緊張<br>●都市基盤整備公団関西支社 | ●私の空間作法―会員作品― | ●第48回青年技術者<br>●NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館＊ |
| 2002 vol.83 | ●国土交通省近畿地方整備局営繕部＊ | ●再生・リサイクル | ●東海支部会員作品<br>●愛知・名古屋 | ●生活環境の安全・安心―パート2― | ●塗装のいろいろ | ●都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方 | ●いま、インテリアデザインは<br>●漆町リバーブレイス | ●建築をささえるセンサー | ●建築とボランティア | ●時を超えて～サステナブルエンジニアリングの現在～ | ●私の空間作法―会員作品― | ●第49回青年技術者<br>●大阪市中央公会堂 |
| 2003 vol.84 | ●東畑建築事務所創立70周年 | ●九州の地域づくり・まちづくり | ●東海支部会員作品2003<br>●愛知・名古屋―この地の文化・芸術と建築・街づくりを考える― | ●サスティナビリティ~次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン~ | ●建築と五感 | ●都市計画法及び建築基準法等の改正 | ●コンバージョン―インテリアから発信するまちなみ― | ●介護と建築・設備 | ●建築とノスタルジー―建築の主観的価値について― | ●力と楽しくつき合う方法 | ●私の空間作法―会員作品― | ●第50回青年技術者＋青年技術者顕彰50年 |
| 2004 vol.85 | ●大阪市住宅局 | ●都市緑化 | ●東海支部会員作品<br>●愛・地球博＊ | ●省リスクな「まち再生」＊ | ●リニューアルの技 | ●地域住民主体のまちづくりと支援制度 | ●Product Design＋1 | ●銭湯～心地よさを求めて～ | ●建築家とは何か | ●巨大地震にそなえて | ●私の空間作法―会員作品― | ●第51回青年技術者 |
| 2005 vol.86 | ●震災から10年 | ●「健やか」<br>●長崎医療センター | ●東海支部会員作品2005<br>●東海における施設づくりへの新たな試み | ●建築の経済化 | ●住まい方の変化 | ●人工栽培 | ●次世代に伝える「木」の建築<br>●「建築と社会」1000号記念 | ●改正建築基準法と景観緑三法 | ●火災から守る | ●構造の過去から未来へ＊ | ●私の空間作法―会員作品― | ●第52回青年技術者 |
| 2006 vol.87 | ●都市環境デザインと参加のまちづくり | ●「地方空港の時代」～まちと共存する空港づくり～ | ●東海支部会員作品2006＋東海支部特集3部作＊ | ●都市再生の本質～光と影のはざまで～ | ●変容する家族形態とあたらしいライフスタイル | ●身近な省エネルギー―エネルギーをたくわえ、有効利用する～ | ●設計図が伝えるもの | ●建築物の安全・安心＊ | ●第53回青年技術者 | ●「セキュリティ」 | ●もしも…～構造が未来へつなぐ夢～ | ●私の空間作法―会員作品― |
| 2007 vol.88 | ●光り輝く京都の景観まちづくり | ●学校新時代 | ●東海支部会員作品2007＋東海支部特集3部作 | ●創立90周年記念―この10年、これからの10年 | ●あそび考 | ●こだわりが創る住まいのカタチ | ●住まいの設備と空間の移り変わり | ●建築系雑誌が伝えるもの | ●建築基準法等大改正 | ●第54回青年技術者 | ●ガラスを考える | ●楽しい構造の世界 |

＊は欠号

# 建築と社会

Architecture and Society

2008
No.1037
日本建築協会

8


■特集予告

9月号/第55回青年技術者

10月号/木造住宅を巡って〜主に法制度の観点から


編集委員会(平成20年度)

■副会長
井上　豊
松村　孝治
■編集担当理事
上原　正行
木戸　徹
佐藤　栄一
佐藤友美子
◎設楽　貞樹
竹中　統一
立成　良三
松村　孝夫
吉村　英祐
■特集小委員会
■計画分科会
★計画系
飯田　匡
飯沼　清明
鈴木　克彦
田中　慎治
田中　直人
紅谷　昇平
松田奈緒子
△三宅　次郎
守井　辰
吉村　英祐
★建築計画系
安部　新二
荒木　宏之
江副　敏史
奥村　明孝
菅野　忠司
神戸　嘉也
木多　彩子
△楠　敦士
小林　優子
所　千夏
野田　隆史
桃杷　健一
松森　織江
★インテリア・住宅系
阿部　泰浩
加藤　力
神谷　浩司
黒栁　亮
髙野　直樹
田中　浩介
戸井賢一郎
ペリー史子
本山　仁
■構造分科会
秋田　智
岸本　光平
瀧野　敦夫
鶴田　潤
中塚　光一
難波　尚
△房安　智也
松村　健
向井　洋一
安野　郷
矢野　勇二

■設備分科会
△赤澤　正治
梶井　宏修
河井　康人
北野　勝也
谷野　太志
夏井　重行
福谷　周
槻井　貴廣
村上幸三郎
山下　修
渡邊　裕之
■施工材料分科会
桜井　和男
平田　茂良
藤丸　啓一
松元　秀樹
△山岡　篤人
吉田　正友
■法令分科会
伊賀　誠
片岡　正和
金本　忠義
河野　学
坂本　智生
△谷本　和子
中迫　悟志
文山　達昭
■作品作風小委員会
○居内　章夫
池上　明
稲垣　和江
井上　雅祐
岩佐　進
加嶋　章博
倉澤奈千子
澤田　純一
戸川　勝之
鞆野　淳司
豊田　充広
鳥居　久人
長堀　晃治
西田　佳代
芳谷　晴彦
増田　敬彦
山田　俊紀
■広告企画小委員会
荒本　俊明
宇城　英彦
小笠原修一
○虎谷　伸幸
○前田　衛
南澤　浩司
森川　幸信
■10年委員会
赤木　隆
川上比奈子
熊田　将男
河野　浩司
齊藤　幸代
菅原　幸也
中村　文紀
○前川　治彦

◎委員長　○副委員長　△幹事



印　刷　2008年7月25日
発　行　2008年8月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電　話　06-6946-6981
振替口座　00910-9-39975
印刷所　㈱NPCコーポレーション
定　価　1200円〔税込〕


Journal of the Arghitectural Association of Japan

## 特集　景観と建築


■序
町並み景観と建築を結ぶ方向について●鳴海邦碩 —— 10

■各論
—大阪— 御堂筋まちなみ誘導基準について●林　厚志 —— 14
御堂筋のまちなみについて●高田　昇 —— 16
—京都— 京都祇園の景観について歴史的景観の保全の取組●高谷基彦 — 18
祇園のまちなみと建築●若林広幸 —— 20
—神戸— 神戸旧居留地における景観施策について●清水　陽 —— 22
企業市民による街並みづくり●山本俊貞 —— 24

会告　第15回会員作品特集号“私の空間作法” 1

作品作風　城南学園第二学舎 4

研究の風景　小林研究室（武蔵工業大学工学部建築学科） 6

gallery　S Low table（森　啓祐）●戸川勝之 8

REPORT　交差する文化　日本—フランス
京阪神都市圏のプロジェクトに見る人の移動
●Corinne Tiry／加藤邦男／馬場　郁／松田奈緒子 26

法令コーナー　全体計画認定制度の改正●西　晃弘 31

設備の頁　ヒートアイランド対策●宮崎ひろ志 32

書評　『建築—風土とデザイン』（徳岡昌克）—時代の堆積—
●笠原一人 33

information　「バウハウス・デッサン展」.「昭和を白黒（モノクロ）で旅する薗部澄写真展」.「KAZARI（かざり）日本美の情熱」.「蘇る記憶」〜下絵に残された真実〜. 2008イタリア・ボローニャ国際絵本原画展. トレース・エレメンツ—日豪の写真メディアにおける精神と記憶.「ニュー・コレクション—新しい美術との出会い」. 日新火災100周年記念写真コンテスト. 旧軽井沢で10月に建築ワークショップVol.5. 第5回NISCイソバンドデザインコンテストのグランプリ. 建築リサイクル法説明会開催. セーフティネット保証（5号）の指定業種が発表される.「新しい建築確認手続きの要点」.「建築仕上診断技術者」資格取得講習案内.「日本における近代建築の原点—吉田鉄郎の作品：大阪・東京ふたつの中央郵便局庁舎」. 第1回「ゆめづくり まちづくり〜ゆめは、人がつくる〜」賞募集. 企業ミュージアムの見学会. アートスペース虹「動く金属彫刻」 34

月間の動き　平成20年6月分 37

入賞発表　第7回読者と選ぶ「建築と社会」賞 38
【論考部門】
馬籠宿—町並み景観形成の歩み/大脇修二. 大正から昭和へ、日本建築協会が果たした役割の一断面/坂本勝比古. 建築系雑誌が伝えるもの/本多友常
【作品部門】
柊家新館. 神戸夙川学院大学. 十月桜の家



表紙　デザイン　花城 辰男（時空アート）
本文　デザイン　髙橋 善丸


城南学園
大阪総合保

作品

設計・監理■
安井建築設計事務所

施工■
大林組

# 城南学園第二学舎

**街に開かれたキャンパス**

城南学園は幼稚園から大学まで展開しており、街に開かれたキャンパスとして地域に根ざした教育活動を行っている。

今回建替えられた第二学舎は、創立70周年を記念した建物で、街に点在する学舎群の「要／ランドマーク」となることを要請された。学園の求心性を高めるため円弧状の建物形態とすることで、キャンパスの中心性を表現すると共に、学生の活動を街に発信する開かれたキャンパスの象徴として機能することを意図している。

建物機能としては、「学園全体の人々が集い・語らい・交流を促進する場」「日々の活動を発表・鑑賞することで感受性を高める場」また「書物を広げ知識と教養を深める場」として子ども保育センター・図書館・ホール・カフェなどを設けている。

このように地域に積極的に開放したプログラムとすることで、「街の教育・くつろぎ空間」としても機能することが期待されている。

今後は単に地域に点在する教育機関ではなく、街をキャンパスとする城南学園が真に地域と共存し、この第二学舎を中心に地域との密なコミュニケーションが生まれ、新しい出会いと交流と発見が育まれるものと考える。

（寺岡宏治・中原岳夫・清原健史／安井建築設計事務所）



付近見取図

所在地 ——大阪市東住吉区照ヶ丘矢田
敷地面積 ——1,657.63㎡
建築面積 ——1,037.91㎡
延床面積 ——3,303.68㎡
構造規模 ——RC造一部S・SRC造　5F
工　　期 ——2007年２月～2008年２月
最寄駅 ——大阪市営地下鉄喜連瓜破駅
撮　　影 ——エスエス大阪（津田裕之）
右中上のみ
安井建築設計事務所

左　：キャンパスの求心性を表現した円弧状の建物形態
右上　：街に開かれたキャンパスを象徴する大階段
右中上：街のシーンが変化していく円弧上のホワイエ
右中下：舞台背面に大開口を設置した開放的な記念ホール
右下　：子どもたちのアクティビティーを誘発する丸窓を配置した保育モール









研究の風景

武蔵工業大学工学部建築学科

# 小林研究室



図10　集合写真
（2008年６月）
ゼミ旅行で訪れた作品「たくさんの失われた窓のために」（新潟県十日町市）にて。

## ■研究室の概要

小林研究室では、都市や建物を、照明、色彩、環境心理の側面から、より豊かなものにしていこうと研究しています。照明や色彩などの視環境が人間の心理や行動にどのような影響を与えるかについて、現場での観察調査やインタビュー、模型実験、シミュレーションなどを通して明らかにしていっています。また、地域らしさが感じられると同時に、防犯性が高く、消費エネルギーを低く抑えられるような光環境の提案を、様々な街で行なっています。さらに、地域の落書き消去活動や壁画制作に取り組んだり、地元商店街のイベントの活性化などにも協力したりしています。

## ■光によるまちづくり

夜の街を光によって、豊かなものに変えていく活動を行っています。はじめに対象とする街を何度も訪れ、長期間取材し、その街の魅力が何かを探り出します。次に、そこにわずかな光を与えることで、街の持つ潜在的な力を引き出そうとするのです。模型を制作したり図面を書いたりするだけでなく、自分たちの提案する光の風景を街に実際につくりだすことに特徴があります。これまで７つの地域のまちづくりに関わりました。ここではその中で３つを紹介します。

- 五箇山・相倉合掌集落ライトアップ（図１、２）

世界遺産への登録10周年を記念して、2006年に相倉合掌集落を初めてライトアップしました。今でも人が生活する集落であるため、強い光で照らし上げる手法はとらないことにしました。その代わりに、建物から漏れる薄暗い窓明かりの強さを基準にして、明るさを抑えた繊細なライトアップを施したのです。見えない部分をつくることによって、日本的な色気を醸しだすことも狙いました。研究室の学生12名が２週間現地に泊り込んで、照明効果を確かめながら丹念に設営していきました。

- 富山市八尾町での照明計画（図３）

「おわら風の盆」で有名な八尾町は、山間にある情緒的な町です。ここで、井田川からせり上がった崖の上にある古い街並みの照明計画を提案しました（2005年～）。集落に向かって橋を渡る際、まぶしい光が邪魔になって、正面の崖の上の建物群を全く感じることができませんでした。そこで、女性歩行者を対象とした照明実験を行ない、安心して歩行できる最低照度に設定して、道路上のまぶしい光を排除しました。さらに、崖の上の建物一つ一つに、住民と話し合って照明を設置していきました。その結果、周辺の川の流れや勾配のある地形が感じられるようになり、また崖の上に人の生活があるということをありありと感じられるようになったのです。

- 白川村平瀬での照明計画（図４、５）

岐阜県白川村の平瀬温泉において、地形が感じられるような夜間の光環境を提案しました。建物と建物に隙間が多くある街並みで、そこからダイナミックな風景を見通すことができます。そうした奥行きのある風景を夜にも少しは感じられるようにする計画です。2006年に広範囲なエリアで提案した光環境を実験的につくり出しました。そして実験結果をもとに、新たな街路灯の実施設計が行なわれ、2008年に一部の施工が完了しました。

## ■Campus Illumination（図６、７）

毎年春、研究室をあげて行う一大イベントに、キャンパスイルミネーションがあります。これはキャンパス全体を舞台とした大規模な光のインスタレーションです。普段は真暗な夜のキャンパスも、この期間だけは幻想的にライトアップされます。地域住民をはじめとして、毎年２千名以上が訪



図１　相倉合掌集落
人の気配が感じられる日本的な柔らかな光。光の強さ（ワット数）や設置位置を変えながら、建物に固有の表情が生まれるように検討しています。



図２　相倉合掌集落
街路灯を消灯して、月明かりと同じ0.1ルクスの青い光を山の中腹から投光しました。薄い青色によって暖色の光を際立たせています。合計13棟の建物をライトアップしました。

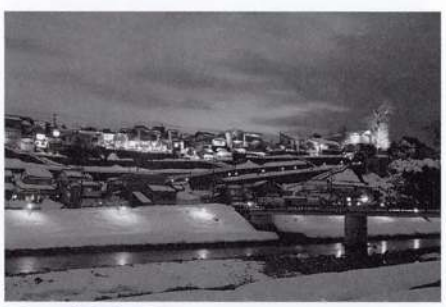


図３　富山市八尾町
集落全体をライトアップするのではなく、個々の家に小さく灯った光の集合で、人の生活が感じられる風景をつくりました。

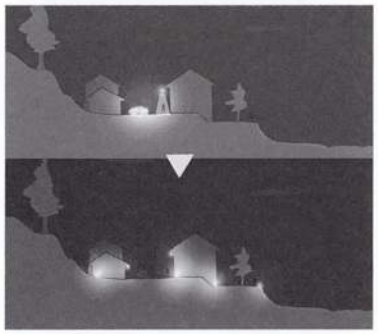


図4　白川村平瀬
現状（上図）では街路上だけが明るく照らされ、周辺の風景を感じ取れませんでした。提案（下図）したのは、建物の隙間に光を配して奥行きや高低がなんとなく感じられるような計画です。



図5　白川村平瀬
照明実験時の風景



図8　住民と協同で行った落書き消去活動（渋谷区代々木八幡）

れます。2008年には５千名を超える来場者を迎えました。元々は照明教育の一環として、実物大の照明作品を制作する課題を出したことからはじめたものですが、年々スケールアップして、作品のグレードも高くなってきています。今では大学生によるイベントという枠を超えて、プロのデザイナーにも負けない、日本一美しく楽しいイベントを実現しようと取り組んでいます。

教育とイベントを融合させたとして、2007年には「日本イベント大賞」（主催・社団法人日本イベント産業振興協会）特別賞を受賞しました。さらに2008年には照明作品としても評価され、照明学会照明デザイン賞奨励賞も受賞しています。

**■落書きからのまちづくり（図8、9）**

小林研究室では、照明のほかにも街の景観に関する研究にも取り組んでいます。中でも、近年街なかにあふれている落書きについて、環境心理学的立場から研究しています。ニューヨークのブロンクスから発祥したグラフィティと呼ばれる落書きは、景観を崩し、見るに耐えないものも多いですが、アートといえるようなものもあります。こうした落書きやグラフィティの持つ社会的な問題について研究し、街を活性化する手段として取り入れることを提案していま す。それは、「リーガルウォール」という合法的に絵が描ける場所を、住民と協力しながらつくっていくことです。これまでに代々木八幡や下北沢など、いくつかの街で実験的に試みました。

現在研究室では、落書きとストリートアートに関わる一般書を制作中です。大学院生と卒論生の５名が編集に参加しており、2009年春に刊行される予定です。

**■研究室の風景（図10）**

研究室の学生はそれぞれ自分のテーマを持っていますが、まちづくりに関わる調査や実験では、個人のテーマに関わらず、全員体制で臨みます。そのため、研究室単位で活動する機会は比較的多いといえます。数ヶ月に一度打ち上げを行なったり、年に一回か二回はゼミ旅行に出かけて親睦を深めたりもします。しかし本当の親睦は、そうしたレクレーションを通じて培われるのではなく、全員で力をあわせて取り組む光のイベントや研究活動を通じて生まれてくるのです。

研究室の活動は全国的にみても非常にユニークで、他に類するところはありません。そのため、大学院志望者は学外からも多く、新聞やテレビなどのメディアで取り上げられることも数多くあります。



図9　落書き消去後の壁画制作風景
図案は住民と話し合って、公募形式で決定しました。



図6　Campus Illumination「星空へのミチ」
真暗な階段とドライエリアに敷き詰められたキャンドルが、ガラスや金属に反射して、幾千もの星に包まれたように重複されます。



図7　Campus Illumination「ボクミチ」
光る紙袋を持ってキャンパス内を散策します。建物の前には多数の紙袋も設置され、その中を光る袋が歩いていきます。

武蔵工業大学工学部建築学科　小林研究室
（2009年４月に東京都市大学に改称）
担当教員　小林茂雄（准教授）
大学院生５名、学部生10名

158-8557　東京都世田谷区玉堤１-28-１
Tel・Fax　03-5707-2189
http://kobayashilab.net



まち　建築　ひと

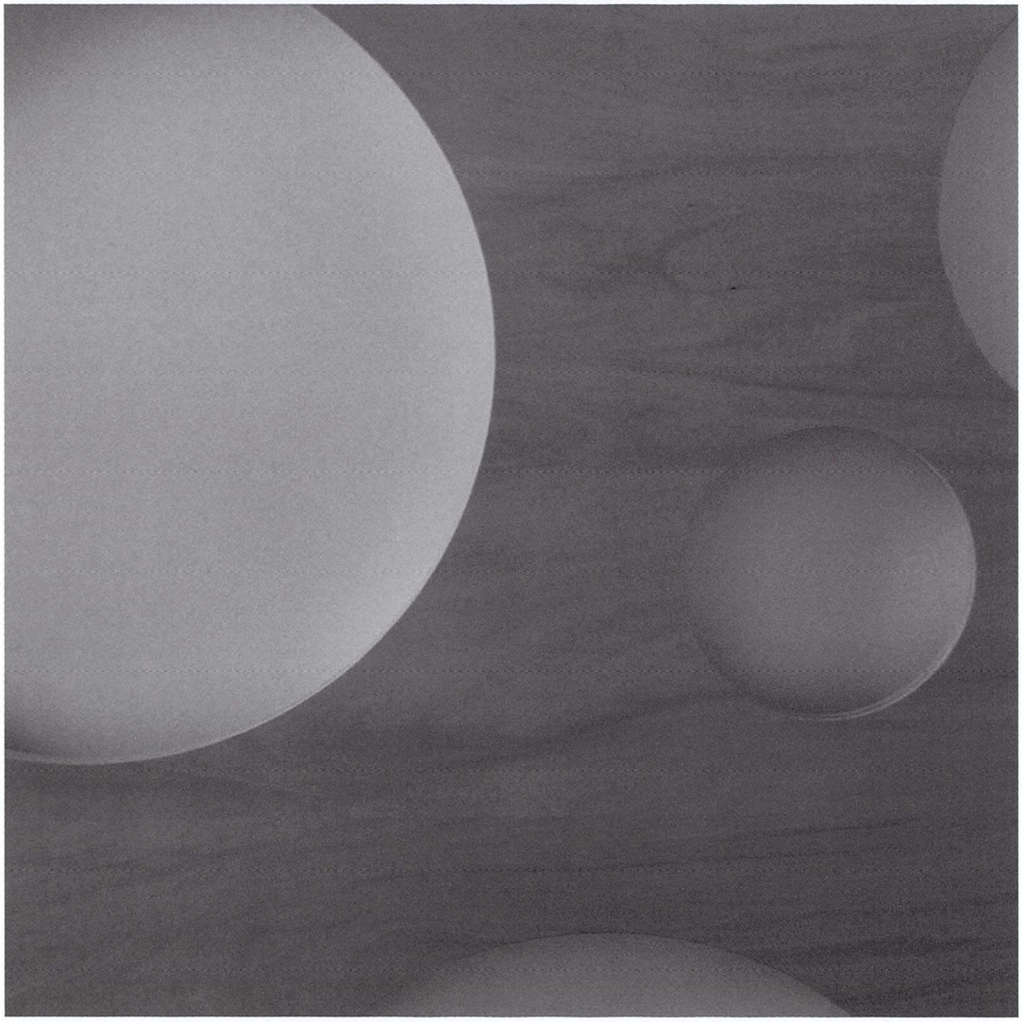
gallery

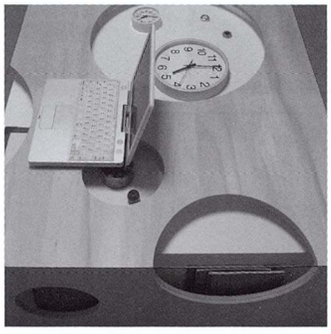
# S Low table

atelier DoN

森　啓祐　mori keisuke

1971年　生まれ
1995年　大阪大学環境工学科卒業
1995年　積水ハウス株式会社入社
2003年　友人とatelier DoN設立





書斎としてつかえて、
数人でお茶が楽しめて、
読みかけの本を数冊しまえて、
時計がおけて、
そんなテーブルを依頼された。

使われる部屋にはテレビ以外に、
他の家具はない。
この机が部屋での居場所を作り出す事になる。
あまり強く居場所を固定するのは、
せっかくの広々とした部屋のイメージを崩しそうである。
そこで、
テーブルの中心がぼやけるように、
複数の円をデザインに用いた。

合板という家具工場には必ずあるような材料で製作しコストを抑え、
２重に組む事で強度をあたえている。

寸法：1200×900×h400
材料：シナ合板　ポリ合板　ガラス
製作：ekrea／エクレア

企画編集　戸川勝之(作品作風小委員会)

特集

# 建築と景観

2005年６月１日景観法が全面施行され、今年で3年がたとうとしている。景観行政団体である地方自治体により景観計画の策定、景観条例の強化が進められる一方、規制緩和を行うなど景観に対して大きな役割を果たすこととなっている。

しかし、この景観法による法的拘束力を持った景観規制により、建築物の形態意匠や色彩、高さ、壁面線の位置など表層的な視覚的形態だけが保全されていく現実を生み出しているのではないだろうか。

規制はある意味簡単であるが、「景観」を美しくするにはこの規制をどう運用するべきか、また「景観」は誰のためのものなのか、大阪-御堂筋、京都-祇園、神戸-旧居留地の身近な３つの地域に焦点をあてて問い直すことにより、本来の建築と景観の関係を考える機会としたい。

編集委員　楠　敦士


【序】

町並み景観と建築を結ぶ方向について●鳴海邦碩

【各論―大阪】

御堂筋まちなみ誘導基準について●林　厚志

【各論―京都】

京都祇園の景観について歴史的景観の保全の取り組み●髙谷基彦

祇園のまちなみと景観●若林広幸

【各論―神戸】

神戸旧居留地における景観施策について●清水　陽

企業市民により街並みづくり●山本俊貞


企画　建築系分科会

序

# 町並み景観と建築を結ぶ方向について

鳴海邦碩

## ■凍れる音楽として建築■

「音楽にはさまざまなジャンルがある。クラシック音楽のように定まった形式上に成立しているものがあるが、一方で民俗音楽のように地域地域で異なった特徴をもった音楽がある。民謡は民俗音楽の一種だ。クラシック音楽や民俗音楽は急激には変化しない。新しい曲がつけ加えられていってもやはり既存の蓄積の方がやはりメジャーである。これに対して、流行音楽は変化してとどまるところがない。歌謡曲では古い曲はナツメロと呼ばれるが、クラシック音楽などはナツメロだけで成立しているといってもよい。ビートルズとスカルラッティとを同時に愛好できるという現代人の特徴をもって、磯崎新はR・ベェンチューリのハイブリッド建築を説明したが、建築にも先に述べた音楽のカテゴリーをあてはめてみるとおもしろい。国際主義の建物はクラシック音楽であり、はやりのポスト・モダニズムの建物はYMOといえるかもしれない。きらびやかに各地に建つ商業建築はさしずめ歌謡曲といったところだろうか。一方で景観の混乱の要因としか思えないような建物も多い。これは近所迷惑のカラオケの歌と考えられるかもしれない」。

この文章は、随分前になるが、『建築と社会』の1984年2月号に掲載された拙文である。説明が不十分な点があるが、その後も建築の表現を考える上で、同じような発想を繰り返して試みている。

「建築は凍れる音楽」といったのは、ゲーテもしくは同じドイツの詩人であるシュレーゲルといわれている。ゴシックの大聖堂建築を評して言われたようだ。細部の輝き、連なり変化しつつ調和する空間、そしてそこに生まれる荘厳な全体構成、なるほどシンフォニーが思い浮かべられる。

磯崎がビートルズと並べたスカルラッティは、おそらく18世紀前半に活躍したドメニコ・スカルラッティだと思う。ドメニコの父も作曲家でこちらはアレッサンドロ・スカルラッティである。スカルラッティはバロック音楽の作曲家だから、ビートルズの音楽とスカルラッティの音楽の両方を愛好する人は、現代社会ではそう珍しくはないだろう。なかには日本の歌謡曲と現代音楽を愛好する人がいても不思議ではない。

音楽は時間とともに流れていくが、建築は「凍った」まま存続し続ける。建築を設計する場合に、その時々の気分で、今回は歌謡曲風、次は現代音楽風などといった設計をされると、環境ははなはだしく混乱することは間違いない。とりわけ現代音楽は、新しい音楽の創造への挑戦の結果生み出されたもので、美しいとか心地よいというよりは緊張感に溢れている。創造性への挑戦は大事だが、そうした現代音楽的な建築がそこここに建つと、心地よい環境からほど遠い環境が形成されてしまうと思う。

多くの人々の目に長くさらされ、我々の生活環境を構成する建築は、長い時間の経過の過程で人々の評価を受け、多くの人々が愛好する「音楽」のようである必要があるのではないかと考える。地域地域にふさわしい「建築の音楽」が発見され、造られなければならない。それだけではない、それぞれの「建築の音楽」が地域が奏でている音楽とも調和することが望まれる。

## ■環境への「おもむき」と景観■

「環境共生」の時代である。環境というのはそもそも相互的な関係を意味する概念であり、環境は、常に、「何々のための」あるいは「何々が生存するための」環境という意味で存在している。その意味で、環境は常に「共生」的なものであるといえる。

一方、共生という言葉には、「共に生きる、共に補い合いながら生きる」という意味がある。こうした共生の関係は、「人間と人間」、「人間と自然」、「人間と技術」、「人間とそれぞれの場所」、において存在することが期待され、その結果として「人間が生き続けて」いけることが望まれる。これが環境共生の真の意味であると思う。

これらの共生関係のなかで、環境共生の観点からあまり論じられることがないのが、「人間とそれぞれの場所」との共生関係ではないだろうか。この意味するところは、人間の活動が、その場所の歴史性を含んだ場所性と折り合うことだと思う。それによってその場所の「場所性」がより高められ、いわば場所の個性が生まれる。そうした場所の個性は、都市のクオリティを高めることに貢献する。

「それぞれの場所における共生関係」の概念と重なるような、期待される空間づくりに関して、オギュスタン・ベルクは、著書『風土としての地球』（注1）のなかでなかなかうまい説明の仕方をしている。ベルクの文脈を簡潔に示すと次のようになる。

我々の文明は自然と空間に及ぼす大きな力をもっているのだが、その作用がうまく働いておらず、「いたたまれなさを感じる風景」が広がりつつある。これを克服するために、我々の社会の、空間および自然に対する関係の「おもむき」が問われている。

「おもむき」に対してフランス語では、「sens」が使われている。ベルクの著書の訳者によれば、著者の指示に従い、「事柄・趣旨、ようす・感じ、味わい」を意味する名詞の「趣き」と「向かう・行く、ほのめかす」を意味する動詞「赴く・趣く」の二つから「おもむき」という訳語をあてることにしたという。これらから推察すると、「おもむき」とは、「感覚的に是認できるよう統合的に関係を

取り結んで行く方向あるいはその行為」ととらえられるのではないだろうか。「それぞれの場所における共生関係」は、こうした「おもむき」によって高質のものになるのだと思う。

## ■阪神・淡路大震災からの復興景観から学ぶ■

阪神・淡路大震災からの復興を、『街の復興カルテ』の作成を通じて10年に渡って調査し、急速な市街地変容を目の当たりにした（注2）。通常であればゆっくり、分散的に変化するのだが、被災地ではそれがまるで映画の早回しのように変化したのである。

一般的な被災市街地では、大規模店舗や高層マンションの増加や、多数の残存空地の存在等により雑然とした景観が生まれた。また、被災建物の公費解体が存続可能な建物の取り壊しに拍車をかけた傾向がみられ、その結果として、景観形成上有効な建物が相当程度失われた。

震災復興という緊急時にあっても、景観形成に配慮された事例もいくつか見られた。その一つが地区計画の策定である。とりわけ西宮市では19地区で地区計画が成立した。当市で多数の地区計画が成立したのは、「大きな敷地の復興ではマンション建設が進む」ことに対する西宮市職員やコンサルタントの確かな予見と素早い対応、そしてそれに対する住民の理解があったからである。

大規模な復興事業にも、質の高い空間づくり、景観づくりに取り組んだものがいくつかある。日本都市計画学会の賞を受賞した旧居留地の復興まちづくり（2006年度）や六甲道の復興再開発（2007年度）はその例である。前者は、コンサルタントに支援された地元協議会の熱心な取り組みが実ったもので、後者は、行政および計画・設計者の熱意と地元住民の理解によってもたらされたものである。

現行の都市計画の枠組みのなかでも、地権者や事業者、計画者の見識と努力があれば、質の高い都市空間を生み出す可能性がある。しかし、そうしたハッピーなケースは残念ながら現実には少ない。そのことは各地で問題視されているマンション建設を見ればわかる。都市計画を含んだ制度によって、敷地に建つ建物の外枠がいわば鳥かご状に決定される。それが決定されれば後の具体的デザインは、いわゆる敷地主義で建築者のほとんど自由に任せられる。容積制がそれに輪をかける。

日本の都市計画制度がマンション問題のような現象をもたらしやすいということに関しては、以前より指摘されてきたことである。日本の都市計画制度の整備に貢献した宮沢美智雄は、1978年に次のように述べている。

「（わが国の都市計画は）基本計画・詳細計画の体系とは異なり中間計画的拘束力をもつ全体計画であるため、都市の実態の変化に対応し、これを誘導するにはやや硬直的な性格を持つ。〜〜〜さらに将来の整備の方向は、現場の担当者と地域住民のふれあいの下で進められる都市計画の実践のなかから生まれてくるものと考える」（注3）。

先に紹介した西宮市の地区計画や旧居留地、六甲道の復興まちづくりの事例は、「現場の担当者と地域住民のふれあい」がもたらした好例であろう。

## ■都市環境デザイン会議・関西ブロックの議論と取り組み■

さて、私が参加している都市環境デザイン会議・関西ブロック（以下JUDI関西という）では、1993年以来、セミナーの開催を続けてきており、継続して都市環境におけるデザイン（建築デザインを含んで）の果たすべき役割について議論してきた。また年1回開催するフォーラムにおいても、この課題を取り上げてきている。

最近の例を紹介すると、2006年の第5回JUDI関西セミナーは「<際立たずおさまる>美しさか、<目立つ破調>の美しさか」のテーマで行われ、2006年に開催した第15回JUDI関西フォーラムは「デザインの力」がテーマであった。詳しくは以下を参照願いたい。（http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/judi/index.htm）

2006年に入って、京都市が新しい景観施策を検討しているという情報を得て、JUDI関西では、意見を表明すべきという観点から連続的な議論を行った。短期間であったが、密度の高い議論が交わされ、それを踏まえて意見書を京都市に提出した（2007年3月）。意見書の要旨は以下のようなものである。

京都市の新景観政策を基本的に支持し、積極的に推進されることを期待するとともに、その先進的な理念と構成内容に対し敬意を表したい。また、より広範な市民の合意を形成し、内容をより確かなものにするプロセス形成を目指していることを高く評価する。このような基本的な考えを示すとともに、以下の内容の提言を付した。

1．景観基準とその運用は地域の十分な理解によって支えられる。そのためのプログラムを早急に市民に示すことが必要である。プログラムには、小地域ごとの景観特性を掘り下げ、合意を得ながら景観基準を定め、絶えざる修正・変更を可能にするしくみ、また、運用段階における市民と専門家が参加するデザイン審査システムなどが含まれよう。

2．景観基準にもとづくデザイン・コントロールを広汎な地域のなかで実行していくためには、また長続きのする地域参画型のシステムを運用していくためには、市の担当部局の人員増強を中心とする充実強化が必須である。

3．建て替え誘導ではなく、修復や保全策を充実するなかで、環境共生・ストック重視の新しいまちづくりにつながる政策となるよう方向づけたい。従来なら既存不適格となる高層マンションについても、現存する建物として大切に扱うなどの対応策を工夫すべきである。

4．住み続けられてきた都心というのが、他の大都市にはみられない、京都の都市づくりの伝統である。とくに職住共存地区における15mの高さ制限は、住みかつ働く環境を確保しようとする力強い宣言である。ここでは、地上階まわりのデザイン誘導とともに、歩行環境や身近かな生活環境改善策を合わせた総合的なまちづくり策としての取り組みが期待される。

5．建築的に洗練された京町家などの低層建物と未だ定形を模索しつづけている中高層建物が混在する状況のなかで、これからどのような町並みが形成されていくか、決定的な見通しはいまのところない。市民の参加を得つつ、気長に地域ごとの景観イメージを捜し続けるしくみをつくり、支援すべきである。

「都心活性化の施策が優先されるべき」「既存不適格建物を発生させる方策には基本的に問題がある」などの意見があったが、職住共存地区の15mの高さ制限にはメンバーの大方の賛同が得られた。支持の意見には「今回の京都の景観問題は、京都の特別な問題だけでなく、これまでの都市計画、建築についての基本的な問題が問われているような気がします」といった意見もあった。他方、

「景観基準」については、議論が集中した。「節足」「レベルが低い」「トップダウンの基準」で問題ありとする意見が多数あり、「1.」に示した表現で、将来に期待したいとの趣旨で提言書がとりまとめられた。

実はJUDI関西では、このような課題に関して議論がこれまでも繰り返し行われており、重要な事項であるので、その一つの例を以下に紹介しておきたい。

## ■デザイナーの立場と市民の立場■

それは、デザインないしデザイナーの職務や責務に関するテーマのセミナーで発表された丸茂弘幸（関西大学教授、2008年3月退職）の意見である。丸茂は、20世紀の女流哲学者ハンナ・アレント（注4）の著作を引き、デザイナーの行為の性質について論じた（注5）。文脈上、重要と思われる部分を紹介すると以下のようになる。

- 職人芸は、ただ物のあるべき精神的イメージ、すなわち「イデア」だけを相手にすることによって成り立つ。Homo faber「工作人」は公衆から隔絶され、保護され、身を隠さねばならない。独居なしにはどんな作品も生み出すことはできない。
- 完成品の存在に対する最大の脅威は、ほかならぬそれをつくりだしたメンタリティそのものから生じている。物の世界をうちたて、建設し、飾り付ける場合に必然的に優位を占めるはずの基準や規則は、それが完成された世界そのものに適用されるとき、全く危険なものとなる。
- 「工作人」は創造者である前に自然の破壊者であり、地球全体の支配者として振る舞う。暴力の経験、自己確証、完成の喜びは「工作人」に特有のものである。
- カントは美も公的性格をもつと考えた。「われわれは同じ喜びを他の人びととも分かち合うことを希望している」がゆえに鑑賞の判断力は公然と議論されるし、鑑賞力は「他のすべての人びとの同意を期待している」がゆえに論争の対象になりうる。

ハンナは、美は公的性格を持ち、それゆえに、その受容は政治的な判断に委ねられているとし、政治的な活動能力と純粋に製作的な活動能力とを仲裁し媒介するのは、「洗練された常識人（丸茂）」であると述べている。そのような考察の上に、丸茂は、「〈世界の物〉は専門家が作るべきであるが、〈いかなる物が世界に現われるべきか〉については、市民がこれを選ばなければならない、と言っているように思われる」と結論付けている。

私自身は今ではほとんど図面を描くことはないが、以前は開発提案の作成とか実際の設計に関わるワークをいろいろとする機会があった。そうした機会に、提案作成に関わる自分と提案を評価したり分析する自分とが何か違う人格のように感じることがしばしばあった。前者がいってみれば「暴力的」なのである。そうした性質は、限られた時間のなかで、限られた情報に基づいて、構想された枠組みに従って、「決定」しなければならないことに由来しているらしいということを薄々感じていた。

「物の世界をうちたて、建設し、飾り付ける場合に必然的に優位を占めるはずの基準や規則は、それが完成された世界そのものに適用されるとき、全く危険なものとなる」という一文で述べられている「危険」とは、一体どのような危険なのだろうか。「物」を建築だととらえると、一つの建築だけが音楽を奏でてしまう過剰な自己主張の危険であり、共生関係や「おもむき」への無配慮の危険なのかもしれない。そうした危険もあるが、ハンナが一番危惧したのは、建築を無批判に受容することによってもたらされる市民社会の文化の脆弱化ないし退化なのではないかと考える。

そのような文脈で考えるとき、町並み形成における「景観基準」ないし「ガイドライン」は新しい意味をもってくる。

## ■近代の環境変化をどう考えるか■

2006年、日本建築学会に「近代の空間システム・日本の空間システム特別研究委員会」が2年間の年限付で設置され、筆者はその委員長の任に当たった。この特別研究の一環として、2007年8月、学会の大会時に「近代の空間システムと日本の空間システムの形成と評価」のテーマで研究協議会を実施した（注6）。主題解説は、陣内秀信（法政大学）、重村力（神戸大学）、佐藤滋（早稲田大学）、西村幸夫（東京大学）、布野修司（滋賀県立大学）が行った。以下に議論の要点を紹介する。

「近代の空間システム」に対する理解とその影響は、時代と共に変化してきた。陣内は、人道主義にも裏打ちされた、いわば「幸せな近代化」が展開し、日本都市においても近代的な空間が形成された時代があった、と述べた。重村も、明治期の京都における和風の進化、大正の和風の形成、戦前の東京や大阪の都市計画など、評価できるものが多いと述べている。こうした認識は、布野が指摘した、第二次世界大戦が終わるころまでは、世界が一定の単位の地域で構成され、近世との連続性があった、という「世界単位論」（高谷好一）の認識とも相通じるところがある。

しかし、人びとの幸福の向上を実現するはずだった近代システムは、市場経済メカニズムにその生成作用の重心を移すことによって、予想されなかった現象をもたらすようになった。都市空間の商品化、工業製品によるアッセンブル化、投資の対象になることによる都市空間の変質、などなどである。それを佐藤は、「モデルとしての近代空間システムと市場経済・近代経済社会システムとの間に乖離が生じている結果」と断じている。この乖離を人間の側に引き寄せて解消する必要があることは、研究協議会に参加した人びとの共通した問題意識としてある。

一方、都市空間の基幹的部分が公共施設化（公物化）し、都市空間が公的に整備・管理されるものになってきた。この公物的空間の整備・管理指針と、私有化された部分の管理指針とが相まって都市空間の形成を誘導しているといえる。しかし、この両者の指針がより望ましい方向に連携し作用しているとはいえず、とりわけ後者の指針が、経済的な論理、所有の論理の中で緩く定められてきたのが日本の特徴である。

主題解説者の、これからの取り組みに対する提言の要旨は以下の通りであった。

①80年代に獲得された人間の感覚を大切にする都市づくりを再評価する（陣内）。

②あきらめずに、長期的に取り組んでいく必要がある。何世代にもわたってつくっていくことによっていい環境ができる（重村）。

③わずかな空間のコードを顕在化させつつ新たなシステムを丁寧に重ねる必要がある（佐藤）。

④小さなしかし切実な変化の集積として個々の空間は存在しており、それらをシンタックスとして都市空間に生かす（西村）。

⑤都市組織、街区組織、都市型住宅のあり方について、フィールドから、地域から、街の中から、問題を立て、返せ（布野）。

協議会の資料として、41編の論説が寄せられた。詳しくは資料集を参照していただきたいが、

上記の文脈に関連したものの要点を紹介しておきたい。近代の空間システムに関する理解についての指摘、「町の再評価」に関する指摘、主体間の意図を調整する新たな場の提案であり、重要な視座である。

・「日本では都市が都市壁により囲まれていなかったため、（略）ヨーロッパの歴史的都市をどう評価するかを考えることなく、進歩的都市計画（他方に文化的都市計画がある；引用者）の思潮を導入してきた。都市計画においても景観や歴史的環境の保全が重視されるようになった今日、ヨーロッパの都市壁に囲まれてできてきた都市空間を通して近代都市計画の意味を再考する必要があろう」（和田幸信）。

・水谷頴介は「まち住区素描」（1974）のなかで、次のように述べている。「「まち住区」は、区、町丁といった行政単位や市街地整理のための単位ではない。近隣住区とかいった生活行動圏とも異なった層に意味をもち、位置づけられる。だから、行政の利便と合理性によって画定された区画ではなく、また、小学校区といった日常生活の行動圏設定に目的をもつものでもない。「まち」それぞれの成り立ちや歴史、活動、さらに、「まち」を発展維持させてきた住民の主体性を重視する」。同じ頃、上田篤も「まち」の再評価を提言している（鳴海邦碩）。

・地域の文脈を踏まえた魅力ある空間の創造、維持・向上・再生のためには、個人（私）でもない行政（公）でもない、公（官）でも民でもない、「地域が、地域のために、地域の自治のもとで、地域の価値<利用価値と資産価値>の創造、維持・向上のために、地域の不動産開発・利用・管理を行い、地域経営を行う」新時代の空間マネジメントシステムが必要である（齊藤広子）。

## ■町並みをつくる建築への期待■

建築は単独で歌うのではなく、町並みとして、ハーモニーを奏でて欲しい。建築のありようは、「人間が生き続けて」いけるよう環境共生を実現するものであって欲しい。とりわけ、「人間とそれぞれの場所」との共生関係を実現し、都市のクオリティを高めることに貢献して欲しい。現代の地域環境が喪失しつつある「おもむき」を回復して欲しい。このようなさまざまな期待が町並みをつくる建築に寄せられている。

なぜそうした町並みが必要とされるのかについてはさまざまな考えがある。例えば、新アテネ憲章では、21世紀は都市ツーリズムの時代であり、「都市の質はそれ自体が資産であると同時に、経済的繁栄に貢献する」との認識が強調されている（注7）。町並みは「都市の質」の重要な要素だ。何にも増して重視しなければならないのは、町並みは我々の社会の文化を表すものだからである。

しかしながら、これまで見てきたように、質の高い町並みの生成を妨げている要因も多々存在する。ハンナの言葉を借りて丸茂が指摘するように、建築家の「イデア」重視の姿勢や創造のための孤独な作業にも問題が生成する要因がある。また、日本の都市計画制度や建築制度がもつ効力の限界も影響していよう。そうした条件下ではあったが、わが国の近代化の過程を振り返ってみるとき、いわば「幸せな近代化」の過程もあった。ところが、加速度的に展開する経済優先の都市空間づくりは、これまでとは異質な都市空間の生成を引き起こしている。

このようななかで、先に紹介した建築学会研究協議会において、主題解説者たちが提案した事項は重要である。すなわち、「80年代に獲得された人間の感覚を大切にする都市づくりを再評価する」「あきらめずに、長期的に取り組んでいく必要ある」「何世代にもわたってつくっていくことによっていい環境ができる」「わずかな空間のコードを顕在化させつつ新たなシステムを丁寧に重ねる必要がある」「小さなしかし切実な変化の集積として個々の空間は存在しており、それらをシンタックスとして都市空間に生かす」「都市組織、街区組織、都市型住宅のあり方について、フィールドから、地域から、街の中から、問題を立て、返せ」といった取り組みである。

阪神・淡路大震災からの復興において、質の高い町並みを生み出すことができた事例は、地元住民、行政、専門家の密接な協働によって生み出されたものであった。また、それらがいずれも、その場所の特質の認識と理解に基づいていたことに注目しなければならない。この「その場所の特質」こそが、町並み形成における「景観基準」ないし「ガイドライン」が基づくべきものだと考える。問題はそれを誰がどのようにつくり、どのように運用するのかである。

ハンナは、洗練された常識人に「物の世界」を護る役割を期待した。かつて日本の幕末には、町並みのなかに蔵などの恒久性の高い建物を建てるときは地元の年寄りに点検してもらうことを定めた町があったし、筆者が訪問したフランスの小都市では、永くその地に居住している高齢の専門家に建物の形態をチェックしてもらうことを義務付けていた。このような、実際の町並みと個々の建築を結びつけ確認していく仕組みが、現代社会においても、いや現代社会だからこそ必要であると考える。

宮沢が述べた「将来の整備の方向は、現場の担当者と地域住民のふれあいの下で進められる都市計画の実践のなかから生まれてくる」という指摘、建築学会の協議会で述べられた「望ましい都市空間を実現するためには、新たな<制度>ないし主体間の意図を調整する場が必要とされている」という指摘、さらにはJUDI関西が京都市に提案した「小地域ごとの景観特性を掘り下げ、合意を得ながら景観基準を定め、絶えざる修正・変更を可能にするしくみ、また、運用段階における市民と専門家が参加するデザイン審査システムなど（が必要である）」という指摘、これらの指摘は同じ方向を指し示している。そのような文脈で考えるとき、町並み形成における「景観基準」ないし「ガイドライン」づくりは、町並み景観づくりがレベルアップする一つの契機となるものと確信する。建築関連組織においても、「景観基準」や「ガイドライン」の、自主的で積極的、かつ前向きなアセスメントが実施されることに期待したい。

（なるみ　くにひろ／大阪大学名誉教授）

注）

1. オギュスタン・ベルク著、三宅京子訳『風土としての地球』筑摩書房、1994年
2. 鳴海邦碩・小浦久子著『失われた風景を求めて：災害と復興、そして景観』大阪大学出版会、2008年に詳しく紹介されている。
3. 宮沢美智雄著「都市計画法の制定と土地利用計画」『都市計画』通巻104号
4. ドイツ系ユダヤ人で、ナチスの政権獲得後、フランス、アメリカに亡命。ハイデッガーの影響を受けたといわれる。全体主義およびそれを生み出すにいたった西欧の政治思想を研究した。
5. 丸茂弘幸「ハンナ・アレントにおけるデザインと政治」1999年JUDI関西フォーラム『参加型都市環境デザインをさぐる』資料より（http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/judi/forum/forum8/fo8003.htm）
   丸茂弘幸「都市空間の回復；思考の軌跡と展望」2008年第1回JUDIセミナー記録より（http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/judi/semina/s0801/index.htm）
6. 『近代の空間システムと日本の空間システムの形成と評価』日本建築学会、2007年
7. 鳴海邦碩編著『都市の魅力アップ』、学芸出版社、2008年に詳しく紹介されている。



—御堂筋—

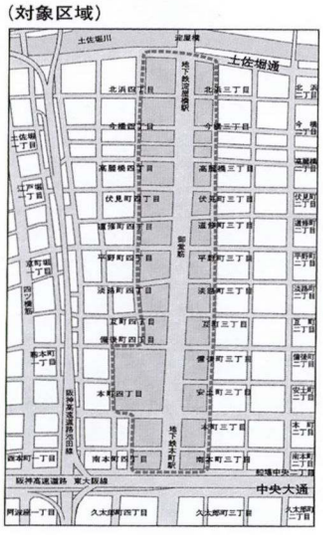
各論1

# 御堂筋まちなみ誘導基準について

林　厚志

大阪

（対象区域）




【図1】

## ■はじめに■

御堂筋は、大正15年10月に着工し、工期約11年７カ月をかけ、昭和12年５月に完成をした大阪駅前から難波にいたる約4.4km、幅員約44mの道路である。昭和45年には北から南へ一方通行化されている。その沿道は秀吉の時代に形成された東西の町割りの歴史を有し、特色豊かな企業や賑わいを集積し、業務・商業・文化面にわたり大阪の中枢機能を担ってきている。

## ■戦後高度成長期の景観保全■

現在の御堂筋の景観をなす建築物の高さの規定は、大正８年に都市計画法の公布及び市街地建築物法が公布され、商業地域である御堂筋は100尺（30.3m）基準が適用されたことが基になっている。また、昭和９年には、市街地の美観を維持するための地区として美観地区にも指定されている。

昭和25年に建築基準法が公布され、同時に市街地建築物法が廃止されたが、建築物の高さ制限31mについては容積地区制創設の昭和44年まで受け継がれている。

御堂筋では、昭和の初期から当時の大阪を代表する近代建築が建ち始め、その後戦災で大半の沿道建築物が焼失したが、特に淀屋橋～本町区間では昭和30年代後半の高度経済成長期に多くの建築物が建築され、昭和40年前半頃には、高さの揃ったまちなみが形成された。しかし、昭和38年に「容積地区制」が創設され、昭和44年の都心部の容積地区の指定に当たって高さ制限が廃止されたため、統一的形態をなして街区の美観を構成しているまちなみが破壊される危険性が生じた。そこで、大阪都市計画地方審議会から「御堂筋のように既成の建築集団がすでに統一的形態をなしている地区については、これを維持するよう高さの制限等について容積地区施行と同時に必要な法的手続きをとること」との建築形態について意見が出された。これを受けて、淀屋橋から本町４丁目の間の御堂筋沿道の景観の保持について、大阪市建築局長名で建築関係団体に依頼をするとともに、「御堂筋の景観保持に関する建築指導方針」を策定し、31mの高さを維持するため協議・誘導を行ってきた。

## ■御堂筋沿道建築物のまちなみ誘導に関する指導要綱の策定■

高度成長が進むなか昭和40年頃以前に建設され、建設後30年以上経過した建築物が新しい時代への対応のため、建替え更新を行う必要性が生じてくると予想されることと、新しい国際化や情報化に対応した、御堂筋のあるべき姿を問う時代の要請もあり、平成４年10月大阪市長が学識経験者等で構成する御堂筋まちなみ整備検討委員会へ「淀屋橋から本町間を中心に、今後の御堂筋のまちなみ整備のあり方について」の諮問を行い、平成６年３月に同委員会から大阪市長に対して「21世紀に向けて、国際都市大阪のシンボルストリートにふさわしい、うるおい・にぎわい・ゆとりのある魅力のあるまちなみづくり」を基本理念に「御堂筋の街並み整備の今後のあり方について」の提言がされた。

この提言の趣旨を踏まえ、平成６年11月に「御堂筋沿道建築物の、まちなみ誘導に関する指導要綱」を制定し、平成７年１月から淀屋橋から中央大通間の御堂筋沿道区域内の敷地で新築・増築等の建築物を対象に誘導を行ってきている。

**（1）御堂筋まちなみ誘導制度の概要**

・適用区域（図１）　淀屋橋から中央大通間の御堂筋両側一街区

・基本理念　国際都市大阪のシンボルストリートにふさわしい、うるおい・にぎわい・ゆとりのある魅力あるまちなみづくり

・誘導目標　①イチョウ並木を主体とした緑豊かな都心のオアシス空間づくり　②世界の人々が出会い、活動し、交流する活気とにぎわいのあるまちづくり　③文化のかおる楽しく歩ける空間づくり　④風格と秩序ある美しいまちなみづくり　⑤市民・企業・行政の協力による魅力ある都市環境および都市景観の創造

＜誘導基準の概要（抜粋）＞（図２）

・壁面の位置　御堂筋沿道：街路から４m後退、その他の道路：道路境界（船場建築線）より２m以上後退

・建物の高さ　御堂筋に面する外壁：50m

50mを越える部分：10m以上後退させ、高

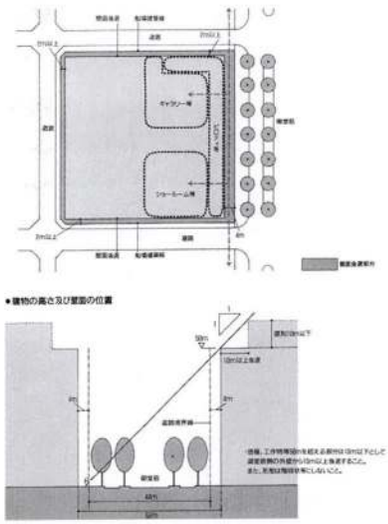
さを原則として10m以下

・壁面後退部分の用途・形態　御堂筋沿い：既設の歩道とあわせて歩行者空間として利用できる形態とし、イチョウ並木と調和した植栽やモニュメント等の設置、その他：船場建築線による後退部分とあわせて幅４m以上の歩行者空間とする。

・建物低層部の用途形態　一般の歩行者が憩い、くつろげる公開空間と一体性のある公共性・文化性の高い施設の設置（文化施設、ショールーム、各種インフォメーション施設等）

・建物の外観　外壁の材料・色彩は周辺の建物との調和に配慮しながら、風格ある美しいまちなみを形成していくうえで質の高いものとし、隣接する建物との連続性にも配慮したデザインとする。また、高架水槽、クーリングタワー等を屋上に設置する場合は、ルーバーやスクリーンなどで隠す等、意匠面で工夫を施す。

・広告物等　風格ある美しいまちなみの形成を図るため、袖看板設置禁止、２階以上の壁面広告物の禁止等の、一定に条件がかかる。



【図２】

## ■最近の御堂筋の動き■

### （１）御堂筋まちなみ誘導制度による建築更新状況

平成７年から行っている御堂筋沿道まちなみ誘導制度策定から13年を経過した現在建築物の更新状況は、建替えされた建築物は９棟（都市再生特別地区を除く）を数え、工事中は２棟で建替えが徐々に進んでいる。

### （２）御堂筋地区地区計画の決定・変更

平成13年度にビジネスゾーンにふさわしい土地利用を誘導するため淀屋橋から長堀通までの間で風俗、娯楽関係の用途を制限する地区計画を決定した。その後、都市再生という観点から御堂筋の活性化に向けて、御堂筋から船場へのエントランス空間として重要と考える本町地区と、ウォーターフロントに位置し、歴史と文化の薫る中之島と隣接する淀屋橋地区において、御堂筋に活力とにぎわいを与える新たな拠点として、景観に配慮しながら民間の都市開発を積極的に誘導をしていきたいと考え、淀屋橋地区、本町地区をにぎわい拠点ゾーンの新しい拠点と位置づけ景観形成を図っていく地区とした。平成19年２月「淀屋橋地区」「本町地区」において、土地の高度利用と敷地の共同化・一体化を進める地区として地区計画の変更を行った。

### （３）都市再生緊急整備地域の指定

平成14年に施行された都市再生特別措置法に基づき、御堂筋周辺地域が都市再生緊急整備地域に指定をされた。特に淀屋橋から本町までについては、御堂筋に面した外壁の位置や高さを整えるなど、まちなみに配慮した都市景観事業を推進するとされている。

御堂筋まちなみ誘導制度適用区域内において、北浜の愛日小学校跡地の市街地再開発事業を行う「淀屋橋地区」及び本町のにぎわい拠点ゾーンである「本町三丁目南地区」を、都市再生緊急整備地域内の特例制度である都市再生特別地区に指定している。

淀屋橋地区は、御堂筋に面する外壁の高さ50mと後退距離４mの連続性を維持したうえで、50mの外壁天端から１：１の斜線の範囲内で最高高さを70mまで緩和している。**（写真１）**

本町三丁目南地区は、公的な賑わいスクエアの整備等を条件に高度利用を誘導し、御堂筋に面する外壁の高さ50mと後退距離４mの連続性を維持したうえで、背後の高さを140mまで緩和している。両地区とも御堂筋沿道の良好な景観の創出については、スカイラインの形成、新しい景観形成によるまちなみの連続感などについて、景観シミュレーションを活用しながら検討を行っている。

### （４）景観法による景観協議会を組織

平成17年６月に景観法が全面施行され、大阪市においても平成18年２月に市域全域を対象として景観計画を策定した。これにより、良好な景観の形成に取り組んでいくために景観法施策の活用が可能になった。

そこで、平成18年12月に御堂筋沿道建築物まちなみ誘導制度適用地区において、沿道地権者、学識経験者、公共施設管理者、まちづくり団体、景観行政団体（大阪市）で御堂筋地区景観協議会を組織し、御堂筋のシンボルストリートにふさわしい良好な都市景観の形成に向けて、公民が協力して作り上げていくために議論する場として活動している。



写真１

## ■御堂筋の未来に向けた美しいまちなみの形成を目指して■

御堂筋の魅力は「景観」なくして語ることはできない。御堂筋には４列に植えられているイチョウ並木があり、春には緑の若葉をつけ、夏には太陽の光をさえぎり涼しく、秋には黄金色に色づき、冬には葉を落とすことにより暖かさを届ける四季を感じられる通りであり、地球にやさしい通りといえるだろう。昨年（2007年）70周年をむかえた御堂筋がこれまで歴史の中ではぐくまれてきた優れた景観を守り、育てていくことによって、世界に誇れる「御堂筋ブランド」が作り出されていく。

今後は、御堂筋だけでなくその界隈である船場も含めたまちなみを考えていくことにより、新たな付加価値が生まれ、賑わいや回遊性が生まれ「歩いてみたい街」「住んでみたい街」「働き続けたい街」になっていくものと考えている。今後も、御堂筋・大阪の美しい景観の保全・再生・創造に取り組んでいきたい。

（はやし　あつし／大阪市計画調整局計画部
都市デザイン担当係長）

各論

# 御堂筋景観の過去・現在・未来

高田　昇

大阪

## ■御堂筋景観がもつ意味を問う■

1991年９月、当時の大阪市長が記者会見で「御堂筋沿いの建物の高さ制限を見直すことも検討したい」「沿道ビルの建て替えが促進され内需が伸びる。市民にとってはオープンスペースが生れる。ビル側と市側と利益は一致する」と一石を投じたのが事の始まりである。

国際花と緑の博覧会が開かれ、関空、学研都市と民間活力導入の大型プロジェクトにより、国の内需拡大策にのって大阪・関西の景気浮上を図ろうとしていた時期である。言うまでもなく、すでに大阪の経済力の衰えは誰の目も顕著で、さらなる景気の冷え込みがしのび寄る気配がしていた。70年に及ぶ「高さ百尺制限」の封印を解く気球の昇る背景であろう。

以来２年程行政側は「御堂筋まちなみ検討委員会」を中心に見直し、新しいガイドラインづくりに入り、日本建築学会など専門分野でも継続的な研究・提案活動が展開されたが、かみ合わないまま1995年に31メートル規制が緩和される結果となった。

それから15年、建て替えは促進したか、新しい御堂筋景観が形成されつつあるか、そして犠牲を払って獲得しようとした経済の活性化が達せられたか、私たち誰もがその評価をしっかりとする責任を負っている。筆者の印象としては、何か良い方向に変わったと言える材料を見つけるのはむずかしい。

これまでの御堂筋をはじめとする大阪の景観をめぐる議論と施策は、都市のあり方への理念、市民のコンセンサスの両面で不安定な状態のまま、壁面線や軒高、建物の高さ等の数字の理屈づけに終始していたような印象も受ける。もっとも、空間、経済、仕組みといった課題について重要な論点があったことは確かである。しかし「御堂筋の生命線、他にない魅力はイチョウ並木である。建物のデザインや高さはイチョウ並木に合わせる、イチョウを生かすのが一番のポイントだ」という市民の声があったが、このような声をどれだけ真剣に受け止めてきただろうか。

なぜ景観なのかを、深く考えてみただろうか。景観は何よりみんなのものであり、市民の感性や創造力を育むものであり、都市再生の源泉となる人の内面を培うものである。短期につくられるものではないし、短期に成果が生れるものではない。しかし壊すのは、いとも簡単である。これまでの御堂筋をめぐる施策の是非を論じるよりも、御堂筋とは何か、その景観はどのようにしてつくられ、そのことのもつ意味を問い直すことから考えてみたい。

## ■景観を構成する基本フレーム■

御堂筋の景観の良さは、道路、並木、建物が一つの基本的枠組みを構成しているところにあると思う。その骨太のバックボーンに思いを馳せておきたい。1926年に着工後11年の歳月をかけて完成した幅員43.7m、延長約4.4kmのメインストリート建設。そして、歩道・植樹帯・車道の断面構造に約800本のイチョウ並木。その間に地下鉄が整備され、平行して大阪城公園がつくられるという近代都市計画の果実でもある。特に淀屋橋・本町間の「百尺制限」を続けてきた区間に立地する50棟程の建築が生み出すスカイライン。それらが基本的な要素として景観フレームを形づくっているのである。少なくとも、このような「史実」を知らずに論ずるべきところではない。

建築単体については見るべきものは少ないと言う人もいるが、建築の評価もまた、その場所性との関係で捉えられるべきであろう。建築家・竹山聖氏は「御堂筋といえば、どんな建築家もまさに「大阪の顔」を創るということで、情熱を傾けてベストを尽くしてつくられた建物が並んでいるといえる。御堂筋がある種の威厳ある雰囲気をかもし出しているのは、高さ制限や行政レベルでのインフラへの投資と同時に、御堂筋沿いの建築に関わった人々の努力の賜物である」との言葉を15年前に残されている。同じ頃、東孝光氏は「現在の壁面線と31mの軒線のそろったスカイラインは、我々市民が共有する大事な価値ある財産として守るべきである。しかし、現状凍結は大変困難であり、そのために都市活動が沈滞することも考えられる。そこで、その後部のセットバックした部分で新しい容積増加の建築的工夫を個別に追求させる。この空間

はできる限りデザインの創造力が生かされ、それぞれの建物の個性が発揮できるようにする」との提案をされている。いずれも傾聴するに値する見識であろう。

そもそも今までの蓄積を全部ふり捨てて一からやるということでは都市景観は成り立たない。都市は過去の遺産、個性を引き継ぎながら長い年月をかけてつくりあげられてきたものであり、その上に新しい魅力を付け加えていく作業の連続の中から都市の深みと味わいが生れてくるものである。御堂筋の今日の姿はルールをもって70年かけてつくり上げられたものである。都市景観は時間軸で捉え、構想しないと、誤った結果をまねきかねない。仮に今から新たなルールで新たな景観をつくろうとすると、２年に１～２件の割で更新されている現状からみると50年～70年かかることになる。そしてその間は「不揃いのメインストリート」を耐えねばならない。しかも15年前に新ルールをつくったばかりである。もう御堂筋の景観なんてそれほど重視しなくてもよい、という割り切った発想もありうるのだろうか。

## ■抑制が生み出す経済と空間のデザイン■

ここで景観と経済の関係についてふれておきたい。なぜなら御堂筋での景観論がむし返される時は、必ず「今の景観に問題がある」という空間の論理ではなく、「今のままでは経済活動の足かせとなる」という経済の論理であるからだ。①基準容積率（1000％）さらには上限（1200％）が高さ規制で消化できない。②規制が、建て替えを押えている。③下層階や建物の足元まわりに、にぎわいを欠く。という論調を通じて御堂筋の活性化が高さ問題にあるとされているが、規制緩和による床面積増が大阪経済の活性化に与える影響はそれほど大きいと考えられるだろうか。御堂筋は今まで大阪の経済に大きな役割を果たしてきたが、今後とも御堂筋が同様の役割を果たすことが可能か、また、それがよいことかどうかについては疑問がある。

そもそも、土地所有者が目標とする容積率が、高さ規制で消化できないから緩和を、という論理では、景観形成は成立しない。スカイラインを維持しつつ、東孝光氏の提案や地下利用によって容積率に見合う床面積がとれるというシミュレーションもされている。道路に面して、にぎわいをかもし出すことは、あってよいと思うが、そのことも緩和とは基本的には無関係である。ヨーロッパ各地の都市にみられる抑制された高さ、デザインの中で、昼夜わかたず品のある活気に満ちている様子は、端的にそのことを実証している。御堂筋のような傑出したメインストリートの経済的価値は、もう少し長い目で見てもよいのではないだろうか。

御堂筋沿道の土地価格が、常に大阪市内で特段に高い水準を維持してきたのは、抑制の成果であり、景観があってのことではないか。他所でもその土地にふさわしいコントロールは、必ず土地の価値を高めるという証明がされてきたと思う。筆者が長年住み、仕事をしている帝塚山は、住宅地としてはほとんど地価の下落を経験しないところである。それは大阪市内で数少ない風致地区で、建ぺい率40％、高さ15mの枠をはずさなかったからに他ならない。これまでに何度もこの規制をはずせないか、と「期待」されていた。その実感は筆者自身もあった。しかし辛抱してよかった、と今多くの人たちは理解している。富田林・寺内町に代表される歴史的町並みの保存においても同様である。全国のいずれの地でも、「規制は地価を下げる」と危惧されたが、結果は逆であった。

質の高い景観の地域は、経済価値を高める時代なのである。また帝塚山でも建物の更新はきわめて順調であり、御堂筋においても着実で、ごく常識的に建設年代に見合った建て替えが進んでいるとみてよいのではないだろうか。それ以上に更新を加速させねばならない時代なのだろうか。むしろストック活用の時代のモデルとなることの方が、さらに御堂筋の活性化につながるように思われる。淀屋橋西の住友グループの一画がその良い見本を示しつつある。

大阪駅北、中之島西部などいくらも開発ボリュームをアップさせるにふさわしいエリアは残されている。御堂筋に今以上の交通負荷をかけるような床面積拡大路線をとるのが、大阪のまちづくりにとってどうなのか、という議論もあってよいと思う。

## ■成熟した都市のクオリティを守り、育てる都市空間■

やはり15年前の議論の中で、関西経済同友会常任幹事の萩尾千里氏は「御堂筋は地権者・建物所有者だけのものではない。大阪に関わっている人々皆の共有財産である。広い意味で御堂筋をどう考えていくかという議論を巻き起こしていく、そして御堂筋だけではなく、今後の大阪の開発についてもオープンに議論が行われ、コンセンサスをつくっていかないと進まないだろう」と語っている。

御堂筋は、多くの経済人、団体、市民に愛され、70年を遡る企業連携のルーツをもつ。しかし今日ではそれらの知恵や力が集中的、効果的に発揮されるには至っていない。

筆者は「御堂筋パレード」より「光のプロムナード」を提唱する橋下知事のセンスの方を好ましいと思っている。「パレード」は旧式のイベントで、ロマンが感じられないが、「光」は美しく、感性を刺激するのを期待できる。誰かれなしに、賑やかせば良いという空間でない。高質なソフトが組み込まれるべき空間である。そのような認識が共有できれば、これからの御堂筋には多様な主体が関わり、複合機能化が進み、成熟した都市の文化、交流のステージとして、より魅力空間としての活用が十分に期待できる。

御堂筋の魅力を高め、より活用を図っていくために、その時々の首長や一部企業の考えに左右されるのではなく、持続するマネージメントの仕組みづくりがあってよいのではないか。

（たかだ　すすむ／都市計画家・COM計画研究所代表）



各論

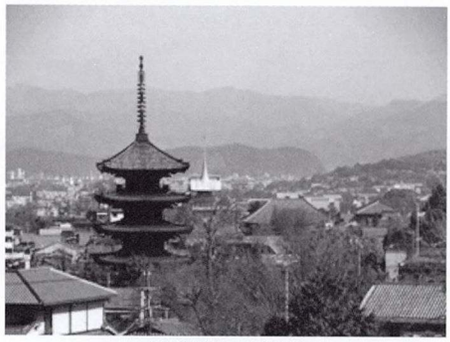
# 京都祇園の景観について 歴史的景観の保全の取組

髙谷基彦

京都

## ■京都の歴史的景観■

京都は、三方を低くなだらかな山々に囲まれ、鴨川や桂川が市街地を北から南へ緩やかに流れ、大都市にも関わらず四季折々に美しい自然景観に恵まれている。また、市内には世界文化遺産に登録された社寺等を始め、数多くの歴史的建造物や史跡名勝が点在し、豊かな自然景観と融合した大変深みのある歴史的景観を形成している。



八坂の塔と市街地

しかし、そういった文化財級の歴史遺産だけが京都の歴史的景観ではない。京都の都心部や西陣地域などの旧市街地には、主に江戸期から明治期に建築された京町家と呼ばれる伝統的な木造建築物が２万数千軒残っている。

その中では町衆の暮らしや生業などの生活文化が受け継がれ、そして育てられてきた。また、上七軒や祇園などの花街でもお茶屋様式などの伝統的な木造建築物が残り、伝統文化やもてなしの文化が継承されてきた。これらの伝統的な建築物による風情ある町並み景観も京都の歴史的景観を語るうえでは忘れてはならないものである。

## ■ゾーニング規制による歴史的景観の保全■

京都の景観保全の取組は、1930（昭和５）年から始まった。東山山ろくや鴨川周辺などに風致地区を指定し、風趣ある自然景観や歴史的景観の保全に取り組んだ。また、1967（昭和42）年には古都保存法による歴史的風土特別保存地区を指定し、京都の自然景観の骨格ともいうべき三方の山々の保全に凍結的保存手法を導入した。

一方、市街地景観の整備については、1964（昭和39）年の京都タワーの建設に対する景観論争を一つの契機として、ようやく目が向けられるようになった。その後、京都市では、調査や審議を続け、総合的な景観条例としては全国に先駆けて1972（昭和47）年に京都市市街地景観条例を制定した。

この条例では、国の制度である美観地区制度を導入するために、そのデザイン基準や高さ制限を定めた。祇園地区を含む鴨東地域を広く美観地区に指定し、デザイン規制を行うとともに、高さ20mを超える建築物を制限した。また、高さ50mを超えるような工作物を規制する「巨大工作物規制区域」制度を創設した。

この条例制定の翌年に、市街地の大半に高度地区を指定した。それは、1970（昭和45）年の建築基準法の改正により、高さ10mを除き絶対高さ規制が撤廃されたため、京都でも超高層ビルの建築が可能になることを危惧したためである。即ち、京町家などの町並みが残る歴史都市・京都に超高層ビルは相応しくないとの考えから、高さ規制を継続することとしたのである。当時、都市計画に定める高度地区は、国の通達により土地利用や住環境の観点から定めることとされていたが、それに加えて独自に市街地景観の保全の観点を高度地区に導入したのは注目すべきことである。

その後も、歴史遺産等が点在する三方の山々やその山ろく部は風致地区や歴史的風土特別保存地区、また市街地では美観地区や高度地区のゾーニング規制により景観の保全に取り組み、これまで数度にわたってそれぞれの指定区域の拡大を行ってきた。

## ■修理・修景による歴史的景観の保全整備■

ゾーニング規制による景観保全の仕組だけでは十分ではない。規制することも大事だが、伝統的な建造物を長く使うためには修理も必要だし、伝統的な町並みにそぐわない建築物は、町並みに調和するように「修景」していくことが必要である。こういった積極的な歴史的景観の保全手法を、早くも1972（昭和47）年の市街地景観条例に用意していた。

それは、「特別保全修景地区」制度である。特別保全修景地区制度は、歴史的な町並み景観が残る地区において、その保全・再生を図るため、外観の変更に対する規制と併せて修理・修景に対する助成制度を設けたものである。後に文化財保護法の改正により創設された伝統的建造物群保存地区制度のモデルにな

った。京都市では、特別保全修景地区としてまず産寧坂地区を指定し、続いて1974（昭和49）年には、祇園新橋地区に指定し、町並み保全の取組を始めた。



祇園新橋地区（伝統的建造物群保存地区）

文化財保護法の改正に伴い、両地区とも1976（昭和51）年に国の伝統的建造物群保存地区に移行し、その後、社家町で有名な上賀茂地区、愛宕街道沿いの嵯峨鳥居本地区を伝統的建造物群保存地区に追加し、現在、京都市内の伝建地区は４地区になっている。これまでこの４地区に対して支出した助成金は合計12億円あまりにのぼるが、その成果は、現地に行かれたときに実感していただけるものと考えている。

以上が国の制度を活用した取組であるが、それだけでは、必ずしも十分な対応ができないため、1995（平成７）年に全面改訂した京都市市街地景観整備条例において、京都市独自の２つの制度を創設した。一つは、歴史的景観保全修景地区制度（現在３地区）で、美観地区又は風致地区内にある歴史的な町並み景観を形成している地区に指定する。もう一つは界わい景観整備地区制度（現在７地区）で、まとまりのある地域色豊かな賑わいのある景観特性を示している地区に指定する。いずれも外観の保全義務と修理・修景の助成という仕組は伝統的建造物群保存地区制度と似ているが、国の制度よりはやや緩やかな仕組の制度である。



祇園町南地区（歴史的景観保全修景地区）

祇園地区においては、祇園新橋地区の北側に位置する祇園縄手・新門前地区を1996（平成８）年に、また、祇園甲部や宮川町、八坂通を含む祇園町南地区を1999（平成11）年にそれぞれ歴史的景観保全修景地区に指定し現在に至っている。

## ■祇園地区における景観規制等■

以上、京都市における歴史的景観の保全手法について概要を述べたが、次に祇園地区に焦点を当てて、現在の景観規制等について説明しよう。

現在の規制は、昨年９月から実施した新景観政策による規制である。まず、この政策の背景について簡単に説明しよう。これまでから景観保全を図る様々な取組を行ってきたにも関わらず、京町家が年々消失しそれに替わって高層建築物が立ち並ぶなど、京都の景観が様変わりしつつあった。このまま放置すれば京都の魅力がなくなってしまうとの強い危機感から景観行政の思い切った転換を図ったのが新景観政策である。

このような背景のもと、新景観政策は、①高さ規制の引き下げ、②建築物のデザイン規制の強化、③眺望景観・借景の保全、④屋外広告物対策の許可、⑤歴史的な町並みの保全を５つの柱として検討を行った。

その検討の中で、祇園地区については、次の観点から見直しを行った。一つは東山山ろくに点在する歴史的資源との調和、二つは東山の山並みとの調和、三つは風情ある町並みとの調和、四つは鴨川から東山の眺望への配慮である。主としてこれらの観点を踏まえて景観規制の見直しを行ったが、祇園地区については、元々規制を厳しく設定していたため、結果として従前とそれほど大きな変更はない。

まず建築物の高さ規制であるが、これまで20m又は15m制限を、15m又は12mに引き下げた。特に高さ12mの地区は、祇園新橋地区及び祇園町南地区であるが、元々伝統的建造物群保存地区や歴史的景観保全修景地区により低い高さ規制が働いてきたことから、実質的な規制強化にはなっていない。

次にデザイン基準については、これまでの種別基準から地区別基準に見直した。祇園地区においては、祇園町南地区と祇園縄手・新門前地区が歴史遺産型美観地区、それ以外は旧市街地型美観地区になった。それぞれきめ細かなデザイン基準を定めているが、歴史遺産型美観地区の基準は、これまでの歴史的景観保全修景計画に定められていた基準を踏襲したものである。

そのほか屋外広告物規制の見直しや眺望景観保全地域の創設などもあるが、ここでは割愛する。

次に歴史的な町並み保全の取組についてであるが、祇園新橋地区、祇園縄手・新門前地区及び祇園町南地区については、今後も伝建地区制度や歴史的景観保全修景地区制度による助成事業を積極的に活用し、町並みの保全・整備を推進する。更に、景観法に基づく景観重要建造物指定制度やこの５月23日に制定された歴史まちづくり法の活用も積極的に検討していきたいと考えている。

## ■おわりに■

東山山ろく及びその周辺市街地には有名な神社仏閣が点在し、祇園地区を始め、産寧坂地区など歴史的な町並み景観も多く残っている。京都の景観保全の取組にとって、一つの大きな戦略地区と言っても過言ではない。そのためゾーニング規制や様々な助成制度のほか、歴史的な町並み保全のネックとなっていた準防火地域の解除と防火条例の適用、細街路のままで可能とする建築基準法42条３項指定などの取組、無電柱化の推進や道路舗装の美装化などにも取り組んできた。

今後とも、住民の皆さんと協働し、知恵を絞り、そして交通、住宅、産業、福祉など様々な分野と連携しながら、祇園地区を始めとした歴史的景観の保全を推進していかなければならないと考えている。

（たかや　もとひこ／京都市計画調整局都市景観部景観政策課）



祇園町南地区（歴史的景観保全修景地区）

各論

# 祇園のまちなみと建築

若林広幸

京都

## ■混沌と秩序が入り混じる祇園■

京都、祇園。観光客が想像するのは、千本格子の町家が平入の瓦屋根を連ねる落ち着いた風情の町並みだろう。テレビやら雑誌やらで見かける、あの京都らしい風景を求めて四条花見小路までやって来た彼らは、祇園という地域が四条通りを境にして南北の全く様相を異としていることに驚く。南は、伝統的な木造建造物群が並ぶのに対して、北は、クラブや飲食ビルが林立するネオンきらめく歓楽街である。明治に入り、嶋原遊郭支配下の営業形態から解放された「祇園」は、都市の変容とともに歴史に再編されながらも、遊興の地として南北ともに大いに栄えた。しかし今や、交差点を挟んで、混沌と秩序。そこに居合わせ歩き回る、おおよそ本来の祇園のサービスとは無関係な人の山。歴史は長く、簡潔に説明するのが難しいが、祇園町南側の土地の大部分（約１万坪）は財団法人京都八坂女紅場学園の所有であり、土地所有者、借地権者、借家人で構成される協議会が、地区内の建築物のみならず、借地人の審査も行う。一方、北側は土地の細分化と個人による土地取得が進み、高度経済成長にあわせて古い町並みはビルヂングに変わっていったのである。戦中、白川沿い北側の建築群は建築疎開として破壊され、戦後はGHQによる公娼制度廃止、後の1958年の売春防止法施行による娼妓中心の営業形態の郭の消滅を経て、祇園の町並みが変容し始めるのは丁度「田の字地域」に中高層ビルが建ち始めるのと時を同じくする。

## ■美意識の希薄化■

市内中心部、東西を貫く御池、四条、五条と南北を貫く河原町、烏丸、堀川のそれぞれの通りで囲まれた「田の字地域」が規制緩和を受け、呉服などの地場産業が率先して鉾町に高いビルを建設した。戦後焼け野原になった東京や大阪が近代的なビル建設により復興されていく様を見て、自社をビルに建て替える事が悲願の経営者が多数いたとも聞く。やがて近代化の波は市内全域に広がっていった。また、建築の近代化とともに登場した新しい建材は一般住宅の外観にも影響を与え、統一感の無い素材や色の氾濫が景観の不調和をさらに加速させることとなった。更に大きな障害は電柱と電線である。京町家は平入が基本であり、道路に面して勾配屋根を見せる。瓦の勾配屋根が連続する様は、妻入とは違って個を主張しない統一感をかもしだす。しかし電柱や電線は、この連なりを分断し、通りのパースペクティヴに死角をつくる。電柱から電柱へ架け渡された電線の束に驚く外国から来た知人の姿に、都市の視線を寸断し横切ってゆく電柱と電線の猥雑さを再認識し、私自身、町並みに対する鈍った感覚に、はっとしたこともある。美意識はそこから錆びてくる。我先に目立つ看板を取っ付けたり、ところ構わず自販機を設置するなど、町並みに対する配慮が希薄になってしまっているのが現在の状況である。新しく建てられる建て売り住宅の多くは妻入屋根を好んで建て、それまた建て売りの隣戸とは全く別の国といった様相である。景観を考えるとき、実は高層建築の問題以前に五階建て以下の低層な建築による景観破壊の方がより深刻といえるだろう。



京都の町中のどこでも見られる風景。改めて見てみると電柱と電線しか見えない。

## ■祇園の景観■

話を戻そう。とにかく祇園の北側は、新興する風俗産業を内包し、市中の様変わりよりも一層濃度を増して混沌とした界隈であり、南側（祇園町南側）は、土地所有と賃借条件の特殊な事情ゆえに統制力のある地域経営が

可能なのである。ハードの面だけで整備をすすめても、伝統的な町並みを持つその他の地域のどれもが、祇園町南側のような観光資源になれるわけではないようだ。南北それぞれの特色について書いているが、北側にももちろん、町並み保存の動きがあり、他ならぬ私もその地域に作品がある。白川沿いの新橋地区は伝統的建造物群保存地区の指定を受け、京都を舞台としたサスペンスドラマでは決まって辰巳大明神まわりを登場人物が歩いている。私の妻は祇園で育ったが、幼少時はこの白川で夏場水遊びをしていたそうである。(観光客が橋のまわりで記念撮影の順番待ちをするような今からは想像もつかぬことではあるが) 1988年に竣工した「守離破」は、祇園新橋伝統的建造物群保存地区の南面の入口に面している。この地区への導入部である切り通しと呼ばれる路地を挟んで東西には町家が残っており、このそれぞれ一軒の町家を含めた部分が保存地区として登録されている。しかしその一軒の町家から外れた地域は、(当時) 景観上何の制限もない商業地域であり、テナントビルがひしめく。「守離破」の敷地はおそらく行政の線引きの錯誤と思われるのだが、6m程の間口のうち2m入った所に祇園新橋伝統的建造物群保存地区の指定線が走り、行政からは、2m部分は3階以下の伝統的な形態を、残りに関しては5階建で良いと実に理不尽な指導が返ってきた。交渉の末、1階部分をできる限り伝統的な意匠とし、残る階は瓦を載せるという条件付きで5階建のヴォリュームにお許しが出た。「守離破」は、緩衝帯としてその敷地の左右に広がる両極の相の落差を補おうと試みた作品である。左隣の町家との連続性を意識したファサードに、対を成す赤い柱を付加し、右側に続く歓楽的なビルの喧噪に負けないインパクトを持たせた。工事中、シートが外されたある日、施主(鳥料理とりしげの大将と女将夫婦) から「あの色なんどすか、ご近所から苦情でておりますぇ！。」との電話。そんなはずは無いと大急ぎで現場に向かうと、塗られていた色は指定色と異なる単なる赤。指定したのは漆の溜まり色である。塗り直させた後、「はんなりしたええ色やてみんな言うてはりますわ。」と元芸妓の女将が喜ぶのを見て、花街の確かな審美眼とコミュニティの存在を改めて思い知らされた次第であった。この赤い色は祇園の「華美」を象徴し、20年経った今でも、訪れるたびに我ながら「良い色どすなぁ。」と思う。



守離破ビル：向かって左が祇園新橋伝統的建造物保存地区。右側に歓楽街が広がる。

バブル期、この祇園新橋伝統的建造物群保存地区内に、木造ではなく鉄筋コンクリート造の町家建築が建てられ、賛否両論に湧いたことがある。外観は平入の瓦屋根がかかり、周囲の伝統家屋にも違和感なくとけ込んでおり、一見木造にしか見えない。が、実際には地上3階に地下1階で、中に入ってしまえば、柱のない大空間である。その後同様の町家が数棟建てられたが、バブルが崩壊して後は商業的効率からそのような建築は建てられてはいない。しかし、今後の景気の動きによってはこういった事例が将来にも続き、伝建地区とは名ばかりの映画村のような一画が出来てしまう可能性は今のところゼロではない。近年、花見小路南側（祇園町南側）でも、観光客を目当てにしたメニュー看板が目立つようになり、お茶屋などは別として、「一見さんお断り」の信用取引をする店は減少の一途をたどっている。(地場産業の不況を受けて、スポンサーたる旦那衆もしかりである。) 電柱は撤去され、石畳で舗装された通りは絶好の観光地となり、土産物屋すら出てくるようになった。伝統建築の数多くは、その用途を変え、中には継承された空間の質を落としかねないようなしつらえをされたものもある。本来伝建地区とは建築が文化財としての価値を持つものの集合した地域であり、当然そこには伝統的な木造建築文化が存続していなければならないのは言うまでもない。

保存範囲の選定、建物外観のみに制約を加える景観条例では、伝建地区の形骸化を防ぐことは出来ないが、「祇園」という町に、保存といった消極的なレベルとは異なった日本の文化の源泉が、現実にそれも活発に息づいている限り、そう簡単に映画村にはなりはしないだろう。ふた月ごとに、花見小路のお茶屋に麻雀をしに行く私のレベルでは旦那衆にはなれないが、京都の景観を微力ながらいろんな手法で支えていこう、でも新景観やら新耐震やらでくじけるかも、と笑って筆を置く。

(わかばやし　ひろゆき／㈱若林広幸建築研究所)



⬇



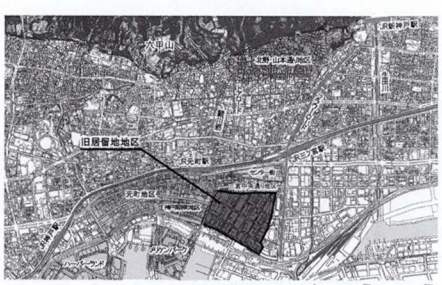
電柱が立ち並んでいたころの祇園新橋伝統的建造物保存地区。現在は撤去されている。

各論

# 神戸旧居留地における景観施策について

清水　陽

神戸




## ■神戸市と旧居留地■

神戸市は、六甲山と海、周辺の丘陵地帯というめぐまれた自然環境のなかに市街地が広がっており、人口約153万人が暮らしている。三宮・元町を中心とした都心・ウォーターフロント地域は、海、山、坂、と変化に富んだ地形の中に、開放的で異国情緒にあふれた都市景観が形成されている。

今回紹介する、旧居留地地区は、1868年の神戸港の開港に伴う外国人の居留地として設けられ、欧米の都市計画の考え方を取り入れた、近代的な都市基盤整備が行われた。現在も、戦前に建てられた近代建築が所々に残されており、かつての街並みの雰囲気を尊重したまちづくりにより重厚で風格ある都市景観が形成されている。

当地区は、神戸港の繁栄を背景に、商社、銀行等が立ち並ぶ中心業務地として発展してきたが、1980年代中頃から、この特徴的な街並みを生かし、高級ブティック等の商業利用も広がり、神戸でも屈指の商業・観光地としての役割も急速に伸びてきた。

## ■旧居留地の景観施策■

神戸市では、昭和53年に神戸市都市景観条例を制定し、神戸らしい景観を「まもり・そだて・つくる」ためにこれまで各種の景観施策を実施してきた。

良好な景観は、緑や地形などの自然条件や建築物・工作物などの視覚的な要素に加え、地域の歴史やそこで営まれる生活・諸活動などから醸し出される雰囲気も含めた総体として形成されるものである。つまり行政だけでなく、市民・事業者によるまちづくり活動の結果として、個性的で魅力ある景観形成が図れると考えられる。

そこで神戸市の景観施策は、地域ごとの基準を定め届出・勧告により景観誘導を図っていく「都市景観形成地域」の指定や、景観形成に影響を及ぼす大規模建築物や広告物について届出を求め助言・誘導を行う「景観形成指定建築物等届出制度」など、市による規制誘導策の部分と、市民による景観形成活動など、景観まちづくりへの支援の部分の２本立ての枠組みを用意しており、地域の特性に応じて市民・事業者・行政の協働で景観形成を図っている。以下、旧居留地地区での景観施策について述べる。

### （１）都市景観形成地域（景観計画区域）指定

神戸市では、歴史的建造物などによる風格ある景観を形作っている旧居留地地域（22ha）を、昭和58年６月１日に都市景観形成地域に指定し、当地域内の建築行為などに対し届出を求め、基準に基いた助言・指導により景観誘導を図ってきた。景観法の施行に伴い、平成18年２月に神戸市都市景観条例を改正し、当地域は景観計画区域に移行した。さらに一定以上の規模を持ち、地域の景観に大きな影響を与える案件については、神戸市都市景観審議会の中に設けた景観アドバイザー専門部会に諮っている。具体的には、専門家の委員に、形態・意匠など数値化できない部分についても、専門的見地からの意見をいただき、地域の景観にふさわしい建築物となるよう、よりレベルの高い助言・指導を行っている。

景観形成基準は**表１**のとおりである。

建築面積の最低限度等を定め、都心業務地にふさわしい風格のある街並みの形成を目指している。

近代建築物が、約20～30mの高さで建ち、壁面線のそろった囲まれ型の街区を構成していることから、建築物の低層部（接する道路によって、31m以下または20m以下）において、道路境界から概ね１mで壁面線をそろえることとしている。後述する地区計画では、中高層部（道路によって高さ31m以上または20m以上）は道路境界から５m以上セットバックすることとしており、これにより、スカイラインの整った街並みを形成することを目指している。また、屋外広告物についても、屋上広告物の禁止、壁面広告物や地上広告物の面積、高さ等を定めることによって、旧居留地の雰囲気を損なわずに、にぎわいを演出できるよう配慮している。

### （２）地区計画の制定

平成７年の阪神・淡路大震災により、旧居留地地区も甚大な被害を受け、歴史的な近代建築物の多くが被害を受けた。旧居留地にふさわしい計画的な復興を目指すため、市では平成７年４月に旧居留地地区地区計画を都市計画決定した。

表1　旧居留地都市景観形成地域の概要
（景観計画区域における良好な景観形成に関する方針）

| |
|---|
| 1．建築物・工作物の意匠を当地区の特色ある景観にふさわしい，質の高い風格のあるものに誘導する<br>2．都心業務地にふさわしい建築物の規模を確保する<br>3．敷地内に空地を確保するなど，道路と建築物が一体となったゆとりとうるおいのある道路軸景観を形成する |

（規制又は措置の基準として必要な制限）（主なもの）

| | |
|---|---|
| ①建築面積 | 500㎡以上（仮設建築物、駐車場管理の建築物その他これらに類する建築物を除く。以下同じ。）ただし、すでに敷地面積が狭小で、これによりがたい場合を除く。この場合において建築面積の敷地面積に対する割合は10分の８以上とする |
| ②有効空地 | 1．建築物の敷地内に地域の都市景観の形成に有効な上部が開放された空地（以下「有効空地」という。）を次の基準で確保すること<br>①敷地が角地である場合は100分の７以上<br>②敷地が角地でない場合は100分の５以上<br>2．①上記の基準は有効空地を角地に確保するなど地域の都市景観の形成に配慮されている時は緩和することができる<br>②上部が開放されていない空地であっても地域の都市景観の形成に配慮されている場合は有効空地とみなす<br>3．街角広場（旧居留地地区地区計画に規定される地区施設）及び有効空地は地域の景観に配慮された修景を施すとともに歩道に面する部分については、歩道と調和のとれたものとすること |
| ③道路からの建築物の外壁の後退 | 街並みの連続性を図るため、中低層部（旧居留地地区地区計画に規定される計画図表示の道路境界線①に面する敷地については31ｍ以下の部分、道路境界線②のみに面する敷地については20ｍ以下の部分）においては、おおむね１ｍで壁面線を整えること。ただし、主要な出入口等については、歩行者の通行の支障とならないよう、ゆとりあるものとすること |
| ④意匠（形態・材料・色彩等） | 地域の景観に配慮されたものとすること |
| ⑤建築物の用途 | 地域の景観とにぎわいに配慮されたものとすること。（可能な限り、建築物の１階・地階部分での商業施設の配置や、文化的機能の導入に努めること） |

主な内容は、**表2**のとおりである。

敷地面積の最低限度や建築物の高さなどを定め、歴史的景観を有した中枢管理業務地にふさわしい都市環境の形成を目指している。また、１階および２階には住宅を設けないとしており、商業・文化機能など都心にふさわしい都市空間の形成を目指している。

より拘束力の高い地区計画で骨格を定め、景観形成地域（景観計画区域）での景観部分での基準と役割分担しながら街並み形成を行っている。

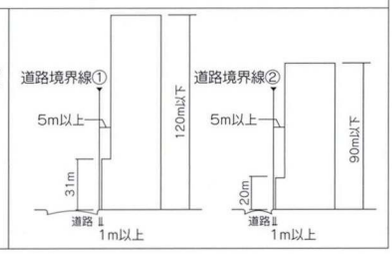
### （3）景観形成重要建築物の指定

神戸市では、歴史的な建築物や地域のシンボルとなっている建築物など景観上重要な建築物を所有者の合意を得て「景観形成重要建築物」に指定している。旧居留地地区では、神戸市立博物館（旧横浜正金銀行）、旧居留地38番館（旧ナショナルシティ銀行神戸支店）、海岸ビル（旧三井物産神戸支店）、海岸ビルヂングの４棟が指定されており、所有者に対し適正な管理を求めている。

### （4）地域団体との連携・支援

神戸市では、景観形成活動を行っている団体を「景観形成市民団体」として認定し技術支援などを行っており、「旧居留地連絡協議会」を昭和60年12月13日に認定した。旧居留地連絡協議会は、約100社の事業者で構成されており、旧居留地地区のまちづくり活動を主体的に行ってきた。旧居留地の今日の姿があるのは、愛着と誇りをもってまちくり活動を行ってきた旧居留地連絡協議会の力が非常に大きいと考えている。旧居留地連絡協議会では、独自のガイドラインにより、レベルの高い景観形成活動を行っており、市に届出があった案件については、旧居留地連絡協議会へも相談へ行くよう指導するなど、緊密な連携を図っている。

表2　旧居留地地区地区計画の概要（主なもの）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 用途の制限 | 住宅は１階および２階部分に設けない。<br>風俗営業に係る施設は設けない。 | | |
| 容積率の最高限度 | 600～800％（公開空地面積率による） | | |
| 容積率の最低限度 | 200％ | 壁面の位置の制限<br>高さの最高限度 |  |
| 敷地面積の最低限度 | 900㎡ | | |
| 高さの最低限度 | 20ｍ | | |

## ■旧居留地の現状と今後の課題■

以上述べたような各種施策の運用を通じて、旧居留地らしい良好な景観誘導が図られていると考える。継続的なまちづくり活動により、建築活動を行う事業者側も、旧居留地をブランドととらえ、旧居留地らしい雰囲気を前提に計画を推進することが多い。

ただ、最近の動きとしてマンション進出が一部で目立ちはじめており、都心業務地の風格ある街並みを目指して定めた各種基準について事業者に理解いただき、にぎわいを維持しつつ質の高い都市空間をどうつくっていくかが課題となっている。

一方、公共施設の整備についても旧居留地の雰囲気・景観に配慮しており、例えば現在進めている明石町筋の歩道拡幅整備事業は、地元と協議を重ね、人にやさしく歩いて楽しい道づくりを行っている。また、港に近い都心業務地という特性を生かして、都心とウォーターフロントの回遊性を確保できるよう努めているところである。これからも民間の建築活動と公共によるインフラ整備の両輪で、旧居留地らしい景観づくり・まちづくりを行っていきたい。

神戸市では創造都市戦略として「デザイン都市・神戸」の取り組みを進めている。街並みをはじめ、神戸を取り巻く様々なデザインに磨きをかけることにより、都市の魅力を高めるものであり、景観づくりにこれまで以上に力を入れているところである。

現在の旧居留地は、重厚な建築物や街路樹による風格ある街並みの中で、ブティックが並び、ビジネスマンやおしゃれな買い物客が歩く。

質の高い街並みという「まちのデザイン」が人を呼び、にぎわいがうまれ、神戸らしいライフスタイルという「くらしのデザイン」が営まれ、相乗効果でまちが活性化している事例といえる。今後も地域と連携して、個性と魅力のある景観にさらに磨きをかけていきたい。

（しみず　のぼる／神戸市都市計画総局
計画部景観室景観推進係長）

各論

# 企業市民による街並みづくり

山本俊貞

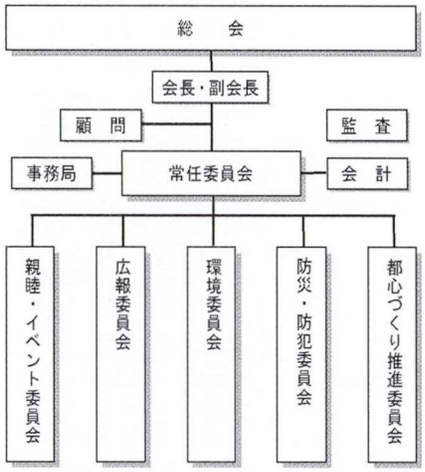
神戸

## ■企業市民の集まり「旧居留地連絡協議会」■

神戸旧居留地では、地区内で事業を営む法人100余社の集まりである「旧居留地連絡協議会」が組織されており、近年の街並み・まちづくりにこの組織が果す役割は大きい。これは第二次世界大戦中のビルオーナーによる自警団を組替えた親睦団体である「国際地区共助会」を母体にしており、昭和58年(1983)、当地区が神戸市都市景観条例に基づく都市景観形成地域に指定されるのを機に、会員の増強を図り運営体制を強化するとともに、名称も現在のものに変更された。異業種ではあっても地区内企業間の親睦を図り、就業環境の向上を目指して活動が続けられてきたもので、会員企業の事業振興を目的にするものではなく、むしろ会の活動に仕事を持ち込まないことを前提としている。この基本姿勢は現在に至るまで一貫して会員間で確認されており、長期に渡る活動の継続を可能としてきた大きな要因となっている。地区内で事業を営む法人であることを会員資格としていることもあり、全国的にも稀な企業市民による地域コミュニティが形成されてきたといってよい。

シンポジウムやフェスティバル、あるいは定期的に開かれているプロムナードコンサートなど、協議会主催のどのイベントも会員(就業者)自らが楽しみ、学び、そして交流することを趣旨としたもので、多くの会員の休日をも返上してのボランティアによって実現している。また、とりわけ旧居留地連絡協議会と名称変更してからは、まちづくりや景観形成にも積極的に取り組まれてきた。上記の各種イベント開催の他、地区の清掃活動、プランターボックスの設置・管理、防災・防犯活動、広報紙の発行、ホームページの構築などの実践活動に加え、平成2年(1990)には「まちづくり計画」を、さらに震災前年の平成6年(1994)には「景観形成計画」を策定するなど、まちと街並みの将来のあり方を提案する活動も続けられている。

会の運営にあたっては、会員企業の規模や業種、立場に関係なく一律の会費を徴収し、発言権も同等であることを原則としている。そして20名程度からなる常任委員会を中心に、平成に入る頃からはその下部組織として専門委員会を設け、それまで続けられてきた“交流・親睦活動”を基盤に、多方面にわたる活発な活動が展開されている。




「旧居留地連絡協議会」の組織構成

## ■震災復興を契機とした“街並み形成の規範”づくり■

このような素地の上で、平成7年(1995)1月17日の阪神・淡路大震災を経験して後は、復興に向けての自主的な検討が精力的に進められてきた。同年4月の協議会緊急総会では、既に神戸市によって縦覧がはじめられていた「地区計画」の素案を了承するとともに、まちの復興にあたっての指針を策定することが決議された。そして20数回の協議を経た後、同年10月にはいち早く会員間の合意のとれた「神戸旧居留地／復興計画」が、また平成9年(1997)には「都心(まち)づくりガイドライン」が自主的に策定・発行されている。前者がまちの将来方向を設定したのに対して、後者はこれを実現させるために、ビルの新築や改築時、あるいは管理上、各々はどのような点に留意すべきかを地区内外に提案するもので、いわば街並み形成にあたっての規範である。いずれも“まちの変化・成長に、旧居留地の蓄積を活かす”ことが基本的な理念とされている。

また震災から5年が経過した平成12年(2000)頃から、ビル低層部や地下階での店舗の増加に伴って新たな屋外広告物の掲出が目立ちはじめ、街並み景観への影響も大きいことから、共通規範の必要性がいわれるようになる。そこで「広告物ガイドライン」の検

討・策定に取り組まれ、平成15年（2003）に印刷・発行されている。広告物を街並み形成の阻害要因ととらえるのではなく、成熟した街を彩る一手段とするための指針であり、提案書である。

ところで、これら計画が目指す街並み形成の方向は、明治初年の居留地建設時そのままの形態を引き継ぐ道路や宅地割りの基盤の上に、大正から昭和初期に建てられた近代洋風建築によって形づくられていた頃の街並み（これを「囲まれ型街並み」と名付けている）を原点とするものである。ビルオーナーをはじめ地区関係者の、この街の重厚で落ち着いたかつての雰囲気への憧れであり、道路沿いにできるだけ広々としたオープンスペースを確保するという近年の開放型街並み志向の風潮に対する疑問からの発想と合意である。

**○震災前の街並みが抱えていた問題点**

①壁面線とスカイラインの混乱
（開放型まちなみ化）
←公開空地の確保と高層化が原因
←総合設計制度に起因
②あいまいな外部空間（残部空間）の創出
③広告物に代表される
安易な商業化によるまちなみの混乱

**○震災後の街並み形成方策の要点**

①囲まれ型まちなみの保全・形成
・壁面線の統一（道路より概ね１mの後退）
・低中層部のスカイラインの緩やかな統一（道路幅員により高さ20m、31m）
②風格ある賑いの演出
・公開空地の確保
・低層部分への店舗等の導入と、
屋上・突出広告の禁止

具体的には、ビルの壁面線とスカイラインを揃えた上で公開空地を確保するという、一見、相矛盾する方針を示し、都心づくりガイドラインではその対応策として街区と建築に内包される広場空間の確保策を例示している。そして、これら両課題を満足させる解答として、震災以後に建設された多くのビルでポルティコが採用され、これが風格ある賑いを醸しだす大きな要素の一つとなっている。囲まれ型街並みという伝統を引き継ぎながらも、賑わいを演出する新たな地区特性を創出することに成功したのである。

## ■街の空間像の共有と、協議会による自己チェック■

震災後の旧居留地の街並み形成にとって、上記計画書が果した役割は大きいといえる。その策定には多くの会員が係わり、議論を重ねた結果、それらの人々が街並み形成の原点となる空間像やその将来像を共有し、以後の街並み形成にあたっての共通した価値判断基準になりえている。そしてその有効性は、協議会による自己チェック体制によって、現在に至るまで保たれている。建築物の新・増・改築や広告物の掲出等にあたっては、地区計画や景観法に基づいて、事業者は神戸市に行為の届出を義務づけられるが、同時に、協議会内に設置された都心（まち）づくり推進委員会への事前相談も紳士協定として求められており、この場で街並み形成という観点からの意見交換や計画の改善要請がなされている。協議会内での街に対する緩やかな意思統一と相互啓発、言葉を換えれば空間像の共有を持続させるシステムである。行政による届出制度が最低基準を規定したものであるのに対し、地元まちづくり組織である旧居留地連絡協議会で策定された計画やガイドラインは、望まれる到達点とその実現手法を提示しており、いわば規制力のあるミニマムと理想を描いたマキシマムを双方向から示すもので、それらが街並み・まちづくりを進める上で互いに補完しあい、有効に作用し続けているといえる。



震災後の新たな地区特性となったポルティコ
「壁面線の統一」と「賑わい空間の創出」の両課題に対応するために採用された。



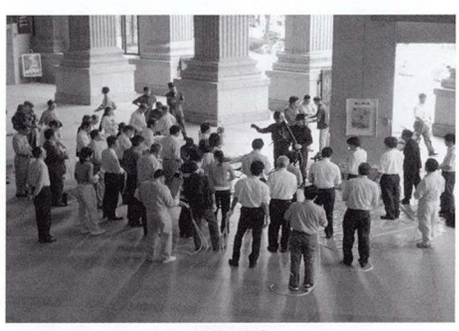
緩やかに揃いつつある中低層部のスカイライン

## ■街への愛着と誇りが招いた旧居留地の賑わい■

このような旧居留地連絡協議会の自律的な活動を可能としているのは、勿論、神戸の都心業務地を構成する企業としての責任を果たすという各社の意識も大きいが、それ以上に、旧来からのビルオーナー達のこの街に対する愛着と誇りであり、目前の経済活動だけでは説明できない彼らの動きに同調し、これを支えているテナント企業の存在であるように感じられる。そしてこの持続的な“まちづくり”活動が、多方面から評価される高質な街並み形成を実現させ、また商業機能の導入を誘発し、結果的には業務機能の活性化に帰結したのである。近年、旧居留地でも一部では東京や大阪の企業が保有し、管理を管理会社に委託するといった形態のビルが増えはじめている。これらのビル、もしくはそのテナントとのおつきあいは希薄になりがちで、企業コミュニティが成立しにくい。住宅地であっても、商業地であっても、業務地であっても、使い手のまちに対する愛着と誇りが紡がれ、そのまちの魅力に結実することにかわりはない。

あらゆる側面で流動の激しい都心業務地において、このようなオーナーとテナントそして来街者との関係を保持し続けることが、神戸旧居留地の大きな課題である。

（やまもと　としさだ／㈱地域問題研究所
・旧居留地連絡協議会顧問）



防災訓練
景観形成以外にも、広範な活動が展開されている。

REPORT

# 京阪神都市圏のプロジェクトに見る人の移動

## 大規模交通手段と地域の分極化


Corinne Tiry

建築士

リール国立建築大学研究所
LACTH所属研究員

パリ・ベルヴィル国立建築大学研究所
IPRAUS所属研究員


交差する文化
日本―フランス

私が京都大学在職中に、外国の建築大学と学生交換を30年以上にわたっておこなってきたが、コリーヌ・ティリー氏はその制度によって1994-1996年にわたりパリ・ラ・ヴィレット国立建築大学から来日した。その間コリーヌ氏は、日本の都市・建築環境の生成がヨーロッパでは見られない特殊性を呈していることに大いに興味を示し、交通網のリニヤーな構造が京阪間の都市化を促す、都市のモビリティに着眼して理解しようとした。その後、東京ではJR山手線と渋谷・新宿・池袋などの巨大拠点駅が果たす都市化とモビリティの現象を取り上げ、「交通が都市化を促す巨大構造」を研究テーマとされた。これらの成果は、今年には出版される予定だそうだ。

現在はパリ・ベルヴィル国立建築大学を拠点とするIPRAUS研究所で、都市建築を巡るフランス人研究者による日本研究のグループの立ち上げにも尽力している。コリーヌさんの論考の一端がこのような形で公表されるのは、われわれにとって有益であり、また愉快なことである。

**加藤邦男**：建築家・京都大学名誉教授

## 1 日本における都市・地域・交通の関係の特殊性
### ―京阪神都市圏の例を通じて―

近畿地方の都市中心部をなす京阪神（2000年の人口1860万人、都市部の人口密度は東京横浜地帯の半分）は、京都、大阪、神戸からひとつずつ漢字を取ってつなぎ合わせてできた地名で、それ自体、歴史的な三つの中心からなる都市圏のコンセプトを表している。その行政上の境界は、三つの府県を合わせた地域の境界に一致する。しかし現実には、京阪神の都市部を把握する尺度として複数のものが存在し、行政的境界（市、府県、地方）が人の移動に対応することはまれである。

人の実際の移動に対応した京阪神の定義として最も適当なものは、マリコニ-エブラール（Francois Moriconi-Ebrard）が論文集『都市の世界』（Le monde des villes（1996））で提出した次のようなものである。

「1970年代には、大阪を中心とした50km圏内が京阪神であり、80年代からはこの半径が60kmに広がる」。この定義によれば、大阪から50kmほどのところにある京都は、京阪神の都市部に部分的にしか属さないことになる。実際、後に見るように、大阪に通勤する京都の住民は少ない。

同地域の母体となる都市の特徴をまず見てみよう。

●大阪（2004年の人口2,633,685人、人口密度11,866人/㎢）。17世紀から港町、米の集散地として栄え、19世紀末には日本の工業生誕の地のひとつとなる。現在でも関西地方の都市機構、経済・産業の中心である。

●神戸（2004年の人口1,516,838人、人口密度2,754人/㎢）。もともとは漁港であったが、20世紀初頭に商業港になり、第二次世界大戦後は産業港として栄え、1995年の兵庫県南部地震災害まで、日本第三の港の地位にあった。

●京都（2003年の人口1,466,321人、人口密度2,403人/㎢）。8世紀にさかのぼれば日本の旧首都。第二次世界大戦中の米軍の爆撃をまぬがれた建築・景観上の遺跡が豊富。戦後の復興事業によって、大規模な産業活動こそ生まれなかったが、「高級」職人芸や著名な大学が発展し、1987年の京都サミットのような会議開催や観光事業に関連した活動とあいまって、京都の経済的中心としての地位は強固なものになっている。

地理的にきわめて近接しているために、神戸に住みながら大阪で仕事をし、京都で遊ぶ




**図1　京阪神都市整備のための多極構造の提案**
京阪神都市圏の発展促進会議／京阪神都市整備促進協議会

といった、この地域に特有な生活形態が当然ながら生まれた。実際この三都市は、その間にライバル意識があり、整備計画における協力関係が欠如しているにもかかわらず、各自が大きな役割を失わず、相互のバランスを保っている。しかし、ごく最近（1998年）、京阪神都市圏整備促進協議会の創立にともない同地域は、土地計画の点でもひとつの実体を持つようになった。この協議会の主要目的は、三主要都市の負担を軽減するため、（たんなる三極構造ではない）バランスの取れた多極構造を構築することにある。この協議会には、三府県、三都市とそれぞれの商工会議所が参加している。

京阪神都市圏の交通インフラストラクチャーは、東京都市圏を追い抜き、日本でもっともよく設備の整ったものである（たとえば東京都市圏では、環状道路さえ完結していない）。日本各地の都市圏の連結点をなす京阪神地帯は、東海道をふくみながら北は仙台、南は福岡にまでおよぶ1000km以上の都市圏の中心にある。人と物資のフローの面から見ると、同地帯は通過点であると同時に、戦略的な停留点でもある。交通量は北（首都・東京）に向けて倍増し、南の地方に向けて半減する。この意味で同地域は、集中度の高い日本の都市システムの内部にあって、中継都市の役割を果たしている。

### ■交通と産業化：京都―大阪軸における拠点形成

明治維新（1868年）の前夜から、京阪地帯（京都と大阪。神戸はまだそれほど発展していなかった）は、淀川に沿って発達した回廊の様相を呈しており、そこには封建時代の遺産である二大街道（東の東海道、西の山陽

道）の宿場町が散在していた。

明治新政府の交通政策は、古い道路網を近代化する代わりに、国全体に鉄道網を広げるというものであった。この政策は、江戸時代特有の街道交通による文化から離脱することを狙ったものであろう。そして何より、1890年代から日清(1894-1895)、日露(1904-1905年)の両戦争の時代を通じて開始された産業化のための経済的必要を優先した政策であった。1880年代からは官営鉄道に加えて、多くの民間会社による地方間鉄道の建設がはじまり、1889年には東京と神戸が結ばれる（東海道線)。この東海道線は、東京・京都間ではいくつかの例外を除いて、日本の都市の中枢がほとんどがそこにある旧東海道に忠実に沿って建設された。しかし、すでに1876年に開通していた京都・大阪区間は、淀川をはさんでこの街道の反対側に建設された。この選択は、河を渡る橋の数を減らす、大阪港、神戸港へ直接至るといった、経済的技術的動機によるものだが、結果として京阪地帯の都市化の方向性を大きく定めることになる。工場立地に際して鉄道の存在が重要視されるため、淀川とその東岸は当時の発展から取り残されるのである。

こうして京都と大阪の路線には、向日、山崎、高槻、茨木、吹田という新しい駅が建設




図2　1915年における京都・大阪間鉄道網図。回廊において近郊の中核が発達してくるのがわかる

された。西国街道の宿場町から離れたところにつくられた、この５つの最初の貨物・旅客駅は、同地帯の産業発展の中核をなすことになる。一方、阪神地帯は、大阪と神戸港周辺に集中的に近代産業（繊維、化学、機械）が発達したことにともない日本で最大の工業地帯になり、その地位を第二次世界大戦まで保つ。この工業地帯に職を求めて、近畿地方の農村地帯から多数が大阪へ移動する。この現象は当時、マンチェスターにおけるそれと比較された。

こうして、京都、大阪、神戸の人口は、各自異なるリズムであるにしても急上昇し、いずれも市から都市へと変貌し、公共交通機関の市場を刺激することになる。1868年に271,922人だった大阪の人口は、1909年には120万人に達した（1897年には周辺の市町村が吸収された)。

## ■大多数が民間主体の土地整備・分譲の論理

産業ブーム、人口増加の波に乗り、以下のように民間鉄道会社が新線を京阪の回廊内に建設し、その周辺地域を分譲することになる。

●京阪線が1910年、京都と大阪（天満橋）の中心を結ぶ。これは旧東海道に沿ったもので、東の中都市（伏見、淀、枚方、守口）を通り、さらには大津、宇治にむけて支線が延びる。

●新京阪線（第二次大戦後に阪急鉄道が買収）が1928年から、当時急速に成長していた国鉄京都駅周辺と大阪（梅田）を結ぶ。これは国鉄東海道線に平行して走りながら、向日、山崎、高槻、茨木、吹田といった西の工業地帯に分散していた住民を対象としたもので、神戸まで延びる。

1910年代から民間の鉄道会社は、今日なお機能している都市開発・商業戦略に基づきながら、沿線都市の互いに隣接した郊外の分譲を行い、土地整備者の役割を果たすことになる。こういった交通機関を経営する会社の力は、所属する大グループの幅広い活動領域（建設、不動産、観光その他）に基礎を置いている。駅売店での売り上げで、収支のバランスをとっていることも少なくない。実際、これらの企業が劇的に成長したのは、20世紀はじめからすでに消費社会と都市近郊の住居のつながりを予見していた、言い換えれば、早くから都市圏レベルの視点で人の動きを把握していたことによる。

これらのいわゆる私鉄会社は、創立当初から、新しい社会的アイデンティティー形成の手段として駅と大規模商店を組み合わせ、顧客を確保した。この駅・デパートのペアのすぐ脇には、同じ会社が商業施設（ホテル、遊園地、劇場その他）を建設して、地域のラベル付けを行う。

その一方で、路線のもう一方の終点の地に、狭さと息苦しさを感じる都市住民を引き寄せ、余暇地を発展させた。現在では都市化にともない、こういった海水浴場や山の余暇地は、裕福な階級の郊外住宅地となっていることが多い。

## ■交通と設備：交通網の分散化

第二次世界大戦後の復興作業は、それまであまり発達していかなかった淀川流域の道路網を、再編する機会を与えた。実際、1950年代半ばから60年代末にかけての時期は、京阪神地帯の土地開発が、国の指揮の下に、計画的に行われた。

最初の二つの国土総合開発計画（1962年と1969年）によって、京阪神地帯のつながりを強化する、次のような新しい高速交通手段の設置が決定され、都市圏（1955年で総人口750万人）が誕生する。

●国有鉄道経営の新幹線が、1964年から旧東海道沿線の主要都市を結ぶ。ここで話題にしている京阪神の回廊に関しては、この新幹線も淀川の西岸を走り、京都駅から新しく郊外に建設された新大阪、新神戸の両駅へと延びる。

●翌1965年に開通した日本初の高速道路である名神高速道路は、先立って開始された全国高速道路網建設の一環をなすものである。名神の区間は、京都の南を通過して名古屋と大阪をむすぶ。この高速道路は新幹線とは反対に、三主要都市に対して、各都市拡大の割合に応じた距離だけ離れたところを、接するように通過する。そして淀川西岸を川に平行に、しかし川からかなり離れたところを走る。こうして、その建設は回廊西側の壁に相当する山地の侵食の先駆けとなり、結果として回廊の空間的膨張の一因となった。

●直後に開通した近畿自動車道の大阪環状北部の一区間。これは、大阪市郊外に建設された70年万博会場、千里ニュータウン、大阪国際空港（伊丹空港―現在は国内線専用―）といった設備をつなぐものである。

全体的に見て、こういった大規模な土地開発のために京阪神の回廊は、輸送量が一回り多く、インフラストラクチャーが淀川西岸に集中した、独立した交通路となる傾向を強めていった。こうして、すべてが大阪に集中し、その昼間人口は増加の一途をたどった。同市の1975年における昼夜の人口差（3,764,000と2,779,000）がそれを雄弁に語っている。同じ数字が京都では1,742,000と1,416,000である。

### ■拡張された回廊に現れた二つの極：国土の均衡改善

回廊の不均等な都市飽和状態に直面して、1980年代は、都市圏全体のバランスを取るために、新しい開発空間を探すことに費やされる。そこで選ばれたのは、以下に見るように湾と丘陵という、それまで手がつけられていなかった空間である。

●1994年、大阪湾の南西、大阪市の中心から50kmほど離れた520haの人工島の上に、関西国際空港が開港する。これは、近畿地方がその新しいイメージを国外に向けて放つ、最初の一弾を意味した。この日本の新しい窓口は、何よりもまず直接、すなわち東京を通過せずに東南アジアの市場へ向けて開いていることが特徴である。空港脇の合流点には「りんくう」と呼ばれる小都市が、空港の乗り換え待ちの場所であると同時に、近畿地方の世界へ向けた窓口の役割を果たすよう、計画・建設された。そこでは、施行者である大阪府によって320haの埋立地の上に事務所、商店、娯楽施設、少数の住居が計画されている。

この空港都市は、大阪市内と空港の両方にJR線や南海電鉄で理想的に結ばれているが、80年代の投機ブーム時代に立案されたこともあって、現在でも投資者を見つけるのに苦労している。



図3　今日までに唯一実現した「りんくう・タウン」整備を象徴する双子塔の片方。この塔は、鉄道駅の上方に聳え、関西国際空港に直面して立つ（写真：C. Tiry）

●さらにいくつかのプロジェクトが、この近畿地方の経済的な国際化攻勢に連なっている。たとえば、同じく1994年に大阪南港の新しい埋立地に開館したアジア太平洋トレードセンターはそのひとつである。これは、輸入された物資の卸取引を目的とした大規模な商業複合体である。また、新空港と大阪市を結ぶ近畿自動車道は、それに平行した丘陵上に建設が予定されている一連の「テクノパーク」の骨組みをなしている。

●関西文化学術研究都市、愛称「けいはんな」は、近畿地方の原動力となるべく計画された空港に次ぐ第二のプロジェクトである。立地先は大阪中心から北東に約30km、京都、大阪、奈良の三府県にまたがった地域で、この三府県、国、多数の民間企業が共同参加する前代未聞の計画である。散在する十数の敷地は、回廊東の丘陵を平坦化したもので、全体が文字通りニュータウンをなす。1986年に着工され今なお建設中のこの都市は、主として研究開発センターから構成され、それに文化施設、住居、商店が加わる。

## 2 日本と京阪神における移動性の文脈
### ―ハイブリッドな都市間移動―

1990年における就業日移動人口が4,330万人を数える京阪神は、日本でもっとも人が移動する都市圏のひとつで、そこでの平均通勤時間は37.6分である。この時間は、全国平均を上回るが、京浜葉（東京、横浜、千葉。46.4分）のものより短い。京阪神の中における移動手段の内訳の変化は、同様な都市圏と同じ傾向（鉄道が減り、その分、道路交通が増える）をたどっているにしても、鉄道の比率はいぜんとして過半数である。

東京首都圏ではこの鉄道利用の比率が圧倒的に高いが、名古屋都市圏ではすでに二番目に落ちている。京阪神都市圏では、二つの移動手段が競争関係にある。しかし、不景気、都市部の人口減少、人口の老齢化などの最近の現象のために、90年代初頭はこの点に関して転換期となった。

1990年における京阪神都市圏における移動の地理的分布は、二種類の分極化を示している。まず、大阪市が一番重要な極をなしている。同市は周辺都市の従業人口を引き寄せ、その結果、西側における神戸との経済的競争関係はさほど強くない。次に、大阪市の北と東にある一連の中間規模の都市が中継点としての極をなし、大阪市の従業人口の一部を引き寄せている。これらの都市の位置は、大阪を環状に囲む高速道路（名神、中国、近畿）の路線、特にそのインターチェンジ（豊中、吹田、東大阪）の位置に一致する。

このように、従業人口の移動とその移動先の空間的分布（中心対周辺）は、既存の交通インフラストラクチャーに対応し、移動手段の選択に影響を与えている。




図4　1990年の、京阪神都市圏における人口移動図。大阪の求心力が圧倒的であることを示している

### ■都市移動の原動力としての活動

大阪は連合都市の中心にあって、流入人口数において他を圧倒している（1990年のトリップ数は一日、1,800万人）。1965年以来、地価上昇のために都市人口、特に中心部のそれは減少の一途をたどり、一方、大阪都市圏全体の人口は増加し続けた。しかし、ごく最近になって、この後者の人口も減少し始めた。

京都と神戸では、昼間と夜間の人口の格差は大阪ほど大きくないが、増加の傾向にある。これは、大阪へのトリップが今日でもなお、この二大都市からよりは、大阪に隣接した都市からのものであることを示している。

日本の観光地の中心として京都は、特別なケースである。京都を訪れる観光客数はわずかながらも増加の傾向にあるが（1975年3,800万人、1990年4,080万人）、その居住人口と従業人口の間の変化が少ないことから、京都が経済的な魅力に欠けることがわかる。この特殊性は、移動目的を見ると判然とする。たとえば1990年における京都への移動のうち、業務目的の割合は14％（大阪では20.1％）であったのに対し、余暇目的のものの割合は24％（同じく21.7％）であった。

## 3 京都駅：新しいタイプの都市拠点?
### ―都市内移動における京都特有の条件―

日本の都市圏の特徴である都市交通手段の内訳をバランスの面から見ると、京都は例外をなしている。すなわち、全国平均を下回るとはいえ自家用車の利用が多く、かつ増加傾向にあるのだ（1970年20％、1990年27％）。

しかし京都も、他の大都市の例に漏れず、日常的に交通渋滞の問題に直面しており、こ

れは代替交通手段が少ないだけに一層深刻な問題となっている。また、駐車場不足のために、古い家屋の保存を犠牲にした土地売却が行われている。京都市は、1972年に道路の幅拡張のために路面電車網廃止を決定したことで、図らずも、都市部における自動車利用を必要以上に許したことになる。

京都駅は初めて建て替えられたわけではない。1877年に建設された同駅は、1914年に完全に改築、1952年にも急増する交通量に対応するため同じように改築された。当初は市の南端に位置したが、今日では、京阪神都市圏のレベルでも、東海道メガロポリスのレベルでも、重要な中継点をなしている。日本の二大経済中心（東京、大阪）を結ぶ新幹線が必ず停車する京都駅はしかし、80年代に近畿地方の近代化計画（関西国際空港、「けいはんな」）の中にあって、時代遅れの観を呈していた。これらの大計画に対応して、京都を進行中の近代化・国際化の歩みの中に参加させようという意志が、地方の政策決定者からも、国鉄(1987年の民営化後はJR西日本)の側からも表明された。これは、この旧首都が、地方の土地ブームにも産業化ブームにもあまり関与せず、大阪・神戸といった近隣都市に経済的に遅れをとっていただけに、なおさらであった。京都に支社をおく東京の企業は少ないが、日本における観光客（日本人と外国人）の大部分を受け入れるのは京都である。そして多くの場合、京都駅を通じて、観光客は京都の第一印象を得るのである。

### ■テーマパークとしての駅
### —日本における駅ビルの刷新—

駅ビル改築のために関係者（京都市、京都府、京都商工会議所、JR西日本）からなる委員会が1991年に開催した国際コンペでは、原廣司の案が採用された。日本では珍しい、この設計案採用の過程そのものが、計画の持つ重要性と野心を表している。コンペでは、公共交通機関のシステムを再活性化、観光事業を強化、駅周辺界隈の都市再構成を促進の三点から、各案が吟味された。大阪が、関西国際空港のプロジェクトによって、東京の圧倒的優位の影になっていた国際的経済プラットフォームとしての役割とイメージを取り戻そうとしたように、京都はその特異な駅のプロジェクトによって、日本の伝統文化発祥の地としてのイメージ、そしてとりわけ国の観光の中核としての役割を、象徴的に再確認したことになる。

京都の新駅ビルのプログラムは、その狙いを象徴していると同時に、当時、日本全国で民営化されたJR各社が実行していた、営業活動の多角化方針を表している。ホテル、デパート、商店街(商店、喫茶店、レストラン)、劇場、美術館、展覧会場、京都府の事務所、駐車場といった建物を構成する要素の多様性と、238,000㎡という巨大な面積は、大戦以来さほど変化しなかった日本の駅建築が、大きく変貌したことを示している。いくつかの例外を除いて、駅—デパートというペアが日本では依然として支配的である。京都では、商業的にも象徴的にも新しい機能性によって、駅ビルが空港と地方レベルとの中継点の役割を演じると同時に（たとえば、空港行きの急行に乗る前に荷物の登録ができる)、都市レベルでも、著名な建築家による独特な建築によって、京都のランドマークの役割も果たしているのである。まさしく、駅を京都市の魅力的な窓口とすることが狙いなのだ。



図5　京都駅の中核部および大屋根の外部空間に向かって設えられた上昇通路(写真：C. Tiry)

原廣司設計の複雑な建造物が完成したのは1997年である。それは、一体式の強大な平行六面体で、市街への展望が多少工夫されているが、全体として不透明な構造をしている。地下３階を含めた16階建て構造の中で、先に述べたような各種業務活動が行われる。谷をかたどった中空構造の駅ビルは、内部に人工的だが空の見える景観をつくり出している。これは、平地・丘・空という京都原風景の三部構成のアナロジーである。コンポジットな空間構成は同時に、垂直化、ネットワークの錯綜、空間の流動性、尺度の断絶といった、日本の大都市の複雑性を引き写したものである。こうして演出された各種空間を指すに、建築家自身によって選択されたプロムナード、大きな階段、広場、門といった語彙が、ランドスケープであると同時にアーバンな、二重のアナロジーを雄弁に語っている。

京都の新駅ビルは、アメリカのショッピング・モールのアトリウム、西欧の伝統的広場、日本の通りのような、様々な現地あるいは輸入した都市の類型をテーマパークのように並置した、大きなコラージュである。世界都市のテーマパークということになるだろうか。この空間内を、視覚上も鉄道の技術的側面と直接接触することなく歩き回れるという可能性は、京都駅が何よりもまず消費の場であることを如実に語っている。それは、商品やサービスを消費するというだけではなく、言葉の原義の意味における感覚的な空間体験の消費でもある。

## 4 結語
## —北米やヨーロッパの二極モデルvs多極的な都市システムの形成—

京阪神都市圏における交通インフラストラクチャーの歴史をたどることで、大規模に都市化され、アプリオリには均一な同地域の解読・理解のための鍵が得られる。三つの歴史的中心都市を結ぶ大交通網の連続的ながら排他的ではない整備、すなわち江戸時代の街道、明治時代に始まる鉄道、1960年代からの高速道路と新幹線によって、実際には多極的、多色で複雑な都市システムが形成された。

封建時代から同地域には、その規模に適応した移動手段の整備と実践のシステムが存在する。これらのシステムは、交通網と点在する人口集中の二つの論理に同時に従うものである。中継都市、分譲住宅地をともなう乗り換え駅、高速道路設備に付随した大都市の大施設が、ネットワークの一意的な思想から生まれ、そこでは構造化をともなう都市計画や建築の価値は副次的なものとして後退する。

複数で差異化された極を持つ「地域都市」というこのシステムは今日、北米（中空／スプロール）やヨーロッパ（密な都市／疎な都市）の二極モデルに対する代替モデルを提示している。一方で1920年代以来、民間鉄道会社によって拡大する郊外の成長（分譲）が方向付けられたが、この成長はまた、地元の駅の周囲に体系的に整備された、散在する小都心によっても構造化されている。他方、国のあるいは民営化された企業が現在、大規模な複合不動産事業と組み合わされた公共交通設備刷新を行うことで、都心部へのアクセス改善戦略を展開している。

このモデルの歴史の長さ、いくつかの点における経済的有効性、そしてそのイメージが集団心理内において持つダイナミズムが、「日本型」都市整備の根強さと息の長さを物語っている。関西国際空港の都市拠点、そして特

に京都駅のそれは、都市計画のプロジェクトとしての価値を持っている。それは、この種の事業とそのネットワークへの接続のみが、都市レベルでも地域レベルでも、そして機能面でも象徴面でも、都市圏を刷新する能力を持っているという意味においてである。

(訳：馬場 郁(かおる))

**参考文献**


- 『新しい京都駅』, 雑誌『デザインの現場』1997年11月　増刊号n°93, vol.14, 120p.
- The Association of the Japanese Geographers / NISHIKAWA (Osamu), NOH (Toshio), SUZUKI (Hideo), TAKEUCHI (Keiichi), YAZAWA (Taiji) (eds.), Geography of Japan, n°4, Tokyo, Teikoku-Shoin, 1980, 440p.
- AVELINE (Natacha), La ville et le rail au Japon. L'expansion des groupes ferroviaires prives a Tokyo et Osaka, Paris, CNRS ed., 2003, 238p.
- BATTEN (David F.), ≪ Network Cities: Creative Urban Agglomerations for the 21st Century ≫, Urban Studies, vol.32, n°2, 1995, p.313-327.
- BERQUE (Augustin), Le Japon. Gestion de l'espace et changement social, Paris, Flammarion, 1976, 344p.
- BRING (Mitchell), ≪ Trains & Townscape in the Kyoto Corridor ≫, Architectural Association Quarterly, n°4, vol.10, 1978, p.16-19.
- DOUMENGE (Francois), L'urbanisation et l'amenagement de l'espace au Japon, extrait de la revue Les Cahiers d'Outre-Mer, Bordeaux, 1970, 78p.
- ERICSON (Steven J.), The Sound of the Whistle. Railroads and the State in Meiji Japan, coll. Harvard East Asian Monographs 168, Cambridge (Mass.) and London, Council on East Asian Studies, Harvard University Press, 1996, 505p.
- HORIE (Ko), ≪ Transports ≫, in Berque (A.) (dir.), Dictionnaire de la civilisation japonaise, Paris, Hazan, 1994, p.498-500.
- Japan Transport Economics Research Center (JTERC) Reports, vol.17, July 15, Tokyo, 1995, 71p.
- KAKUMOTO (Ryohei), ≪ Some Observations from the Standpoint of Transport in Japan ≫, dans Villes et ports. Développement portuaire, croissance spatiale des villes, environnement littoral. Second colloque franco-japonais de géographie, Paris, CNRS, 1979.
- Kansai Global Metropolis Campaign Council, Major Projects in Kansai, Osaka, 1995, 83p.
- 片木篤, 藤谷陽悦, 角野幸博『近代日本の郊外住宅』第4章「京阪神」, 鹿島出版会 (2000), p.241-438.
- 京阪神都市圏交通計画協議会編『京阪神都市圏の人の動き：第3回パーソン・トリップ調査から』京阪神都市圏交通計画協議会 (1999), 29p.
- LEVY Jacques, ≪ Territoires et reseaux ≫, in Paquot (T.) (dir.), Le Monde des villes. Panorama urbain de la planete, Paris, Ed. Complexes, 1996, p.375-389.
- MIKI (Masafumi), ≪ The Origins of Commutation in Japan ≫, Geographical Review of Japan, vol.78, n°5, 2005, p.247-264.
- MIKI (Masafumi), ≪ Railway Operators in Japan. Southern and Eastern Kinki Region ≫, Japan Railway & Transport Review, n°38, March 2004, p.58-67.
- MIKI (Masafumi), ≪ Railway Operators in Japan. Cities in Kinki Region ≫, Japan Railway & Transport Review, n°36, September 2003, p.56-63.
- 南出真介「京都の鉄道」, 足利健亮編『京都歴史アトラス』, 中央公論社 (1994), p.114-115.
- The Ministry of Construction, Road Technology Research Board (ed.), Michi: Roads in Japan, Tokyo, Road Public Relations Center, 1998, 164p.
- The Ministry of Construction (Kinki Regional Construction Bureau / Planning Department), Transportation System in Keihanshin Metropolitan Area, Tokyo, 1990, 21p.
- The Ministry of Construction (Kinki Regional Construction Bureau / Planning Department), Urban Transportation in Keihanshin Metropolitan Area, Tokyo, 1986, 29p.
- MORITA (Keisuke), ≪ Osaka ≫, dans Les transports urbains et l'environnement, seminaire organise par l'OCDE en cooperation avec la Conference Europeenne des Ministres des Transports (CEMT), tome II, Paris, 1979, p.97-145.
- NAKAMURA (Hachiro), ≪ Urban Growth in Prewar Japan ≫, in Fujita (K.) & Child Hill (R.) (eds), Japanese Cities in the World Economy, Philadelphia, Temple University Press, 1993, p.26-49.
- NOJIRI (Wataru), ≪ Choice of Transportation Means for Commuting and Motorization in the Cities of Japan in 1980 ≫, Geographical Review of Japan, vol.65 (Ser. B), n°2, 1992, p.129-144.
- OHTA (Katsutoshi), ≪ The development of Japanese Transportation Policies in the Context of Regional Development ≫, Transportation Research, vol.23A, n°1, 1989, p.91-101.
- PELLETIER (Philippe), ≪ La fluidite de l'espace ≫ et ≪ L'explosion urbaine ≫, in Gentelle (P.) et Pelletier (P.) (dir.), Chine. Japon. Coree, Paris, coll. Geographie Universelle, Ed. Belin-Reclus, 1994, p.351-360 et 361-375.
- PRUD'HOMME (Remy), ≪ Megavilles : economie et gestion ≫, in Paquot (T.) (dir.), Le Monde des villes. Panorama urbain de la planete, Paris, Ed. Complexes, 1996, p.49 et 75.
- SAITO (Michio), The Transportation System Management in Keihanshin Metropolitan Area, Osaka, Chuo Fuken Consultants, 1979, 21p.
- SAITO (Mitsunori), ≪ Le role des grandes societes dans le developpement de la zone metropolitaine de Keihanshin (Osaka-Kobe-Kyoto) ≫, Les Cahiers du CREPIF, n°9, Paris, 1984, p.87-97.
- SHAPIRA (Philip), MASSER (Ian), EDGINGTON (David W.) (eds.), ≪ Planning for Cities and Regions in Japan ≫, Town Planning Review, Special Studies n°1, Liverpool, Liverpool University Press, 1994, 203p.
- SORENSEN (Andre), The Making of Urban Japan. Cities and Planning from Edo to the 21st Century, London, Routledge, 2002, 386p.
- TAKASHIMA (Shuichi), ≪ Railway Operators in Japan. Northern and Western Kinki Region ≫, Japan Railway & Transport Review, n°37, January 2004, p.44-51.
- TANIGUCHI (Norihisa), ≪ The new Kyoto station. The best Japan has to offer ≫, Rail international, sept-oct. 1998, p.136-139.
- TIRY (Corinne), ≪ Learning from Japanese Stations ≫, 建築雑誌·Journal of Architecture and Building Science (日本建築学会·Architectural Institute of Japan), Vol.117, n°1492, 2002.08.20, p.40-41.
- TIRY (Corinne), ≪ Du batiment-gare a la gare-enclave, gare et metropolisation au Japon ≫, in Menerault (P.) et Barre (A.) (dir.), actes du colloque Gares et quartiers de gares : signes & marges, Ed. de l'INRETS, actes n°77, 2001, p.141-160.
- TIRY (Corinne), ≪ Stations help define urban image . Kyoto and Lille Europe ≫, Japan Railway & Transport Review, n°28, September 2001, p.18-21.
- TIRY (Corinne), Etude sur les deplacements au Japon, Recherche pour la societe Cofiroute, non publiee, Paris, 2000, 54p.
- TIRY (Corinne), ≪ Keihanshin : état des lieux d'une ville-territoire ≫, Urbanisme, n° 301, 1998, p.14-18.


## パリ通信

まさに聡明な女性、というのが彼女の第一印象。高校生の頃、川端康成や三島由紀夫らの日本文学に触れ、異質な文化に興味を持ち、さらに大学時代、安藤忠雄や丹下健三の建築が紹介されると、その多様性に惹きつけられたという。

日本の駅に商業施設が併設されている様子は、私たち日本人には見慣れた光景だが、彼女の目にはとても新鮮に映った。それはフランスの駅が、門や境界といった通過機能を果たすための所であって、休憩したり時間を楽しむ場所ではないからである。「駅えき」のフランス語訳を「gareガール (駅)」から「relaisルレ (宿場・宿駅)」にと考案中の彼女。「大パリ」構想という国の大プロジェクトのために働く彼女にとって、日本は通過だけの国ではなく、じっくり暮らし、とどまりたい国であると、リュクサンブルグ公園内の緑の光に包まれたカフェで語ってくれた。


本誌編集委員　**松田奈緒子**
ヴェルサイユ国立建築大学留学中




2008年6月23日、パリのカフェにて

452
法令コーナー

# 全体計画認定制度の改正

西　晃弘
大阪府住宅まちづくり部建築指導室審査指導課

## 改正内容およびその背景

平成19年６月20日の改正建築基準法の施行に際しては、一連の構造計算偽装問題で明らかとなった不適切な設計を禁止するため、構造設計時の計算方法や条件設定の方法等の明確化や適正化が図られ、構造関係規定が改正された。

その結果、昭和56年６月１日の時点で施行されている建築基準法第20条の規定に適合するもの（いわゆる新耐震建築物）であっても、現行法令に適合しない既存不適格建築物となる場合が生じている。こうした既存不適格建築物については、増改築を行う場合、原則として既存部分も含めて現行法令を満足するように改修を行わなければならないが、既存部分の大規模な改修工事等を要する場合もあることから、経済的な理由等で増改築を断念するいわゆる凍結効果を生んでいるとの指摘がある。

このため、既存部分を段階的に改修できる全体計画認定制度を弾力的に活用し、円滑な増改築が行えるよう、国土交通省は平成20年４月17日付で「全体計画認定に係るガイドラインの一部改正について」と題する文書を都道府県などにあてて通知した。

全体計画認定制度とは、建築基準法第３条第２項の規定により現行の建築基準法令の規定の適用を受けない既存不適格建築物を、複数の工事に分けて段階的に現行の建築基準法令の規定に適合させていく計画について、特定行政庁が認定を行う制度である。

これは、既存不適格建築物について、増改築の機会を捉えて性能確保を図るという現行制度と併せ、最終的にすべての不適合状態が改善されることとなる全体的な改修計画を前提に、改修計画期間内における遡及適用を猶予し、段階的な改修を認めるものである。

本ガイドラインの改正により、一定の耐震性（いわゆる新耐震基準）が確保され、既存部分と増築部分がエキスパンションジョイントなどで分離されている既存建築物については、既存部分の改修工事を将来の維持保全や機能向上のための大規模な改修工事等に併せて合理的に行えるよう原則５年以内としていた全体計画の期間を、20年程度の長期間で認めても差し支えないものとなった。

## 図書省略認定

全体計画認定の申請時においては、原則として全体計画に含まれるすべての工事の計画について確認申請時と同様の添付図書の提出が求められているが、図書省略認定制度を活用し、当該認定書の写しの添付と併せ、既存建築物の部分について、昭和56年６月１日の時点で施行されている建築基準法第20条の規定に適合するもの、または平成18年国土交通省告示第185号に定める基準によって地震に対して安全な構造であることを確かめられたものであることを証する書類を確かめることにより、全体計画認定の申請図書のうち当該既存建築物の部分に係る構造関係図書の提出を省略できることとなった。

なお、この図書省略認定については、社団法人日本建築構造技術者協会（JSCA）が認定申請を行ったものであるが、当該認定書の写しは国土交通省のホームページ等で公開されており、すべての者が当該認定を使用できることとなっている。

また、JSCAのホームページ（URL：http://www.jsca.or.jp/）には「この認定はあくまでも緊急かつ暫定的対策であり、本質的には法令改正による恒久的な解決が必要であると考えている。JSCAでは今回の認定申請にあたり、国土交通省が新耐震建築物の耐震診断方法や柱・はり接合部の補強方法等について研究開発を進めていく方針であること、今回の全体計画認定の運用について特定行政庁の理解を求める努力を行うことなどを確認している」とある。

## 課題と対応

全体計画認定は、既存不適格建築物に対し、段階的に遡及適用させることが目的であり、特定行政庁が全体計画認定を行う際には、増築等を含む工事を２以上の工事に分けて行うことがやむを得ないものであることや、途中の各工事の完了段階で危険性等が増大しないこと等を確認しなければならない。しかし、既存部分が新耐震基準に適合しているものは、全体計画認定の申請時には構造関係図書が添付不要となり、構造の改修計画も分からないこととなり、改修計画図のないものに関して、この判断を行うことは実質不可能である。

また、既存部分の耐震性の有無、改修工事の要否、改修工事の難易度等判断せずに20年という長期間改修工事を猶予した場合、将来、耐震診断等の結果、難易度の高い改修工事が必須となり多額の負担によって改修が不可能となる事態が発生するなど、20年後の違反建築物の発現を助長するおそれもあり、撤去しなければ違反建築物となるが、違反対策は実務上困難であると思われる。

以上のような課題等があることも踏まえて、大阪府下の特定行政庁では、全体計画認定について統一的な運用を図るべく検討・調整を行っているところである。

## まとめ

建築主および設計者は、あくまでも今回の改正は技術基準の緩和ではなく、法に適合させるための猶予期間が与えられただけにすぎず、最終的な建築物の構造について法適合させるレベルは改正前と何ら変わってはいないことに注意しなければならない。

設計者は建築主に対し、この制度について十分な説明をし、20年後には既存建物を撤去しなければならないこともありえるということを認識してもらっておく必要がある。この説明を怠ると20年後に建築主とトラブルになり、設計者が責任を問われることにもなりかねないであろう。

（にし　あきひろ）

**全体計画認定の既存部分にかかる構造関係規定**

| 増築の床面積／基準時の床面積 | 既存建物の建設年次 | Aパターン | | Bパターン | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1／2以下 | 新耐震 | 20年以内 | 耐震診断・改修設計、耐震改修工事 | すぐに | 耐震診断・改修設計 |
| | | | | 5年以内 | 耐震改修工事 |
| | 旧耐震 | すぐに | 耐震診断・改修設計 | | |
| | | 5年以内 | 耐震改修工事 | | |
| 1／2超 | 新耐震 | 20年以内 | 現行法に適合させる改修設計・改修工事 | すぐに | 現行法に適合させる改修設計 |
| | | | | 5年以内 | 現行法に適合させる改修工事 |
| | 旧耐震 | すぐに | 耐震診断・改修設計、耐震改修工事 | すぐに | 現行法に適合させる改修設計 |
| | | 20年以内 | 現行法に適合させる改修設計、改修工事 | 5年以内 | 現行法に適合させる改修工事 |

372
設備の頁

# ヒートアイランド対策

宮崎ひろ志
関西大学・環境都市工学部・建築学科・専任講師

## ヒートアイランド

ヒートアイランドとは都心部が郊外に比べて気温が高くなる、ローカルな気候現象を指す言葉である。中緯度にある日本では特に夏季の都市暑熱環境として取り上げられることが多いが、通年見られる現象である。ヒートアイランド現象が顕著であればあるほど都心部の気温が郊外より高くなることから、都心部と郊外の気温差はヒートアイランドの程度を表す指標として用いられ、「ヒートアイランド強度」と呼ばれている。

一般にヒートアイランド強度は都市の人口に比例すると言われる。夏季の暑さが問題になる日本では、熱帯夜日数が指標とされることがある。日本の主な都市における熱帯夜日数を**表1**に示す。人口の割に大阪、神戸は暑い都市であることが分かる。

**表1　日本の主な都市における熱帯夜日数**

| | 大阪 | 神戸 | 京都 | 東京 | 名古屋 | 広島 | 福岡 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2007年度 | 44 | 50 | 22 | 31 | 30 | 30 | 39 |
| 2006年度 | 44 | 45 | 23 | 20 | 23 | 36 | 39 |

気象庁HP気象統計情報、1時間ごとの値より作成。

ヒートアイランドが生まれる要因は、都心部におけるエネルギー消費増大、人工土地被覆の増加／自然土地被覆の減少、それに伴う蓄熱量増大であると言われる。**図1**に1885（明治18）年頃の大阪の地図を示す。明治期、田畑に囲まれていた大阪の市街地は、その後拡大を続けて現在では大阪平野をほぼ全域市街地で覆うに至っている。この市街地拡大の歴史は、そのまま気温上昇の歴史でもあった。**図2**に大阪、神戸の8月月平均最低気温の経年変化を示す。測候所が市街地と離れた場所にあり、都市化の影響が少ない洲本の同気温との差を示す。これにより地球規模の温暖化の影響は除かれ、気温上昇は専ら都市化の影響によるものと考えられる。近似直線の傾斜から、大阪で100年に2.3℃、神戸で同1.0℃のスピードで気温が上昇している。



**図1　1885（明治18）年頃の大阪**
（出典「明治前期関西地誌図集成」柏書房、1989）

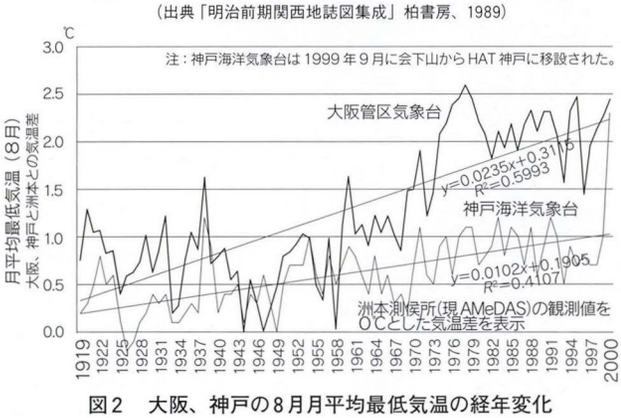



**図2　大阪、神戸の8月月平均最低気温の経年変化**

## ヒートアイランド対策としての緑化

図1より、現在の市街地の多くは、もともと田畑や森林であったところに拡がってきたことが分かる。外見上の特性から見れば、都市はこのように自然を排除して生み出された人間の土地であり、その結果、人工物で覆われるようになった土地である。それで具合が悪くなったのであれば、屋上緑化とか街路樹とか、とにかく「緑」を都市に加えて修景、修正すればよいという意見もある。

ところが平成13年に、環境省のヒートアイランド対策を検討する専門部会で話題になったのは、シミュレーションによると例えば東京都心部の緑地を現在の2倍に増やしたとしても気温の低下にはほとんど効果が見られなかったということであった。蓄熱を防ぐための緑など、シミュレーション手法に工夫が足りないという指摘はできると思われるが、依然として都市が巨大なエネルギーの大消費地であることには変わりはなく、また巨大な蓄熱体であることにも変わりはない。残念ながら緑化だけですべてが解決すると考えるのは早計と考えられる。つまり本質的な問題を置き去りにしている間は、どうもこの問題は解決しないようだ。

## 神風待望論

クリマアトラスはドイツ語で、「クリマ（Klima）」が「気候」、「アトラス（atlas）」は「地図」という意味。ドイツ人は英語ではこれを直訳して“climate map（気候地図）”と呼んでいるが、日本では英語やカタカナでは困るということで最近では「気候環境地図」と呼ぶらしい。クリマアトラスは地域固有の気象・気候と関連情報を記載した地図で、ドイツでは都市計画図のひとつとして法的に位置づけられ利用されている。

日本で「クリマアトラス」ないしは「気候環境地図」という名称がどこまで普及しているのかは分からないが、この図の中に示された「風の道」の方は、とにかく有名になった。「風の道」という言葉はさまざまな発想を呼び起こすようで、風の道さえ整えれば「神風」の故事のごとくヒートアイランドを吹き飛ばしてしまうという論調も多い。

クリマアトラス生みの親のひとり、シュツットガルト市のバウミュラー（Baumüller）教授に、「風の道」のひとつを紹介してもらったことがある。シュツットガルトは盆地の町。周山麓の低地に氏の職場があり、帰路は谷筋の上にある駐車場まで登るのが日課である由。ある夕暮れ、その谷筋を歩いていて、氏は柔らかく新鮮な冷たい風を感じた。それが「風の道」を考えるようになったきっかけであったという。彼の国の風の道には（神風とは異なり）衛生的な優良さが自慢の穏やかな風が吹いているらしい。

## 対策は?

対策を考えよう。ヒートアイランドは人間がつくってきた都市と建築、あるいはその使い方が原因。つい「緑」「風」と、ふわふわサワリの良い言葉に惑わされそうだが、問題の解決法は、造園家や気象予報士の仕事などではなく、やはりわれわれ建築屋の得意な工夫の出来に託されているようだ。そう、これからも建築と社会、建築と環境の視点から、新しい建築を生み出していくことが期待されている。図1に示す「あの頃」以降、われわれが歩んできた「来し方」をいま一度検め、明るい「行く末」を描いていこうではないか。（それにしても暑い……）

（みやざき　ひろし）

# 書評

## 時代の堆積

笠原一人




**『建築―風土とデザイン』**

**徳岡昌克著**

**発行所／建築資料研究社**
**編集者／石堂　威**
**（都市建築編集研究所）**
**2008年5月24日発刊**
**240×240mm 177頁 本体2,800円**

本書は、大阪を拠点として全国で活躍する、建築家徳岡昌克の作品集である。徳岡の作品集は、自伝を兼ねた『建築―生き様のデザイン―』（彰国社）が1998年に上梓されており、本書で2冊目となる。今回は、1980年代以降につくられた作品の中から、次のような厳選された12作品が掲載されている。

・小石原焼伝統産業会館（1998）
・めくばーる三輪（1997）
・田川文化エリア（1991）
・嘉麻市立碓井琴平文化館（1996）
・大津市木戸市民センター（1999）
・木戸デイサービスセンター（1995）
・ビラデスト今津（1994）
・東近江市愛東けんこう福祉ゾーン（2000）
・ぽんち神戸工場（1984／1992）
・神戸市立小磯記念美術館（1992）
・夜久野ふれあいプラザ（2005）
・稲沢市荻須記念美術館・アトリエ復元（1983／1996）

＊

本書を見ていて気づくのは、徳岡の作品の多くが、切妻屋根やドームが架かり、茶色い煉瓦タイルが貼られ、御影石のオーダーや楣が置かれるなど、日本建築とヨーロッパの様式建築の伝統が共存する落ち着いた雰囲気を持つことであろう。しかしそこには、薄い屋根や皮膜が張り詰めたような外壁など、モダニズムの手つきも見られる。そして本書の巻頭論文で内田祥哉が「施工に優しいディテール」と論じているように、収まりの上手さにも定評がある。上品さと安心感、さらに懐かしさや軽やかさを備えた独自のスタイルである。

このスタイルは、長年の活動の中で、徳岡が独自に生み出したものではあるが、徳岡の個性に加えて、時代の潮流やかかわりのあった人物からの影響など、あらゆるものが堆積し、混ざり合ったものであるように感じられるのが興味深い。

＊

徳岡はモダニズムの全盛期に竹中工務店に入社し、独立するまでの約30年の間に、設計部の戦後のピークをなした小川正と岩本博行の元で、設計に携わっている。小川は、新朝日ビルディング（1958年）や関電ビルディング（1960年）の設計を担当したことで知られる。建築生産の工業化や標準化にも取り組んだモダニストであり、戦後モダニズムの典型を作り上げた。一方岩本は、御堂ビル（1965年）や国立劇場（1966年）の設計を担当したことで知られる。その作風は、茶色のタイルや土、漆喰、瓦、木など伝統的な素材を用いたもので、戦後モダニズムの成熟と変化を表現していると言えるだろう。

その後徳岡は設計課長や部長を務めるが、1983年に竹中工務店を退職し、一人の建築家として活動を始める。それはポスト・モダンの時代であり、モダニズムとは異なる方法が模索されていた。モダニズムが忌避した求心性や象徴性、古典主義の言語などが積極的に用いられ、また風土や地域性の表現がテーマとなった時代である。そして90年代以降には、モダニズムの方法が再評価されている。

徳岡の作品には、こうした1950年代から現在までのあらゆる潮流や影響が、違和感なく、そして決して浮わつくことなく混ざり合いながら、一つのスタイルを獲得しているように感じられる。時代ごとに変化を見せる建築家は多いが、徳岡の場合、時代を経るとともにあらゆる経験知が堆積し、そのすべてが作品に表れているかのようだ。もちろん、決して流行の形態を組み合わせたようなものではなく、全く独自のものとなっている。そこには、まさに徳岡の「生き様」が表れていると言えるだろう。

＊

本書では、建物を上空から撮影した航空写真を多用しているのも興味深い。建物や敷地だけではなく、敷地周辺や町の様子までがほとんど真上から撮影されている。その写真を見ると、徳岡の作品は、伝統的な家並みが残る街中にあっても、田畑の広がる田園地帯にあっても、大地から生えてきたかのように違和感なく環境に溶け込んでいる。一方でその形は、周囲の建物と異なっており、目を引く。建築作品集で多用されることは少ない写真だが、地域に溶け込みながらも個性を持つ徳岡の作品を表現するには、ふさわしい写真であると言えるだろう。

＊

このように本書は、作品集としての表現にも徳岡らしさを反映させた、充実した作品集になっている。そこには、徳岡の長年の旺盛な設計活動がもたらした一つの境地が、存分に表現されていると言える。

（かさはら かずと 京都工芸繊維大学大学院 助教）

お知らせ information

## ▶「バウハウス・デッサウ展」

1919年にドイツのヴァイマールに誕生した造形芸術学校、バウハウス。ヴァイマール、デッサウ、ベルリンと拠点を変えて活動し、ナチスの台頭とともに1933年に閉校を余儀なくされた。しかし今も、デザインや建築に大きな影響を与え続けている。

浜松市美術館は、創設者ヴァルター・グロピウスの理想がより具体化されたデッサウ期に焦点を当て、「バウハウスとその時代」「デッサウのバウハウス」「建築」の3部構成で、バウハウス・デッサウ財団のコレクションから、カンディンスキーやクレーらマイスターによる教育の成果、工房によるプロダクトの数々、専門性の高い建築、デザインにかかわる資料等々、映像を含め約260点を紹介する。



カール・マルクス
「灰色とばら色」
マノリ社のポスター原案
ヨースト・シュミットの授業での演習
Bauhaus Dessau Foundation

会　期　2008年7月29日～**9**月**7**日(日)
9：30～18：00
休館日8/11
会　場　浜松市美術館　TEL.053-454-6801
静岡県浜松市中区松城町100-1
観覧料　1200円、高校生600円、中学以下無料

## ▶「昭和を白黒（モノクロ）で旅する 薗部澄写真展」

東京丸ノ内駅舎の保存・復原工事に伴い、現在、東京ステーションギャラリーは休館し、2012年の再オープンに向けて会場を替えて美術館活動は継続している。

旧新橋停車場で開催する東京ステーションギャラリーの展覧会では、薗部澄（そのべ・きよし・1921～1996）を取り上げる。

昭和30年代を中心に薗部が撮影した都会の風景、農村の暮らし、鉄道のある風景など80点の白黒写真とともに、同時代の駄玩具や学校生活資料で展覧会場は構成されており、戦後復興から高度成長期にかけての日本の姿が展開される。


「新橋駅から」昭和24年10月
財団法人日本カメラ財団蔵

会　期　2008年6月17日～**9**月**15**日(月・祝)
11：00～18：00　月曜日休館
会　場　旧新橋停車場・鉄道歴史展示室
東京都港区東新橋1-5-3
TEL.　03-3572-1872
入　場　無料

## ▶「KAZARI(かざり)日本美の情熱」

日本人の、時には実用性を度外視するほどの「かざる」情熱は、日本の文化を形成する上で大きな原動力となってきた。

本展では、縄文時代から現代に至るまで時代を超え、用と美、聖と俗が渾然一体となり展開した日本における「かざり」の世界を、絵画、工芸、芸能などの分野を超えた斬新な展示構成により紹介する。


黒漆塗執金剛杵形兜（くろうるしぬりしっこんごうしょがたかぶと）
靖国神社遊就館
江戸時代（17世紀）

会　期　2008年8月2日～**9**月**15**日(月・祝)
10：00～18：00(金曜は19：30まで)
月曜日休館
会　場　京都文化博物館 TEL.075-222-0888
京都市中京区三条高倉
入場料　1000円、大高生700円、中小生400円
招待券は日本建築協会(TEL.06-6946-6981)へ。

## ▶「蘇る記憶」 ～下絵に残された真実～

素描や下絵は、本画では見られない画家の苦悩や迷い、工夫などをたどることができ、制作過程を知る手がかりとなる。松柏美術館の収蔵作品展では、上村松園・松篁・淳之が残している本画約10点と素描や下絵50点を公開し、画家の素顔に迫る。


上村松園「花がたみ」
大正4年制作

会　期　2008年8月5日～**9**月**28**日(日)
10：00～17：00
月曜日休館・9/15は開館
会　場　松柏美術館　TEL.0742-41-6666
奈良市登美ケ丘2-1-4
入館料　高大生・大人800円、小中生400円
展　示　松園―楊貴妃（本画と下絵）ほか
松篁―芥子（本画と下絵）、素描
淳之―小千鳥、水辺の朝、素描
招待券は日本建築協会(TEL.06-6946-6981)へ。

## ▶2008イタリア・ボローニャ国際絵本原画展

1978年以来、西宮市大谷記念美術館で毎年開催しているこの展覧会は、イタリアの古都ボローニャ市で開催される子どもの本専門の国際見本市、ボローニャ児童図書展に併設された絵本原画コンクール展入選作品で構成されている。

今年の公募展には54カ国2598名が応募し、日本人20名を含む23カ国99名の作家が入選した。特別展示では2007年スロヴァキアで開催された「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」でグランプリを受賞したドイツのイラストレーター、アイナール・トゥルコウスキィの原画19点を紹介する。



ヴェレンティーナ・ラヴァーニ「赤ずきんちゃん」

会　期　2008年 8 月23日(土)～ 9 月28日(日)
10：00～17：00(金曜は19：00まで)
水曜日休館

会　場　西宮市大谷記念美術館
西宮市中浜町4-38
阪神電車「香櫨園」駅南西徒歩 6 分

入館料　800円、高大生600円、小中生400円

招待券は日本建築協会(TEL.06-6946-6981)へ。

## ▶トレース・エレメンツ ―日豪の写真メディアにおける精神と記憶

白黒写真から映像作品、インタラクティブなヴィディオ・インスタレーションまでを含む写真メディアの伝統と革新を横断する本展。10人のアーティストの実践における「トレース(痕跡)」の現代性と文化的な共鳴を探る。

会　期　2008年 7 月19日～10月13日(月・祝)
11：00～19：00(金・土は20：00まで)
月曜日休館(祝日の場合は開館)
8 / 3 は全館休館

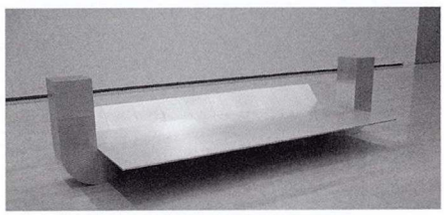
会　場　東京オペラシティアートギャラリー
東京都新宿区西新宿3-20-2

入場料　1000円、大高生800円、中小生600円

出　品　古橋悌二、古屋誠一、松井智惠、志賀理江子、田口和奈、Phillip Brophy、Jane Burton、Alex Davies、Genevieve Grieves、Sophie Kahn

## ▶「ニュー・コレクション―新しい美術との出会い」

兵庫県立美術館2008年度コレクション展Ⅱでは、昨年度新しく収蔵した作品11点を特集する。また、学芸員による作品の修復講座やギャラリートーク「版画の技法」などひと味違った関連事業も用意されている。



清水九兵衛《FIGURE11》 1985年

会　期　2008年 7 月12日～11月 9 日(日)
10：00～18：00(特別展開催中は、金・土曜日は20：00まで)
月曜日休館(祝日の場合は開館)、特別開館日 9 /22、10/14

会　場　兵庫県立美術館 常設展示室
神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

観覧料　500円、大高生400円、中小生250円

展　示　新収蔵品として、菅井汲《カドミウム・レッド 3 ― 4》清水九兵衛《FIGURE11》田村孝之助《夏》など。
小企画として、梶滋・久保極の彫刻

招待券は日本建築協会(TEL.06-6946-6981)へ。

## ▶日新火災100周年記念写真コンテスト

今年 7 月に創立100周年を迎える日新火災海上保険㈱は、記念事業として写真コンテストを開催する。入賞発表は今年10月。

応募資格　一般及び学生(プロは不可)

テ ー マ　「わたしが感じる“安心”、“やすらぎ”」―人物、動物、もの、建造物、自然の風景など―

応募方法　応募用紙に、氏名／年齢／性別／職業(学校名)／住所／電話／作品のタイトル／撮影方法／撮影場所／撮影日／作品へのコメントを記入し、写真の裏に添付のうえ、コンテスト事務局へ郵送する。
応募用紙は、ダウンロード可。
http：//www.nisshinfire.co.jp/thanks100

応募期間　2008年 5 月 1 日～ 9 月30日

審査委員　川合麻紀(自然・動物写真家)＋社内審査委員

入賞賞金　最優秀賞 1 点30万円、優秀賞 5 点10万円、佳作10点 2 万円

応 募 先　日新火災100周年記念写真コンテスト事務局　TEL.03-5444-6721
〒105-0014　東京都港区芝3-40-4

## ▶旧軽井沢で10月に建築ワークショップVol.5

旧軽井沢に建つ脇田美術館に隣接する画家・脇田和のアトリエ山荘は、1970年に脇田の友人で建築家の吉村順三の設計により建てられたもの。脇田はここで多くのインスピレーションを得て数々の作品を描いた。山荘は38年の時を経た今も、画家が過ごしていた当時のまま保存されている。

このアトリエ山荘の一般公開と、ゲスト講師を招いて様々な視点と角度から「建築を考える」定期的な勉強会が開催される。参加申し込み受け付けは 8 月 1 日から始まっている。

日　時　2008年10月11日(土)13：00から
・シンポジウム→懇談会
・アトリエも公開

会　場　脇田美術館
長野県北佐久郡軽井沢町旧道1570-4

定　員　150名(事前申込要)

参加費　3500円(ドリンク付、展覧会観覧料)

ゲスト　川添　登(建築評論家)
三沢　浩(建築家)
松隈　洋(京都工芸繊維大学准教授)

申込先　脇田美術館　TEL.0267-42-2639



脇田和のアトリエ山荘

## ▶第 5 回NISCイソバンドデザインコンテストのグランプリ



東京誠心調理師専門学校

イソバンド・エスガード・イソダッハの特性を生かした日鉄住金鋼板㈱主催の建築物・構築物(2006年 4 / 1 ～2008年 4 /30竣工)のコンテストには、今年は259件の応募があった。5 月19日の審査(鈴木博之／山本理顕／武田厚・日鉄住金鋼板㈱代表取締役社長)を終えて、グランプリ 1 点、優秀賞 2 点、部門賞 5 点、審査委員賞 3 点が選ばれた。

●グランプリ「東京誠心調理師専門学校」
受賞者―藤田純也、橋本博、吉川理恵
会社―竹中工務店
使用製品―耐火エスガードBL-H

## ▶建設リサイクル法説明会開催

日　時　2008年8月22日(金)13：30～16：30
会　場　大阪府庁新別館4階・多目的ホール
　　大阪市中央区大手前3－1－43
定　員　400名　参加費無料
申込み　①電子申請(http：//www.pref.osaka.jp/kenshi/recycle/)か②FAX06-6944-6810で、大阪府建築指導室審査指導課建築環境・設備グループへ8月20日までに申し込む。

## ▶セーフティネット保障（5号）の指定業種が発表される

平成20年7月1日～平成20年9月30日におけるセーフティネット保証指定業種が発表された。詳しくは下記の国土交通省ホームページで掲載されている。

【セーフティネット保証の概要】　中小企業庁ホームページ／http：//www.chusho.meti.go.jp/kinyu/sefu_net_5gon.htm

【セーフティネット保障に関する問い合わせ先】　最寄りの信用保証協会／http：//www.zenshinhoren.or.jp/access.htm

【リーフレットの掲示場所】　国土交通省ホームページ／http：//www.mlit.go.jp/jutakukentiku/0806630_leaflet_safetynet_ver 4

【リーフレットの送付依頼先】　財団法人建築行政行法センター　行政部庶務課/平野、橋本
TEL.03-5225-7711　E-mail：info@icba.or.jp

## ▶「新しい建築確認手続きの要点」

改定法では、構造計算適合性判定制度の導入、確認審査等に関する指針の制定及びそれに基づく審査の実施等により、建築確認手続きが大きく変わった。

そこで国土交通省では、日本建築行政会議等と協力して新しい建築確認手続きに関する様々な情報を下記のホームページにて掲載し、申請側、審査側双方の実務者等に提供している。

■（財）建築行政情報センターホームページ
http：//www.icba.or.jp/

## ▶「建築仕上診断技術者」資格取得講習案内

(社)建築・設備維持保全推進協会(BELCA)では、ビルデイングドクター<非構造>の資格を取得するのための講習会を開催する。
大阪―2008年10月22日(水)～24日(金)
受講料　50,400円（消費税、テキスト代）
申込み　2008年8月22日までにBELCAへ。
講習会の詳細は、http：//www.belca.or.jp/へ。

## ▶「日本における近代建築の原点―吉田鉄郎の作品:大阪・東京ふたつの中央郵便局庁舎―」

本シンポジウムは、今年5月に富山テレビが放送した、富山出身の建築家・吉田鉄郎のドキュメンタリー番組の鑑賞と製作過程のトーク、東京ですでに開催された同様のシンポジウムの解説を通して、大阪と東京の両中央郵便局庁舎の存在価値の理解を深め、大阪の近代建築保存活用の重要性を考えることを目的として開催される。

●内容（予定）
・仮題「吉田鉄郎ドキュメンタリー映像と解説」／東　亜希子（富山テレビ）
・仮題「大阪・東京ふたつの中央郵便局庁舎」／南　一誠（芝浦工業大学教授・JIA）
・（大阪側として検討中）

司会：橋本健治(JIA近畿支部保存再生部会長)
日　時　2008年9月13日(土)
　　14：00～17：00
会　場　「毎日インテシオ」3階『大阪センター301＋302室』
　　大阪市北区梅田3－4－5
参加料　一般1,000円、学生無料
申込み　当日会場にて先着200名（13：45～）
問合せ　JIA近畿（日本建築家協会近畿支部事務局）／穴井(TEL.06-6229-3371)

## ▶第1回「ゆめづくり まちづくり～ゆめは、人がつくる～」賞募集

●都市づくり部門―環境共生型の都市をめざして、積極的かつ主体的に工夫や配慮に取り組んだ事例。自薦、他薦を問わず。

●アイディア部門―環境共生型の都市をめざして、実現の可能性が高く、効果的かつ独創的なアイディアを募集の対象とする。

応募方法　所定の応募用紙に必要事項を記入し、郵送とEメールとで申し込む。応募用紙はhttp：//kaitekitoshi.jp/からダウンロードできる。
応募締切　2008年8月20日(水)当日消印有効
審査委員　安藤忠雄（建築家）―委員長―／川勝平太(静岡文化芸術大学学長)／岸井隆幸（日本大学理工学部教授）／進士五十八（東京農業大学教授）／真野響子（女優）
問合せ先　快適都市実現委員会事務局：国土交通省近畿地方整備局企画部企画課
　　TEL.06-6942-1141
応募先　〒540-0012　大阪市中央区谷町3-1-18　NS21ビル　NHKプラネット近畿内「ゆめづくり まちづくり賞」係
　　TEL.06-6945-7135

## ▶企業ミュージアムの見学会

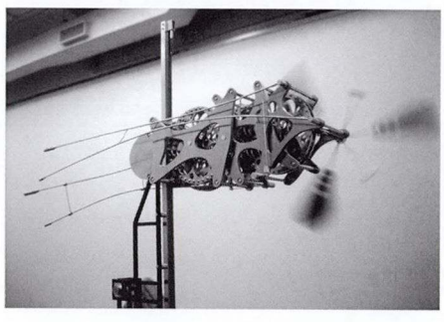
特定非営利活動法人「企業ミュージアムの協会」(理事長・亀田訓生)は、竹中大工道具館、俵美術館、ブラジル移民記念館を訪れる。

日　時　2008年9月2日(火)
集　合　10：15阪急電車「芦屋川」駅改札口　企業ミュージアムの協会旗付近
行　程　10：15俵美術館へ→10：35館内鑑賞→11：50阪急「三宮」駅へ→12：15各自昼食→13：20「三宮」駅西改札口集合→徒歩で竹中大工道具館へ→徒歩でブラジル移民記念館へ（外観のみ見学）→15：30現地解散
定　員　20名
参加費　一般参加1800円
　　ミュージアム会員1500円
申込み　企業ミュージアムの協会事務局
　　TEL&FAX06-6872-0969

## ▶アートスペース虹「動く金属彫刻」

アートスペース虹で8月下旬から開催される彫刻家・永沼理善（ながぬま　ただよし、1967年生まれ）氏の個展には、アルミ合金や真鍮などの金属を主な素材として、作品自体の重力が動力源となり、自重で動く立体作品の展示を予定している。作品にはちょっとした不思議さと、メカニカルでありながら親しみの持てるフォルムや仕草や音を仕組むという。

会　期　2008年8月26日(火)～9月7日(日)
　　11：00～19：00（月曜日休）
会　場　アートスペース虹
　　TEL.075-76-9238
　　京都市東山区三条通神宮道入る東町247　ウェスティン都ホテル西隣



## 総　会

**第1回通常総会**

6月18日（水）16：05～16：33
出席者　佐野理事ほか832名（1,652口委任状含む）
場　所　OMMビル20階　東天紅
議　事（1）平成19年度事業報告（案）の件
（2）平成19年収支決算報告(案)の件
（3）役員選任の件

## 理事会

**第1回通常理事会**

6月4日（水）15：00～15：45
出席者　佐野会長ほか48名(委任状含む)
場　所　OMMビル2階　4号会議室
議　事（1）平成19年度事業報告（案）の件
（2）平成19年度収支決算報告(案)の件
（3）役員選任の件
（4）総会等の開催について

**第1回臨時理事会**

6月22日（日）16：35～16：45
出席者　中井会長ほか52名(委任状含む)
場　所　OMMビル20階　東天紅
議　事（1）会長選任の件
（2）役付役員選任の件
（3）常設委員長並びに常任理事委嘱の件
（4）理事の会務分掌の件

## 評議員会

**第1回定時評議員会**

6月4日（水）14：00～14：35
出席者　佐野会長ほか43名(委任状含む)
場　所　OMMビル2階　4号会議室
議　事（1）評議員会正副議長互選の件
（2）役員（理事・監事）候補者推薦の件
（3）報告事項：平成19年度事業報告（案）の件
（4）報告事項：平成19年度収支決算報告（案）の件

## 編集委員会

**第3回編集委員会**

6月11日（水）18：00～19：30
出席者　設楽委員長ほか5名
議　事（1）7月号「中国支部」・「小林聖心女学院」特集の企画
（2）8月号「建築と景観」特集の企画
（3）9月号「第55回青年技術者」特集
（4）10月号「法制度から見た木造住宅」(仮)特集の企画
（5）11月号「建築ロボット」(仮)特集の企画
（6）12月号「自然と戦う構造」特集の企画
（7）各小委員会・分科会の報告
（8）投稿の検討
（9）収支状況報告

**第3回構造分科会**

6月6日（金）18：00～20：15
出席者　房安幹事ほか4名
議　事（1）「構造の頁」の企画
（2）12月号「自然と戦う構造」特集
（3）情報交換

**第2回設備分科会**

6月4日（水）18：00～20：15
出席者　赤澤幹事ほか6名
議　事（1）「設備の頁」の企画
（2）“測定機器シリーズ”頁の懸案事項
（3）新企画の提案
（4）見学会の提案

**第1回施工材料分科会**

6月17日（火）17：00～18：00
出席者　山岡幹事ほか5名
議　事（1）「建築ロボット」（仮）特集企画検討
（2）今後のスケジュール

**第4回法令分科会**

6月19日（木）15：00～17：00
出席者　谷本幹事ほか5名
議　事（1）「法令コーナー」の企画
（2）10月号法令特集の企画
（3）情報交換

**第3回広告企画小委員会**

6月11日（水）17：00～18：00
出席者　設楽委員長ほか2名
議　事（1）7月号「中国支部」・「小林聖心女学院」特集経過報告
（2）8月号「建築と景観」特集の企画
（3）9月号「第55回青年技術者」特集
（4）11月号「建築ロボット」(仮)特集の企画
（5）広告頁「第一線の建築設計担当者に聞く いち押し建材・設備」シリーズの企画
（6）広告掲載状況
（7）収支状況報告

**第3回10年委員会（一部）**

6月5日（木）16：30～17：30
出席者　設楽編集委員長ほか8名
議　事（1）「現場見学会」実施に向けての細目の打ち合わせ
（2）次回の議題

**第3回10年委員会（二部）**

6月5日（木）20：00～21：30
出席者　設楽編集委員長ほか4名
議　事（1）アイディアコンペ案
（2）次回までの宿題

## 出版委員会

**第3回出版委員会**

6月19日（木）18：00～19：00
出席者　植村委員ほか8名
議　事（1）＜プロのノウハウ＞と特装本の経過報告
（2）進行中のテーマについて
（3）その他

## 建材委員会

**第1回建材委員会**

6月10日（火）17：00～17：40
出席者　松原委員長ほか6名
議　事（1）新委員紹介
（2）平成20年度委員会活動について
（3）その他

## 入会者（敬称略）

〔個人正会員〕
田村　沙映　㈲桃李舎
関谷　英一　㈱鴻池組
影林　督論　㈱安井建築設計事務所
後藤　祥仁　㈱日建設計
久下　武彦　㈱日建設計
西出　知未　積水ハウス㈱

# 第7回 読者と選ぶ「建築と社会」賞入賞発表

「建築と社会」という本誌の趣旨にふさわしい社会性・環境などに配慮した有意義な建築作品や建築にかかわる論文・記事などを顕彰する。選考にあたっては、会員の声を反映し、広く開かれた賞とする。

■第7回選考委員（50音順）
柏木浩一（兵庫県立大学大学院教授）
鈴木克彦（京都工芸繊維大学大学院准教授・「建築と社会」編集委員）
徳矢典子（弁護士・徳矢法律事務所）

論考部門入賞

## 馬籠宿―町並み景観形成の歩み　大脇修二

バブル崩壊後、「空白の10年」などと言われましたが、今やすっかり過去の言葉となってしまったようです。この間、地方の町々はますます画一化され、無個性な景観へと変貌を続けております。地方の顔でもある人々の生活の香りを滲ませた駅前商店街の佇まいの危機。代わってむきだしの倉庫のようなスーパーをはじめとした量販店の無機質な外観のみが圧倒する風景。そんな景観荒廃とも言える状況故？国の景観法にともなう自治体の条例化が顕著であるようです。

思えばそれ以前、高度経済成長以降の乱開発に伴う景観破壊に待ったをかけるべく、各地で発生したのが町並み保存運動でした。ひいてはそれが、集落それ自体が文化財指定（重要伝統的建造物群保存地区）への原動力となったと思われます。

過去30余年、馬籠宿もこの理念に添って参りましたが、結局、頻発する宿場火災によってすでに「江戸の記憶」を失っていた馬籠の進む道は、いわゆる「開発的保存」という矛盾した概念？に集約されざるを得なかったようです。

それにしても古い町並みが今何故？そう言えば現在に遺る建築遺構等は、いずれも日本の近代化から見放された地域。もしくは開発の対象外として取り残されていたが故に今再認識されているという事実。これはもう歴史の皮肉としか言いようがないのでしょうか。



**大脇修二**　おおわき・しゅうじ
1941・島崎藤村のふるさと長野県木曽馬籠（現・岐阜県中津川市）に生まれる
1975・文藝春秋社「週刊文春」記者を経て帰郷
1995・財団法人藤村記念館理事長
2008・5月退職。現在同財団顧問

2007年3月号掲載

論考部門入賞

## 大正から昭和へ、日本建築協会が果たした役割の一断面　坂本勝比古

**坂本勝比古**　さかもと・かつひこ
1949年　旧制神戸工業専門学校卒業
　　神戸市役所勤務を経て
1980年　千葉大学工学部教授
1991年　神戸芸術工科大学教授
1997年　同　名誉教授
1996年　第22回明治村賞受賞



日本建築協会が大正6年（1917）に創立されてから、90余年が経過している。その90周年記念誌に一文を書くようにとの設楽編集委員長からのご指名に、日数の関係からいったんは辞退いたしたいと考えたが、90年誌に寄稿できることは光栄だと思い、小論を草することとした。

その小論が今回受賞の対象に選ばれたことは、思ってもみなかったので大変ありがたく、篤くお礼を申し上げたい。建築協会と小生との結びつきはもう50余年に及ぶが、いつもこの機関誌の真面目な取り組みに敬意を表している。

顧みると小生の近代建築行脚のなかで思い出深い、二人の先生との出会いと、いつまでも清く美しい大阪瓦斯ビルの設計者のことを本稿に取り上げさせていただいた。

村野藤吾、石川純一郎両先生のプロフィールは、筆者にとって貴重な思い出である。とくに村野先生にはお忙しいなか、幾度も時間を割いていただき、お話を伺うことができた。小さな文字で、びっしりと書き込まれた岩波文庫のマルクス資本論をみせていただいたときの驚きは今も忘れられない。

また、建築協会の初期の頃の桜ヶ丘住宅改造博覧会は、協会にとって永遠の金字塔であろう。

これからも建築協会のますますの発展を希う次第である。

2007年4月号掲載

論考部門入賞

# 建築系雑誌が伝えるもの　本多友常

このたび評価をいただいた論考において、人々が思考停止の状態に追い込まれつつある時代的な危惧を声高に指摘させていただいた。しかし耐震偽装問題が引き起こした現実はそれを軽く飛び越え、物理的な力として、人々の常識的な判断力を抑制する方向に動きかねない現象が生じている。

最近経験したことであるが、1階がコンクリート造、2階が木造の40㎡弱の住宅に、建築確認申請が下りるまでに数か月がかかってしまった。対応を含めて半年を越したのだった。混構造は第三者チェックを必要とする、という条文にまつわるチェック項目に逆らうすべが無かったからだ。しかし誰が考えても30mを超える高層ビルの安全性チェックと同等であろうはずがない。大混乱のあげく建築主への信頼は失墜し、この仕事にかかわった人々は法の枠組みを感得し、諦めの無力感を身体に埋め込まれた。

いったい私たちが守ろうとしているのは何なのだろうか。この経緯において、法的に間違った判断をした人が存在しないことが問題の深さを物語っている。

建築は本来、おおらかで自由な発想のもとに築き上げられる文化の源であった。そこに育まれる豊かな感性を枯渇させないためにも、直観力を研ぎ澄まして「おかしいことはおかしい！」と叫び続けることが必要だと感じている。

2007年8月号掲載



**本多友常**　ほんだ・ともつね
1972年　早稲田大学大学院修了
1977年～1979年　Architectural Association School of Architecture卒業
現　在　国立大学法人和歌山大学システム工学部教授

---

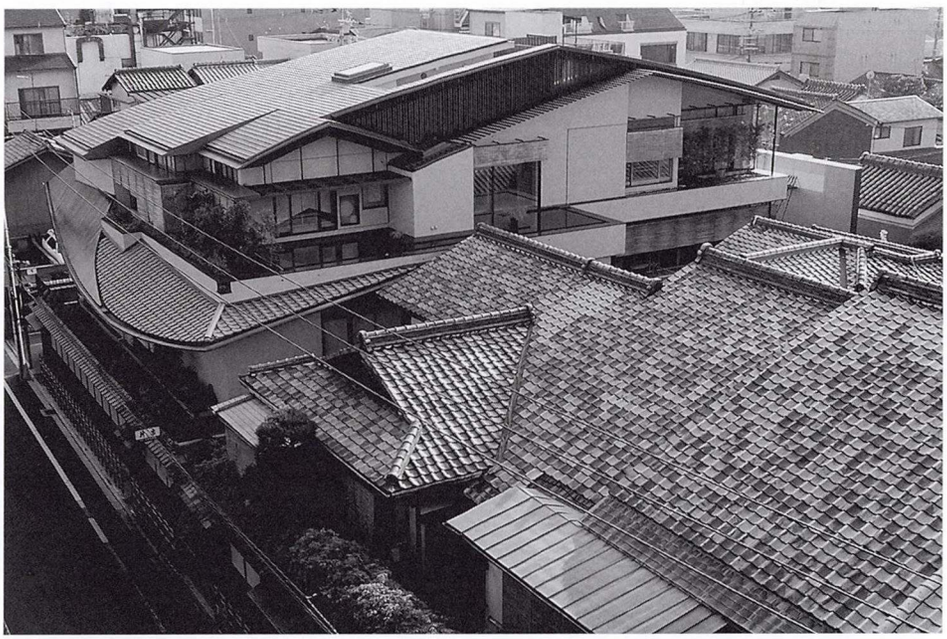
作品部門入賞

# 柊家新館

文政元年（1818）創業の老舗旅館「柊家」の新館です。敷地周辺は創業当時とは全く異なり、高層マンションが建ち、騒音もひどく、昔ながらの構法で計画を進めることは法規上も困難です。しかし、これからの京都が追求すべき社会や環境には、従来どおりの問題に対する配慮や工夫に加え、伝統的文化や技術を継承し、さらに発展させるような試みも必要だと考えています。

内観においても様々なことを試みていますが、特に外観においては、旧館から続く塀と植栽を新館まで延長し、その上に笹の葉を模した屋根を載せています。同一の屋根の上で、素材を旧館の瓦から硫化燻し銅板へと切り替え、形状を滑らかに空へと繋げていくことで、旧館（2階建）から新館（3階建）へと歴史が引き継がれ、伸びていく姿を現しています。

■柊家新館
所在地－京都市中京区麩屋町姉小路上ル
建築主－柊家旅館
設計監理－エイト・エフェクト
施工－清水建設・熊倉工務店共同企業体

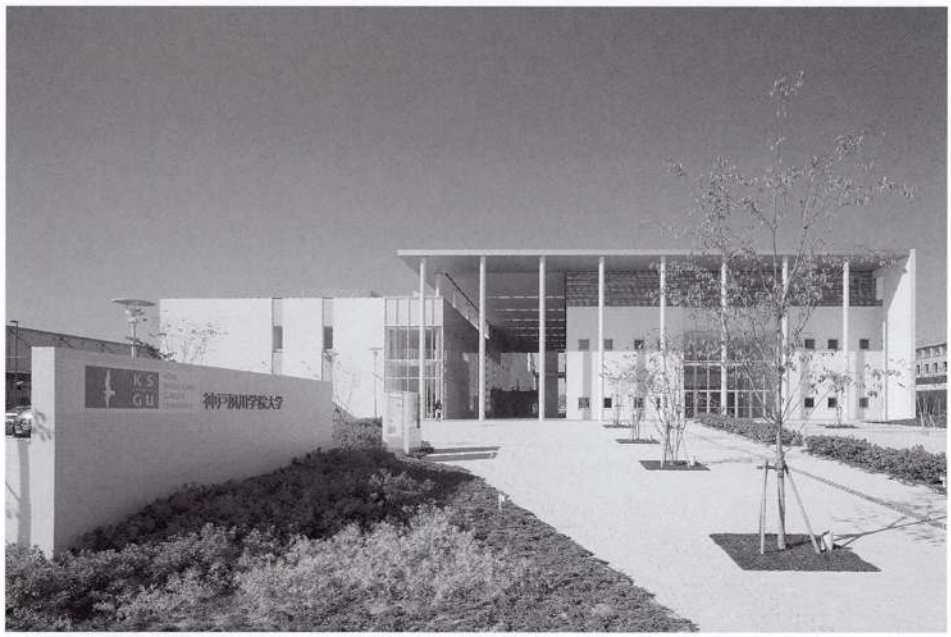




**道田　淳**　みちだ・じゅん
1995　芝浦工業大学大学院建設工学科 修了
1996　MIHO MUSEUM設計共同体に入社
2001～　有限会社エイト・エフェクト代表

作品部門入賞

# 神戸夙川学院大学




2007年春、神戸ポートアイランドに4大学が集い、新しい文教地区が誕生しました。その一翼を担うべく、学校法人夙川学院が観光のプロを育成する教育機関として設立した新しい大学です。

海に向かう敷地の中心軸に「キャニオン」と呼ぶオープンスペースを重ね、ここから新しい大学のすべてが展開していく全体構成としました。建築は、熱負荷の高い南側に耐震壁を集中し、一定の光環境を得られる北面を大きく開放することで、六甲山系を背景とした文教地区全体とのダイナミックな一体感を実現しました。外装は、陽の光や海のきらめきを吸収し、時の流れや季節の変化を映し出す白磁のタイルをまとい、学生たちの日々の営みと、4年間を通しての人間形成という二つの時空を彩ります。

フェンスやバリケードの無いキャンパスは、海際のプロムナード、神戸港との一体感が魅力であり、地域の皆さんにも開かれた都市施設となっています。

2007年7月号掲載



**梅田善愛** うめだ・よしちか
1989年　株式会社竹中工務店入社
現在　大阪本店設計部第4部門
過去の作品―ラピーヌ服飾研究所、南港海事ビル、道頓堀岡嶋ビルほか

■神戸夙川学院大学
所在地―兵庫県神戸市中央区港島1丁目3―11
建築主―学校法人 夙川学院
設計・監理―株式会社 竹中工務店
施工者―株式会社 竹中工務店

---

作品部門入賞

# 十月桜の家



■十月桜の家
所在地―大阪府
建築主―堀部圭一・直子
設計者―堀部直子
監理者―堀部直子
施工者―株式会社橋本工務店
撮影者―平井広行

2007年9月号掲載

敷地の周りには住宅が密集している上、西側の駐車場にいずれ建物が建つであろうこと、北隣が新聞販売店であり、早朝から営業されることを考え、中庭を設け、敷地全体を壁で囲み、外部に対しては閉じることにしました。しかし、東側の細い里道に圧迫感を与えることは避けたかったので、できる限り高さを押さえ、ポリカーボネイト板を用いてお互いの気配は感じられるようにし、中庭に植えた十月桜は道往く人からも楽しめるようにしています。

一方、内部空間はできるだけ広がりを感じられるよう、各部屋を扉で区切らず奥行きと連続性を持たせ、中庭に向けて大きな開口部を設けました。2階ではこの開口部を開け放つことで、デッキは内部空間の延長となり、居間と一体化した半戸外で桜を楽しむことができます。

意匠的にも機能的にも、余分なものを削ぎ落とすことで、より際立たった空間にすることができたと考えています。

**堀部直子** ほりべ・なおこ
1995　近畿大学理工学部建築学科卒業
1995～1996　坂本昭・設計工房CASA
1996～1997　岡崎善久建築設計事務所
1998～1999　K.ASSOCIATES/Architects
2003　堀部直子建築設計事務所設立



選考委員講評

弁護士

## 徳矢典子

**馬籠宿―町並み景観形成の歩み**　馬籠宿は「木曽路の歴史的景観形成のなかで、例外的な経緯を経て現在に至った」として、馬籠宿の歴史から保存と開発の様子を浮き彫りにした上で、「保存理念の再構築を」との提案は、各地の町並み保存事業計画に携わる方々に参考にしていただきたい論考である。

**大正から昭和へ、日本建築協会が果たした役割の一断面**　日本建築協会創立90周年にふさわしい、示唆に富む力作である。同協会の創立以来一貫した主張は住宅改造への取り組みであったとのことで、箕面桜ヶ丘の住宅改造博覧会が、官の助成を受けない民の行事であったこと、地主の協力とともに予算の約半分が寄付でまかなわれたこと、また展示ではなく居住する建物であり、まちづくりの博覧会であったことなど、協会のリーダーシップの強さとともに、大阪庶民の面目躍如たる姿を浮き彫りにしている。

**建築系雑誌が伝えるもの**　読めば読むほど、建築系雑誌の果たす役割の重大さを知る論考である。「作家主義的なジャーナルの編集方針が、課題発見的な編集方針に変化している」ことを評価しつつも、地球規模的な課題に拡散し、それに呼応して内容の議論が希薄化することに警鐘を鳴らし、「地域に根ざしたアイデンティティが弱まりつつある気配が心配される」との指摘は大切なことだと感じた次第である。

**柊家新館**　文政元年創業の老舗旅館「柊家」の一部を解体して、そこに新館が増築されたものである。創業時に比べ周辺環境は激変し、また複雑な規制があるなかで、気品溢れる広々とした建物空間が創出されていることに驚きすら覚える。いわゆる「雪吊り構造」で無柱で自然素材による室内設計が可能になったとのこと。この手法は、京都の歴史的風景を守りつつ、安全で快適で新鮮な感覚にひたれる景観づくりのモデルになるのではないかと評価するものである。

**神戸夙川学院大学**　シンプルでいて存在感溢れる建物は、単にデザインの美しさや機能性のみならず、神戸港や六甲山を背景に持つ新しい神戸の雰囲気をつくり出している。また、建物内のキャニオンと呼ばれる空間は、居ながらにして自然の美しさやさまざまな変化を豊かに感じ取れる役割を果たしているように思われ、感性豊かな人材育成が期待される。

**十月桜の家**　一本のか細い十月桜の木が、効果を存分に発揮しているといえる作品で、素朴で美しい。手を加えない自然体の一本の木が庭に置かれたことによって、建物の考え抜かれた縦・横の直線に「和み」をかもし出しており、工夫の極みを感じた。

選考委員講評

兵庫県立大学大学院教授

## 柏木浩一

近年、一般のメディアは言うに及ばず、建築メディアにも「表層的なもの」が氾濫する。論考しかり、建築作品しかりである。理解しやすいもののみが条件反射的に歓迎され、深いところを求めたために難解となったものは、その判読の煩わしさゆえに切り捨てられる。そんな風潮を憂えるなか、今般嬉しいことに、限られた情報ながら掲載誌を精読するなかにキラリと光るものを見出すことができた。

まず、論考**「建築系雑誌が伝えるもの」**は、建築ジャーナリズムという小さな舞台に繰り広げられる壮大なメディア考に始まり、メディアと時代、メディアと大衆との問題点を洗い出し、メディアの今日的な役割までに言及している点である。ともすれば総花的でお飾り的になりがちな特集記事の総論としては、筋の通った鋭い論考といえる。論考**「馬籠宿―町並み景観形成の歩み」**は、世界遺産継続審査を契機として、今までの重要伝統的建造物保存地区の保存概念に、その地方全体が持つ歴史的・文化的な文脈までをも俯瞰するという新たな視野を、島崎藤村『夜明け前』を基軸に精緻に語った点である。論考**「大正から昭和へ、日本建築協会が果たした役割の一断面」**は、４頁という誌面の制約のなか、わずか６つの切り口（１つのイベント、２つの組織活動、３つの建築家設計活動）で、激動の、モダニズム台頭期の関西建築界動向を見事に総括した点である。

建築作品**「柊家新館」**は、防火地域で周囲にマンション等が乱立という、和風建築の立地としては不可能ともいえる劣悪環境にあって、雪吊り構造という大技を仕掛けることで、和の必須事項である自然の取り込みに新たな可能性を提示した点である。このあり方は、一特殊解にとどまらず、都心型和風建築が生き延びるための普遍解を示唆しているのかもしれない。建築作品**「神戸夙川学院大学」**は、４大学がハード面、ソフト面で相互交流し、全国でも珍しい開かれたキャンパス群を形成したうちの１つ。シナジー効果の期待できる素晴らしい開発趣旨に則り、細長い敷地を縦断するオープンスペース「キャニオン」を巧みに配した点である。建築作品**「十月桜の家」**は、ともすれば囲み配置が陥る周辺環境からの隔絶を、半透過素材を使い内外相互浸透させることで避けている。狭小敷地でも、何とか建築と周辺環境（社会）との良好な関係を築こうと腐心している点にある。

選考委員講評

京都工芸繊維大学大学院准教授

## 鈴木克彦

本年度で第７回を迎えた読者と選ぶ「建築と社会」賞は、本誌2007年１月号から12月号に掲載された論考・記事および建築作品が選考対象となったが、編集委員会からは読者からの投票結果を基にして論考・記事10点、建築作品12点の推薦があった。

その後に開催された選考委員会では、選考委員から新たに推薦があった論考２点、建築作品５点を加えて、個々に慎重な審議を行い、選考委員全員が授賞にふさわしいと評価に至った論考と建築作品を選出した。

まず、論考部門であるが、**「馬籠宿―町並み景観形成の歩み」**では、文豪島崎藤村のふるさとであった宿場町での保存と開発の狭間で揺れ続けた40年の歴史が描かれている。その迫力ある記述は町を見守ってきた者こそが表現できるものであり、景観時代における町並み保存のあり方に貴重な示唆を与えている。また、日本建築協会創立90周年を記念して寄せられた**「大正から昭和へ、日本建築協会が果たした役割の一断面」**も、近代建築史上における日本建築協会の存在の重みが伝わってくる内容であり、長年の研究成果によってまとめられた貴重な論考である。**「建築系雑誌が伝えるもの」**は、建築ジャーナルがファッション化する傾向が強いなか、現代的課題を身近な問題として描き出していく役割を担ったメディアのあり方を論じたものであり、その内容は高く評価できるものである。

一方、作品部門では京都市の都心部に増築された**「柊家新館」**が印象的であった。マンションが林立する状況下で歴史的町並みを保全していく仕組みが問われているなか、古都の町並みに相応しい老舗旅館のあり方に見事に答えを提示している。旧館とも違和感なく溶け込みながら開放的な大広間を生み出した設計技術は、十分に賞に値するものである。**「神戸夙川学院大学」**は、海上新都市として生まれ変わろうとしている神戸ポートアイランドに計画されたキャンパスゾーンにあって、シンボル的な存在となっている。キャンパスは段階的に整備されていく計画であり、まちづくりに貢献する、地域に開かれた大学として今後の展開を見守りたい。また「十月桜の家」でも、密集市街地での敷地外部との関係性に新鮮な感覚で新たなデザイン解を提示しており、都市住居の望ましい姿を具現化したものとして「建築と社会」賞にふさわしい作品である。

日本建築協会企画・販売

# 出版図書一覧

1917年３月に創設された日本建築協会（当時・関西建築協会）は、すでに昭和初期には大阪近辺で住宅博覧会や建築講演会を開く一方、当時は入手しにくかった建築の情報を図書の出版という形で会員に提供していた。

＊

以後、創立周年記念事業として、その時代の動きをとらえて単行本を出版している。

50周年、60周年、70周年、そして80周年に、図書の出版が企画され、現在も継続して発行・販売されている出版物は、以下のとおり。

＊

購入希望者は、㈳日本建築協会事務局（TEL06―6946―6981、FAX06―6946―6984）まで。

日本建築協会創立70周年記念出版

## 住宅近代化への歩みと日本建築協会 1988年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会創立75周年記念出版

## 工高生デザインコンクール入選作品集 1992年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格2,000円

## 昭和生まれ　関西の建築家50 1987年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会建築クラブ朝食会300回記念講演記録集

## 講演記録集 話のはなし 1997年

Ｂ６判５分冊　企画：日本建築協会建築クラブ　販売価格2,500円（税・送料込み）

民間（旧四会）連合協定

## 工事請負契約約款（平成19年６月改訂）

工事請負契約書・仲裁合意書・契約書使用上の留意事項・建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律第13条および省令第4条に基づく書面

頒布単位：２部１単位とする

価　　格：１単位700円（税込）送料は実費

日本建築協会事務局（06-6946-6981）で販売

### 近刊 平成19年8月30日発行

## 住宅エクステリアの100ポイント

（計画・設計・施工・メンテナンス）

成長するエクステリア業界の技術者に求められる広範な知識・考え方を、多数の写真と図を使って体系的に整理した初めての書

著者　藤山　宏

Ａ５判　232ページ

定価　2,500円＋税

### 最新刊 平成20年3月30日発行

## 建築主が納得する住まいづくり

―Q&Aでわかる技術的ポイント―

現場マン必読!!　顧客満足度UP！　クレームゼロの方法とは？

著者　玉水　新吾

四六判　224ページ

定価　1,900円＋税

日本建築協会創立60周年記念事業「建築技術選書」姉妹篇・四六判２色刷イラスト入

## 〈プロのノウハウ〉シリーズ

企画：日本建築協会　発行：学芸出版社　本体価格￥1,600～￥2,700

- 衛生設備のトラブル50　建築設備トラブル研究会
- 鉄筋工事・本音の現場学　荒川治徳
- 建築と音のトラブル　中川清ほか
- 木造住宅監理の話　山田　修
- 第二版 環境と共生する建築25のキーワード　大西正宣
- 木造住宅のしくみ　在来工法の基本と応用　浅野平八・東　敏博
- インテリアコーディネートの100ポイント　町田ひろ子監修／松本　茂・村元俊子著
- 木づくりの常識非常識　上村　武
- 建築トラブルにみる常識非常識　荒川治徳
- 第三版　都市計画法を読みこなすコツ　高木任之
- 建築主が納得する住まいづくり　玉水新吾
- 建築の現場管理システム　伊東貞夫
- 新版コンクリート工事のチェックポイント100　加賀秀治
- 建築基準法の性能規定を読みこなすコツ　高木任之
- 建築工事の祭式　「建築工事の祭式」編集委員会
- 飛躍する構造デザイン　渡辺邦夫
- 改訂版　建築物の消防法を読みこなすコツ　高木任之
- プロが教えるキッチン設計のコツ　井上まるみ
- 現場で学ぶ　住まいの雨仕舞い　玉水新吾
- 住宅エクステリアの100ポイント　藤山　宏
- 第三版　建築基準法を読みこなすコツ　高木任之

日本建築協会創立70周年記念事業・B5判

## 選書特装版

企画・日本建築協会　発行・学芸出版社　本体価格￥3,000～￥4,000

- 水にまつわるトラブルの事例・解決策〈建築篇〉　「建築漏水」編集委員会
- 水にまつわるトラブルの事例・解決策〈設備篇〉　「設備漏水」編集委員会
- 建物の汚れ－トラブル事例と解決策　「建物の汚れ」編集委員会
- 建築デザインのための構造計画　須賀好富
- 入門・建築積算　生島道春
- 建物の結露－トラブル事例と解決策　「建物の結露」編集委員会

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見２丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

www.naniwa.com
We have hope

■印刷事業　ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業　SPプランニング・コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作

株式会社NPCコーポレーション

本　社　〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel:(06)6351-7271(代) fax:(06)6352-7479
第二ビル　〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel:(06)6351-0128(代) fax:(06)6351-0208
東京支社　〒105-0004 東京都港区浜松町1-2-1 一光浜松町ビル7F
tel:(03)3433-5211(代) fax:(03)5776-7733
（旧社名ナニワ印刷㈱、日本データネット㈱）

地球環境を守り、100年建築に貢献する
NACL のアルミ表面処理
株式会社日本電気化学工業所
http://nacl.jp　E-mail:sc@nacl.co.jp
本部営業部　〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLﾋﾞﾙ2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所　〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目7-2 東京NACLﾋﾞﾙ
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

# デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・京丹後（0772）72－2220
舞　鶴（0773）76－0133

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252－6000

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443－6181

# デザインを「魅せる」品質が「見える」耐火被覆材

# ニュータイカライト

ゾノトライト系けい酸カルシウム耐火被覆板

www.jic-bestork.co.jp



施工例（倉庫）



はり型　施工例



角柱　施工例



丸柱　施工例

厚さ 従来品より **40**％ 薄く！

コスト 従来品より **30**％ 廉価に！

耐火被覆板ニュータイカライトは、
被覆厚さを従来品より４０%削減の厚さ１５mmを実現。
柱・はりの納まりを小さくすることで、空間を広く活用できます。
また、従来品３０%のコスト削減を図りました。

## 免震装置用耐火被覆システム

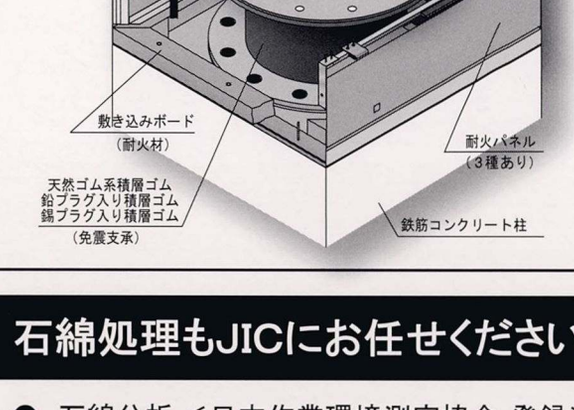
## めんしんたすけシリーズ

●変形追従型
４面の耐火パネルをスプリングで連結し、大変形への追従性と復元性を確保しています。

●メンテナンス
パネルをはずすことなく確認できるので、定期的な点検や地震後のメンテナンスが容易です。

●耐火性能
柱３時間耐火の認定を取得し、高層建築物でも採用できます。

●意匠性
3種類の耐火板仕様からご選択いただけます。




## 石綿処理もJICにお任せください

- 石綿分析 ＜日本作業環境測定協会 登録＞
- 石綿除去工事 ＜BCJ－31＞
- 石綿含有煙突ライニング材除去工事

### 事業所・営業所

大　阪　TEL. 06-6633-7322　FAX. 06-6643-7480
東　京　TEL. 03-3553-7531　FAX. 03-3553-4530
名古屋　TEL. 052-243-0061　FAX. 052-243-0063
福　岡　TEL. 092-452-8651　FAX. 092-452-8671
営業所：仙台・岐阜

### 事業内容

- 鉄骨耐火被覆材
- カーテンウォール耐火ボード
- 不燃人造木材・不燃断熱材
- 調湿建材・煙突ライニング材、他

JIC
日本インシュレーション株式会社